

---

# 中二病な俺の異世界日記。

羽月 紫苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中二病な俺の異世界日記。

### 【Nコード】

N9375U

### 【作者名】

羽月 紫苑

### 【あらすじ】

ひきこもりで中二病で病んでる俺は、リア充そうなコンビニの店員にイラついたせいでトラックに轢かれ、なぜか異世界へトリップした。トリップした先は、、魔法と武力の国、フェルトシア王国、、。中二病な俺は自分に魔法の才能があることに気付き、この国こそ自分が上手く生きていける国だ！！と思い、期待に胸を膨らませる。

王国の第二王女との恋愛イベントを目指す俺だが、現実はそう甘くない。

ちなみに、魔王はいません。基本平和です。主人公がもとの世界に帰ろうともしません。主人公はこの世界こそが自分に合ってる世界だと思っています。

\*1：2011年9月24日、無事完結致しました。

\*2：サブタイトルが英語表記ですが、物語と一切関係ありませんので「英語があんまり得意じゃない…」と言う方も、全然気にしないでください！！作者自体、英語は大不得意教科です…。

## Prologue . . .

世界の人々全てが、幸せ、だとは限らない。、幸せ、な奴がいれば、必ず、不幸せ、な奴もいる。

……そんなかつこいい言葉で始めたのは、たぶん俺が中二病だから。

かつこわるいだろ？中3にもなって、ひきこもりの中二病だなんて。

でも、俺は自分が、病んでる、って自覚してる。…自覚してるからどうなんだって話だけど。

……自己紹介が遅れた。俺は神谷晃紀<sup>かみや せいき</sup>。普通の公立に通う…通っていた中学三年生だ。

通っていた、と過去形にしたのは、俺が今ひきこもりだから。ここ3ヶ月、学校に行っていない。

でも、コンビニとかには行く。……中途半端なひきこもりだろう？なんでひきこもりになったのか、なんて、聞かないでほしい。気付くと、学校に行くのが面倒臭くなっていったんだから。

……言い訳させて貰うと、俺の周りの奴はみんな学園生活enj oyしてるように見えて、俺より元凶も交友関係も全部上手く言ってるように見えて……etc . . . というカンジだ。

病んでる奴にしか、分かんない感情だと思う……たぶん。

まあ、そんなひきこもりで中二病で病んでる俺に、めっちゃめっちゃ中二病な出来事が起きたのは、ひきこもりはじめてから3ヶ月と20日目のことだった。

## Prologue . . . (後書き)

… 作者が現在病んでいるために(笑)なんとなく書き始めた小説です。

駄文をお許してください。

ちよつと…暗くてすいません(笑)。

この小説、よろしく願います。

「あつ、ちよ、おいおいおいおい、待て！ あ、あああ！ダメー  
ジが……ッ！ あ、ああーっ！死んだ……」

カップラーメンや菓子のゴミ、漫画やゲームが散乱する部屋に、  
俺の叫び声が響いた。

……仕方ないじゃん、ラスボスの残りHP30ってところで、負けた  
んだから。……違う？そこじゃない？なんでゴミだめなのかって？  
そんなの、ゴミ出しがめんどいからに決まってる。

母さんは呆れて俺の部屋の掃除してくれないから、俺の部屋はい  
つも汚い。

「……きつたねえな」

俺は部屋を見まわして呟いた。まさに、“腐界”だ。  
そして、もうひとつ。食料がないことに気付く。

「……コンビニ行くかあ」

俺はそう呟いて、一週間ぶりに外へ出た。

7月の日の光は、不健康な俺の肌の色に似合わない。外へ出て数  
分でバテる俺。

……仕方ねえじゃん、俺インドアなんだもん。

「……あちい……」

バテながらも、俺は近くのコンビニにたどり着いた。

カップラーメンや菓子など、大量に買い込む。青いエプロンをし

たレジの店員が、スウェット姿の俺を見て眉をひそめた。

……見るからにリア充そうな店員だ。薬指には指輪が光っている。  
……後から考えたら、馬鹿だと思う。でも、この時の俺はリア充な店員を見て機嫌が悪かった。

だから、ろくに前を見ないで歩いてたんだ。

俺が前を向いたのは、

キキイイイイイイツ!!

というブレーキ音がしてからだった。……そう、皆様の想像通り、俺の前には大型トラック。

一秒後、『死ぬんだ』ということと思う前に、俺の意識は飛んだ。

\*\*\*\*\*

「……ちゃん、お兄ちゃん、大丈夫!？」

幼い女の子の声に、俺の意識はだんだんはつきりしていった。

……ん?だんだんはつきりしていった?おかしい。俺は死んだはずだ。

それに、俺には妹なんていない。実は血の繋がった妹が……なんてことが、起こるはずもない。

不思議に思いながら、俺は思い瞼を上げた。

「あ、お兄ちゃん、目覚めた! 大丈夫?」

女の子の顔がぱあっと輝いて、俺の顔を覗き込んだ。

「あ……え……？」

女の子の姿を見て、俺は亜然とした。だって、ジリのゲド記とか天空の城ラピタに出てくるような服きてる、7歳くらいの女の子だったから。

……俺、中二病過ぎんのかな。

「お兄ちゃん、大丈夫？ お兄ちゃんここで倒れてたんだよ！」

女の子は心配そうに俺を見つめる。軽くパニックになってる俺は女の子に、

「えと……どちら様？」

と訊ねた。女の子は満面の意味で、

「私、アリアっていうの！」

と答えた。…アリア？ まさかの外国人？

「待ってね、今お母さん呼んでくる！」

女の子……アリアはそう言って、ぱたぱたとどこかへ走って行った。

俺はとりあえず身を起こし、周りを見渡す。

「……ありえねえ」

思わず、そう呟いた。だって、周りには見渡す限りの草原。所々に水車小屋みたいな小屋がある。

何世紀のヨーロッパだよ！ とつつこみたくなる。  
やっぱり、俺中二病過ぎて死んだ後もこんな風景見ちゃってるの  
かな…。

そんなことを考えている俺の耳に、アリアの声が聞こえた。声の  
する方を見てみると、アリアとそのお母さんらしい女性が歩いてく  
る。

女性はずんずん近づいてくると、ぐつと顔近付けて俺をしげしげ  
と見つめた。

「……見ない顔だね、あんた誰だい？」

女性は不審そうに俺を見ながら、ぶつきらばうに訊ねる。

「あ……俺、神谷晃紀っています…」

どこか逆らえない雰囲気を持つ女性に、俺は小さい声で答えた。  
アリアが得意気に、

「あのね、このお兄ちゃんここに寝てたの！ アリアが助けてあ  
げただよ！偉いでしょ！」

と、女性に話している。

女性はアリアに満面の笑みを向け、俺に向き直った。

「……コウキっていつのかい。あたしはアリアの母、マリアだよ  
……何で、こんなところで寝てたんだい」

女性……マリアは、そう名乗った。……そのぶつきらばうな口調、  
どうにかならないかな。

俺はそう思いながらも、顔には笑顔を張りつける。

「あ、俺……なんでここに居るのか分かんなくて……ていうか、  
ここどこですか？ 俺、トラックに轢かれたはずなんですけど……」  
俺の言葉に、マリアは目を丸くした。

「何言ってるんだい？ ここがどこか分からない？ ここは天下の  
“フェルトシア王国”じゃないか！」

……ふえ、ふえるとしあ王国？ 始めて聞く国名だ。  
なのにマリアは信じられないものを見たかのように、俺を見て目  
を丸くしている。  
俺はまさかと思いながら、

「あの……日本って、知ってますか？」

と、遠慮がちに訊ねた。反応は予想通り……マリアはきよとんと  
した顔で、

「ニホン？ 何だいそれは」

と聞き返した。…思った通り。どうやら俺は、異世界にトリップし  
てしまったらしい。

…でも、何で俺なんだ？ こういうものは普通、かつこいい男子とか  
女子とかが、誰か友達とかを庇ってするもんじゃないのか？ なんて  
こんなトリップしても意味なさそうな俺が異世界に来るんだ？

「…あんだ、大丈夫かい？ なんかワケ有りっぱいね」

マリアは考え込んでしまった俺を見て言った。

うん、ワケ有りすぎる。てか俺、これからどうやって暮らせば…  
って、これはもしかしてこの人達の家人居候させてもらえるフラグ  
か!?

そう期待して(本当はもっと美人がよかったけど)俺はマリアに、

「はい……俺、家無くて……これからどうすればいいか……」

と言った。マリアは思った通り、という表情をして、ため息をひ  
とつついて俺に、

「だろうと思ったよ……あんだ、家に来るかい？」

と訊ねた。

ビンゴ! と、俺は心の中で叫んだ。

「あ、ありがとうございます!」

俺は偽の涙を溜めながら、そう言った。

「いいよいいよ、今ちよつと男手が欲しかったからね」

マリアはそう言って、豪快に笑った。…え、ちよつと待て。男手  
?俺、働かされんの!?

……はい、なぜか異世界にトリップしております、神谷晃紀です。  
俺はマリアの家に来てから、

「あの．．．フェルトシア王国って、なんですか？」

と訊ねた。“天下のフェルトシア王国”とか言ってたから、アメリカ的な国なのかな……。

そう思ったけど、このだっ広い草原を見る限り、“街”っていうカンジはあまり……いや、皆無だ。

マリアは、

「ここはね、フェルトシア王16世が治める、大きな王国でね、ここは王都じゃないけど、王都に行けばこの国の凄さが分かるよ」

と言った。……いや、あんまり説明になってねえし！ てかあれはないの？ 異世界ものにつきものの魔法とか、魔物とか、主人公が倒しに行く大魔王とか！

そう思ってそれを訊ねると、マリアはけらけらと笑って、

「大魔王？ フェルトシア王国に盾突こうなんて生き物はいないよ！」

と言った。くそ……俺がヒーローになれそうなフラグが一向に立たないじゃないか！

悔しがってる俺を見て、でも、とマリアは続けた。

「でも、魔法や魔物はあるよ。フェルトシアは魔術と武力の国だ

からね」

……ホントっすか！？俺は瞳を輝かせた。

これはつまり、俺は凄い魔力を持つてるとか、そういうフラグが立つんじゃないか……あ、でも、現実世界を見るからに、俺に限って魔力がカス以下とか、そんななんだろうなあ……。

これがクラス一の秀才の森山くん（三月月と20日前情報）だったら、凄い魔力持つてるフラグは確実なのに……。

瞳をきらきらさせては、病んでるオーラを出す俺を見つめて、マリアはくすくすと笑った。

「あんたも魔力を持つてるか、試してみるかい？」

「……え？試せるんすか！？」

俺はマリアの言葉に顔を上げた。

……スプーンすら曲がらない気がしたけど、その気持ちはこの際放っておこう。

マリアは頷いて、俺にボロい木の棒を渡した。

「……え、これ？もつと先っぽに宝石とか光る玉のついたような魔法の杖じゃないんですか？」

俺は木の棒を見つめて、マリアに言った。想像と遥かに違う。

マリアはまた豪快に笑って、

「そんなの持つてるのは王様や貴族くらいだよ」

と言った。そうか、そうだよな、マリアは見るから庶民や農民だもんな。

俺は少し落胆しながら、木の棒を握った。

「……マリア、これ呪文とかは？」

俺は呪文を何も知らないことに気づき、マリアに訊ねた。

俺の知ってる呪文なんて、RPGやハリー・ポッターくらいだ。

まさかその呪文で効くとは思えない。」

「呪文はあるけど……とりあえず、魔力持ってるかどうかだけでも確かめたいんだろ？なんでもいいから適当に言っつて、振ってみな」

……適当だなと思いつつ、俺は前にテレビでみた呪文で振ってみる。

「え、えつと……しやしらしやらぼん！」

口にするのも恥ずかしいが、なんとなく出てしまった。

……テレビ、恐るべし。俺はそう思いながら、木の棒をわくわくしながら見つめる。

……変化は無い。やっぱり、俺には魔力なんて無いんだ。心の片隅でハリー・ポッター的な展開を期待した自分が恥ずかしい。

「……マリアさん、やっぱり俺には魔力なんて……」

俺の言葉が止まったのは、木の棒の先端から花火が飛び散りだしたから。

……これはまさかの、やっぱり魔力持ってた、って展開！？俺は期待して、マリアを見た。マリアは俺に笑いかけた。

「コウキ、あんたけっこうな魔力を持ってるみたいだね」

「ほ、ホントっすか！？」

俺は瞳を輝かせて言う。ちょっと、俺けっこういいんじゃない？  
もしやのヒーロー街道進んじゃうかも。

「あたしよりも魔力があるっぽいね。あたしは専門家じゃないから分からないけど、魔力ランクはB…うーん、Aかな。街に言ったら魔力を測れるから、今度測ってみるかい？」

「はい！」

マリアの言葉に、俺はこくこく頷いた。BやAなんて評価を貰ったのは初めてだ。

これは真面目に、俺この国の英雄になれるんじゃないのか？

「マリアさん、魔力高いとどうなるんすか？」

俺はわくわくして訊ねる。これからは薔薇色の未来が、俺を待っている！

「そうだねえ……努力次第では貴族階級になれるし、城に仕える事も可能だよ」

マリアの話に、俺は胸が高鳴るのを感じた。

現実世界にいたときは、『お前はフリーターにさえなえない』と言われていたのに、この俺が貴族？ 城？ 考えただけで頬が緩んでくる。

「へえ……マリアさんはどれくらい魔力あるんですか？」

俺は興味津津で、マリアに訊ねた。

「あたしの家系は魔力に関しては何でだめでね……Dだったかな？」

マリアは苦笑して答える。

「え、でも魔力あるんでしょう？なんか見せてくださいよ」

「うーん……じゃあ、あれを見てて」

俺の頼みに、マリアは苦笑しながら暖炉を指差した。俺は瞬きすら惜しんで、暖炉を見つめる。

「……t u w y」

マリアが何語か分からない言葉を呟き、暖炉に向かって木の棒を振ると、暖炉にぼうつと火がついた。

赤い火はごうごうと燃えていて、薪が無くても燃えそつだ。

「すつげえ……」

俺が思わず呟くと、マリアはこれくらい誰でも出来るよ、と言つた。

「あんたなら、召喚獣くらい呼びだせそつだけどねえ……」

マリアは俺を見て呟く。

え、嘘、召喚獣？俺漫画とかアニメの主人公みたいじゃん。

「ま、マリアさん、俺、それやりたい！召喚獣とか超見てえ……」

俺は生きてきた中で一番高いテンションで、マリアに言った。

マリアは頷いて、いいよ、と言った。

「でも、あたしじゃ教えられないから、今度時間があるときにこの村一番の魔術使いの所へ連れてってあげるよ」

「あ、ありがとうございます！」

俺はハイテンションでお礼を言った。その人は美人ですか？ という言葉は、呑み込んだ。

s t o r y 3 . . . t h e s t a r t a n d t h e u s e o f m

…なんか、自分で書いて書いて見聞きもいす)笑(。

「こんにちは、珠洲<sup>すず</sup>です」

マリアの言っていた“村一番の魔術使い”とは、俺より少し年上の黒髪美人だった。目も黒くて大きいし、何より髪の毛がさらさら。……ストライク、俺年上もokだぜ。

「俺……神谷晃紀っす……」

俺は鼻血を出した時のためのティッシュを目で探しながら言った。

「へえ……コウキね。貴方がマリア姐さんのイチオシの子かぁ」

そう言いながら珠洲さんは、俺の顔をしげしげと眺める。……やめてくれ、真面目に鼻血が……ッ！

「……って、え！？ コウキ！？ だ、大丈夫！？」

「は、はいひょうふじゃないでふ……」

珠洲がびっくりして俺を見つめる。あああ、鼻血がスピードアッブする……。

「ちょ、ちょっと待ってね……杖杖……あ、あつた」

珠洲さんは杖を手に取ると、俺に向けて振った。なんか呪文を言ってみたんだけど、聞きとれねえ……。

でも、魔法を使ったのか、鼻血はすっかり止まった。

「……………すげえ……………」

俺は思わず呟いた。この呪文を出来るようになれば、いくらでも珠洲さんを見てられる！！

「ふう、よかった…大丈夫？ 緊張してたの？」

珠洲さんは笑いながら俺に訊ねる。……………珠洲さん、星よりも綺麗な笑顔ですね。

……………引いてるだろ？分かるよ、うん、慣れてるもん。

「緊張じゃないです。簡単に言えば……………愛の力？」

「……………おもしろいこと言うのね。ていうか、敬語やめてね、あんまり年変わらないんだし」

……………遠回しの告白軽くスルーされたー！！

でも、敬語じゃなくていいって言われたからまあいいや。

「珠洲ちゃん、俺召喚獣だっけ？使いたいんだけど」

「……………急に生意気になるのね」

俺は普通にタメ語を使ったのに、また珠洲ちゃんにけらけらと笑われた。

仕方ねえじゃん。俺ちようどいって分かんないんだもん。どうせ大雑把野郎だよ。

「まあいつか。でもね、コウキにまだ召喚獣の魔法は早いわよ。何言ってるの？ここ大丈夫？」

珠洲ちゃんは笑って、自分の頭を指差す。……………そうか、珠洲ちゃ

んは可愛い顔してSなのか。

俺は珠洲ちゃんに関する新しい情報を、頭の中のメモに書き込む。

「コウキはまず、簡単な魔法からね。今は私の杖を貸すから、あの暖炉に火をつけてみて。呪文は唱えないで。無言で二回で成功しなきゃ、私は貴方に魔法を教えないからね」

「え……珠洲ちゃん、それきつくはない？だって俺魔法なんて使ったことな……」

「がたがた言わない！ 文句言う暇あったらさっさと実践！」

「は、はい！」

俺は慌てて、杖を暖炉に向ける。でもなあ……無言で火つけてつってたけど……ここはさ、中二病な奴としてはさ、呪文を唱えたいわけよ。

……だから、

「火よ出でよ！」

俺は適当に言いながら、杖を振った。途端に、暖炉に赤い火がぼうつと燃え上がる。

「や、やった！珠洲ちゃん、火ついた……」

「無言でやれってこと、聞いてなかったの？」

有頂天な俺に、珠洲ちゃんのマイナス100の視線が刺さる。

うっ……痛い……。

「……はあ、まあ正しい呪文じゃないし、成功ってことでいいか」

珠洲ちゃんはため息をついて言った。俺、珠洲ちゃんに認められ

た？

「一発で成功ってことは、結構魔力はあるみたいね…… まあ簡単な魔法だったからかもしれないけど……これは習うより慣れるかな……」

珠洲ちゃんはぶつぶつ呟きながら歩き、くるっと俺に向き直った。

「コウキ」

「ん？」

「えいっ！」

可愛い声と共に珠洲ちゃんの杖から飛び出したのは……え、えええ！？何あれ！戦隊もののビーム的な！？  
当たったら絶対無傷じゃすまないって！！

「うっ、うおわあっ！！！」

俺は思わず手で顔を庇う。ん？ 庇う価値のない顔を庇ってどうするって？ つい庇っちゃうものなのさ。

「うわあああ……って、ん？あれ？」

来るはずのビームが、来ない。俺は恐る恐る目を開けた。

「……え、なにこれ」

俺と珠洲ちゃんの間には、透明っぽい青の壁みたいなのが出来ていた。それが珠洲ちゃんの放ったビームを防いでいる。

これはもしかして…俺が能力で出しちゃって、めっちゃめっちゃ最強

ですフラグ？

「……結構やるう」

珠洲ちゃんが口笛をひゅうつと吹いて言った。

「出来てももうちょっと脆い壁かなって思ってたんだけど……けつこつやるのね」

「そりゃあ俺最強だから」

珠洲ちゃんの台詞に、俺は胸を逸らして答える。冷たい視線なんか……感じないもんね。

「最強なワケないでしょ馬鹿が。まあこれくらいだと、やっぱり魔力測っちゃおうかな」

「おお、魔力測れんの!？」

俺は前半部分をスルーして、瞳を輝かせた。俺、スルーするの上手くなったぜ。

「うん……といつてもこんな田舎じゃ無理だから、王都まで行かなきゃね」

「……珠洲ちゃんも来てくれるの？」

「私はコウキの師匠なんだから、もちろん行くわよ」

珠洲ちゃんは俺の問いに頷いた。……まさかの初日で『二人で旅行』イベント発生っすか!？

俺はまたまた出そうになる鼻血を、なんとか気力で抑えた。

「あ、日帰りで済むからね」

珠洲ちゃんは俺の心呼んだかのように言い足した。……くそ、  
日帰りか。田舎じゃなかったのかここは！

俺は心の中で悪態をついた。珠洲ちゃんはそんな俺を気にせず、

「じゃあ、明日の朝7時にここに来てね。時間厳守、遅れたら私  
はもう二度と貴方を教えないから」

と言った。……大丈夫、俺珠洲ちゃんのためならオールナイトだ  
つてするよ。

s t o r y 3 . . . t h e s t a r t a n d t h e u s e o f m

まさか、こんな近く更新出来るとは思いませんでした。  
でも、更新出来てよかった（笑）。

次はとうとう、王都登場！！…の予定です。

story 4 . . . King capital and " Raphael "

…ちょっとね、名前とかのセンスに関しては…もう、無視してください。

私、名前とかそういうセンス皆無なんです(泣)。

翌朝朝5時、俺は珠洲ちゃんの家に行った。

ちゃんと時間通り来たぜ！　つと胸を張って、おはよう、を言いかけると、

「遅いつ！　待ち合わせは5分前集合が基本でしょ？　時間ギリギリじゃない！」

と、ピンタをくらった。

「痛つてえ……い、いいじゃん間に合ったんだから！」

頬を擦りながら反論する俺に、珠洲ちゃんはため息をついた。そして返事もせず納屋に入り、箒を二本持つてくる。これは……箒で空飛ぶんだな？　やっぱり？

「はい、私に反論したから自力で飛べ」

「……は？」

「だから、さっさと箒で飛んで。コウキが飛んだら、私も飛んで道案内してあげるから」

「えええ……俺飛び方知らないし……」

「もごもご言わない！　ほら、さっさとやる！　10秒以内に飛ばないと、もうコウキと口きかないから」

「は、はいっー！」

俺は慌てて、箒の上に跨った。でも……どうするんだろ？

とりあえず、地面を強く蹴ってみた。

「……………うわぁ！」

と、飛んだ！？ 俺、地面から5mくらい浮いてる！！ 一発で成功って、俺って神じゃね！？

俺は調子に乗って、そのままもっと上に飛んだり、宙返りしたりした。

「はぁ……………一発で成功されるっていうのもなんか癪ね……………」

珠洲ちゃんはそう言いながら、飛んで俺の横に並んだ。

「だって俺、天才だから？」

俺はけらけらと笑って言う。

「……………馬鹿と天才は紙一重。行くわよ！」

珠洲ちゃんはそう呟くと、一気に加速した。

「ちょ、待ってよ！」

俺も慌てて加速し、珠洲ちゃんの後を追う。

「王都までは筈で1時間くらいよ。ちゃんとして来なさいよ！」  
「了解っ！」

\*\*\*\*\*

しばらく飛ぶと、遠くに大きな街と城が見えてきた。

「珠洲ちゃん、あれが王都？」

俺の問いに、珠洲ちゃんは頷いた。

「ええ、あれが王都の“ラファエル”よ」

「へえ………すげえな」

王都は、遠くから見ても分かるくらい活気に溢れていた。

なんつうんだろ…ゲド戦記とか、ブレイブストーリーに出てきた街みたいなカンジ。つまりは、中世ヨーロッパみたいなの。

王都に入ると俺は思わず、きよろきよろと辺りを見回した。

「コウキ！ 早く来て………貴方は入国手続きをしなきゃ………」

珠洲ちゃんが俺を呼ぶ。俺は慌てて、珠洲ちゃんの方へ走った。

入国手続きって、俺この世界だと戸籍とかねえんだよね………てことは………謎に包まれた男？ うわ、すげえ。

めっちゃめっちゃカッコいいじゃんそれ。

とか思いながら、俺は珠洲ちゃんと役所に向かった。

役所は、城の側にある大きな建物だった。

「すみません………連れの入国手続きをしたいのですが」

珠洲ちゃんがカウンターでそう言うと、唇があひるみたいになつてる男が出てきた。

「入国手続きですか？名前は？」

男にしては甲高い声で、あひる男は俺に訊ねてきた。

「神谷晃紀です」

「神谷晃紀……神谷晃紀……」

あひる男は羊皮紙よひしの束に向かって、杖を振った。あひる男の杖の先には、緑色の宝石のようなものが付いていた。

え？ 現代ツ子な俺がなんで、羊皮紙を知ってるかって？ R P Gとか、漫画とかに出てきたんだよ。

「む、むむ？ 神谷晃紀……国境を通った形跡はありませんが」

あひる男はそう言って、俺に顔をずいと近付けた。

「あ、俺……国境通ってないんで……」

「空の国境のリストにも、海の国境のリストにも、貴方の名前は書かれていませんが」

「あの……俺、なんつうか……異世界から来たんで……」

俺の言葉に、あひる男は目を丸くした。

「イセカイ？そのような国は存じませんが」

「国じゃなくて……国なのかな……あの……ちがう世界っていうか……」

「チガウセカイ？……なんと！貴方様は“世界を渡る魔法”を身につけたのですか！」

……魔法、っていうか、あれは不可抗力というか……。

でも、このカンジからしてその“世界を渡る魔法”を使えたら……俺、凄い奴？

「ま、まあ……そんなカンジ、ですかね……」

「おおお、これはこれは、始めてお目にかかりましたな！ それにしても……世界を渡って来たのですか……なるほどなるほど」

あひる男はぶつぶつ言いながら、羊皮紙に何かを書きこんだ。  
そして俺の方へ杖を向け、

「では、証明書を作るので……少し記憶を拝見……」

と言うと、杖を振った。……え、記憶を拝見！？ ちょちょちょ、俺にはあの時隠した工口本やあの時親から盗んだ金とかの記憶が……っ！

「……むむ、王都より約65？の位置にあるムギ村、マリア・アベーユと娘アリアの家に居候……滞在から2日後、ムギ村の魔術使い珠洲に魔法を習い始める……なるほど」

……あひる男はどうやら、俺がこの世界に来てからの記憶だけを見ているらしい。

俺ははあとため息をついた。

「神谷晃紀……15歳……チュウニビョウ……ヒキコモリ……これは何だ？」

……すっかり中二病でひきこもりってバレてんじゃねえかよ！  
どうすんだよ俺の記憶！

「あ、それは気にしないでください」

俺は営業スマイルを作って言った。

「ふむ……まあ良いか。では、おぬしの証明書だ。しかと持っておれ」

あひる男はそういうと、俺に学生手帳のようなものを渡した。中を見ると俺の写真と情報が書いてあり、端のほうに国旗のようなものが書いてある。

「……これは？」

「フェルトシアの国旗だ。おぬしの国籍はとりあえず、フェルトシアだからな」

「へえ……さんきゅ、おっちゃん」

俺はあひる男に礼を言っつて、役所を出た。

「じゃあ、とうとう魔力調べをしましょうか」

珠洲ちゃんはそう言っつて、つかつかと歩き始めた。

「魔力調べっつて、どんなことするんだ？」

「してみれば分かるわ」

珠洲ちゃんはそっけなくそう言い、つかつかと歩き続けた。

「……なあ、なんで今は箒に乗らないの？」

俺はさっきから不思議に思っていたことを訊ねた。

「王都の中での箒の使用は禁じられているの。人がいっぱいいるし、貴族の方や時には王族が通るから、危ないでしょ」

「へえ……」

珠洲ちゃんの答えに、俺は妄想を始めた。王族か……可愛い王女様とかがいて恋愛イベント起こんねえかな……。そんなことを考えながら歩いていると、大きな白い建物のある所へついた。

「ここが『魔力調べの館』よ」

「へえ……でけえ……」

俺は館を見上げた。

「感服してる暇があったら、さっさと行くわよ」

珠洲ちゃんはそう言いながら大きな扉の前で立ち止まった。

白くて、所々に金で飾りが施してある、3m程の扉だ。珠洲ちゃんは扉に向かって、

「ムギ村の珠洲です！ 新参の者の魔力調べに来ました！」

と叫んだ。一瞬後、扉はぎざぎざぎざ……と音をたてて、ゆっくりと開く。

珠洲ちゃんは躊躇いなく中へ入る。俺も珠洲ちゃんに続いた。

中は、広いロビーのような場所だった。珠洲ちゃんがカウンターのお姉さんに、

「ロビンソン・マッカートさんはいますか？新参の者の魔力調べをしてもらいたいのですが」

と聞いた。ロビンソン・マッカートさん？ 誰だそれ……。

「少々お待ち下さい」

お姉さんはそう言うと、電話をとり、

「……マツカートさま、珠洲さまが魔力調べを、と」

と言った。そして受話器を置き、

「すぐに行えるそうです。マツカートさまの部屋でお待ちください」

と言った。

\*\*\*\*\*

「ほう、お前が珠洲の言っていた“新参の者”じゃな？」

マツカートさんは、80歳くらいのおじいさんだった。見かけは……ハリー・ポーターのダンブルアミたい。長く白い髭は、床につきそつだ。

「はい……神谷晃紀です」

「なるほどなるほど……珠洲、お前はけっこうな新人を連れて来たようじゃな……」

マツカートさんの言葉に、珠洲ちゃんは微笑んだ。

「コウキといったな？なに、魔力調べといつてもお前は何もすることは無い、リラックスしていなさい」

俺はマツカートさんの言葉に、目を丸くした。

魔力調べとか言うから、何か魔法を使えと言われるのかと思っただけだ。

でもまあ、何もしないのも楽でいいか、と思い、俺は体の力を抜いて、近くの椅子に座った。

「では、調べるぞ」

マツカートさんは俺の顔の前に手をかざした。なんか、体が暖かくなっているような気がする……。

「むむむ……ほう、なるほど……」

マツカートさんはしばらくそのままいろいろ呟いていて、3分ほどして手を戻した。

そして珠洲ちゃんに向かって、

「なるほど……珠洲、こいつはAAAだな。もしかすると、Sと同等の力も持てるかもしれん」

と言った。嘘、AAA！？ 何その評価、めっちゃ良いじゃん！さすがの珠洲ちゃんも、目を丸くしている。

「Sと同等？ だって……そんな力、この国に一人しか……ッ」  
「左様、場合によっては、だがな。……コウキ、証明書を出せ。」

この国では証明書に魔力ランクを書くのが決まりとなっておる」

マッカードは俺に向き直ると、俺の渡した証明書の、魔力ランク、という欄にAAAと書き込んだ。

証明者、ロビンソン・マッカードと書き足す。

「これでよし……コウキ、ちゃんと自分の魔力を活かす暮らしをするんじゃないぞ」

\*\*\*\*\*

俺はまだ呆然としている珠洲ちゃんと、王都の中の飲食街を歩いていた。

ちょうど昼食時だから、昼食を食べようということになったのだ。

「あの……珠洲ちゃん、そこまで呆然とされてるところこっちとしてもショックなんだけど」

「でも……コウキがAAAだなんて……」

珠洲ちゃんの魔力ランクはAで、俺に越されたことがショックらしい。

……うん、負けず嫌いなところも可愛いよ。

「もうさ、それは置いてご飯を……ッ!!」

俺は突然ぶつかって来た人のせいで、思いつきり舌を噛んだ。

「痛つてえ……ちょ、お前急に……」

俺はフードを被っている人に怒鳴った。

「す、すみません、しかし私、急いでおりまして……」

……ん？この声……女の子？

女だと分かった瞬間、俺は怒りが消えたのを感じた。

「いやいや、大丈夫、急いでるの？大丈夫？」

俺は満面の笑みで、女の子の手をとった。

途端に、女の子はびくつとして後ろに下がった。フードが取れて、顔が露わになる。

……嘘、ちょー可愛いんですけど……。金髪のカールした長い髪の毛に、エメラルドグリーンの瞳、年は俺と同じくらいかな……。

「君、可愛いね、よかったら俺といっしょに……」

「あ、エレナ様ーっ!!」

俺の言葉は、女の子の後ろから走って来た男の声に阻まれた。女の子はまたびくつとして、その男から逃げ出す。

「え、ちょ、待ってよ君!」

俺は女の子の手を掴む。

途端に後ろから衝撃を感じた。

「痛つてえ!! ……な、何!??」

後ろを振り向くと、さっきの男の姿。どうやらその男が俺の背中を蹴ったらしい。

「な、何すんだよお前！」

俺は男に怒鳴った。

「お前こそ！ どの誰だか知らないが、そのお方の手をさつさと離さんか！」

「そのお方？ お前この子のなんなんだよ！」

「この子とは……！！ 無礼者！このお方はフェルトシア王国第一王女、エレナ・フェルトシア様だぞ！」

「……え、お、王女様！？ これ、王女様との恋愛イベント、マジで来たんじゃない？」

story 4 . . . King capital and " Raphael "

今回、かなり長く書けました!!

…でも次話、アイデアまだなんですよね…どうしよっかな…。

他の小説も更新しなきゃだし。

s t o r y 5 . . . I t i s a l o v e e v e n t , a n d g e s

なんかね…もう自分の文章力の無さに涙がでますね(涙)。

「ちょっと、ルイス！そんなこと大声で言わなくなつて……ッ」

王女……エレナは、俺に怒鳴つた男に責めるように言う。

へえ……あの男、ルイスっていうのか。

「いえ、この男はエレナ様についてご存知ないようなんですよ？  
こんな無礼者……」

「だから！ 街中じゃない！ 貴方のいつも言っている……刺客  
とかが聞きつけたらどうするの？」

エレナの言葉に、ルイスはあつというように口を開けた。そんな  
ルイスを見て、エレナはため息をついた。

「貴方つて人は……肝心な所が抜けてるんだから」

そんな二人の様子を見ていた俺は、隣で俺と同じくぼかんとして  
いる珠洲ちゃんに、

「この人達……何？」

と訊ねた。

珠洲ちゃんは小さい声で、

「金髪の方が、エレナ王女……国王様の第二のお妃さまの一人娘  
よ。第二王女とはいえ、魔力も相当あるし、人望もあるみたいで、  
“第二王女派”の人も少なくないみたい。第一王女のソフィア様が、  
妹君であるエレナ王女をよく思っていないのも有名。

けっこうおてんばな王女様らしくて、よく城を抜け出して街に来ていることも有名。

ルイス・フィユール様はエレナ王女の側近で、生まれた時からずっとエレナ王女に仕えてるの。

魔法はそこそらしいけど、剣の腕はこの国随一よ」

と、俺に説明してくれた。

へえ……なんとか近付いて、俺とエレナ王女の恋愛イベント発生しないかな……。

……いや、もちろん珠洲ちゃんもかわいいよ？ただね……エレナ王女もね……両手に花、つてわけにはいかないかな……。

でも、まずは話すことからだな。

俺はそう思っつて、エレナ王女に近付いた。ルイスが眉を寄せて俺を見たけど……無視する。

「エレナ王女、さっきは……」

「エレナ王女“様”をつけんか貴様！！それに『さっき』じゃない、『さきほど』だ！言葉の聞き方に気をつける！！」

俺がエレナ王女に話しかけると、ルイスが遮った。

様をつける？ 俺人に 様、なんて言ったことねえよ！ それに敬語なんてどーでもいいだろ！

「はいはい、ごめんルイス、黙っててくれない？ 俺今から王女様との恋愛イベントが……」

「貴様の汚い口で私の名前を口にするな！ しかも恋愛イベントだと！？ 打ち首にしてくれようか！」

ルイスは唾を飛ばしながら俺に怒鳴る。ああ……うるせえ。

「貴様、命が惜しくばさっさとこの場を立ち去り……」  
「ルイス！」

ルイスの怒鳴り声を、凜とした綺麗な声が遮った。  
声を発したのは……エレナ王女。さすがのルイスも黙り込み、エレナ王女を見つめた。

「貴方はいつもいつも……少し黙っていなさい。  
ごめんなさい、ルイスはいつも気が短いので、何か言いかけたみたいだけど……えっと……」

「晃紀、俺、神谷晃紀」

エレナの視線に頬を赤らめながら、俺は名乗った。

「コウキね、よろし……」

エレナの言葉は、ドオオオオオオン！ という爆音によって遮られた。

「何事だ！？」

ルイスは辺りをきよきよと見まわした。  
近くの店が燃えていた。火は勢いよく、隣の店へ燃えうつる。

「あれは……普通の火じゃない、魔法よ！」

エレナは叫んだ。俺には、普通の火と変わりないように見えるんだけど……さすが王女様。

「テロでしょうか……？ 最近多いですね」

ルイスがそう呟いた。テロ!? なにそれ、めっちゃ危ないじゃん。

「そのようね……相手はここに私がいると知っているかしら?」

「分かりませんが……必ずお守り致します」

「当然、それが貴方の仕事よ。でも……自分の身すら守れない小娘と思われるのも癪ね」

……やばい、ルイスとエレナの会話、めっちゃかつこいいんだけど。

俺も入りてーっ!俺だつてさっきの魔力調べでAAA判定受けたんだぞ? 王女の一人や二人守れるぞ?

俺はそう思つて、ルイスとエレナの間割り込んだ。

「その会話さ、俺も混ぜて?」

「なっ、今は一般市民の出る幕ではない! 命が惜しくばさっさと家へ帰れ!邪魔だ!」

「そうよコウキ、貴方も最近テロが多いことを知っているでしょう? 危ないわよ」

……うわあ、俺邪魔者扱いされてるよ……。

「コウキ、エレナ様やルイス様の言うこと聞いて。貴方は馬鹿だけど、今は危ないってことくらい分かるでしょ?」

珠洲ちゃんまで、俺に言う。……みんな、俺のこと信用しなさず  
き……。

「でも、俺……」

「ほら、たぶんもうそろそろ外国の魔術使いが襲ってくる。貴方を殺すくらい、あいつらにとっては朝飯前なのよ？　ここにいたって、ルイス様とエレナ様の戦いの邪魔。もうすぐ王宮から兵も来るし……さっさと行きましょ？」

「やだー！」

「は？」

大声で、やだ！　と言った俺を、珠洲ちゃんは亜然と見つめる。

「やっと巡って来た王宮恋愛イベントチャンスを無駄に出来るかっ！」

「……」

ぐつと拳を握って言う俺を、珠洲ちゃんは呆れた目で見つめる。

「……私、コウキの手助けしないわよ？　ていうか、ルイス様とエレナ様の邪魔になるだけって何度……」

「邪魔にならない、俺がエレナ王女を助ける」

俺は胸を張って言う。自信家？　これは自信じゃない、事実だ。

「もう……じゃあ勝手にしなさいよ。私、マリアさん達に『コウキは自業自得で死にました』なんて言っただけだからね？」

珠洲ちゃんはため息をついて、俺からすたすたと離れて行った。

「『死にました』じゃなくて、『王女様を助けてラブラブになりました』だってば」

俺は珠洲ちゃんの去った方を見つめ、そう呟いた。

「あ、お前、なんでまだここにいる、さっさと立ち去れ！」

……やべ、ルイスに見つかった。てかさ、いちいちうるせえな……。こんな俺に構うくらいだったら心配で心配で堪らない王女様のこと構えつての。

そんなことを考えながら俺は、

「俺にエレナ王女任せとけ」

と言った。案の定ルイスは顔を真っ赤にして、

「何を戯けたことを言っておるのか貴様ア！！」

と、俺に斬りかかって来た。ちよいちよいちよいちよい、相手違  
うだろ！！

エレナはそんな俺達を見てため息をつく。

「ルイス……一般市民に斬りかかるとは何事ですか」

「エレナ様……ッ、しかし……」

ルイスは苦虫をかみつぶしたような顔で、俺を見る。ふっ……残  
念だったな、ルイス。

俺は勝ち誇ったように、心の中で呟いた。

……でも、そんなこんなをしてる間に、

「てかさ、ルイス、なんかフード被ったアヤシイ人がいっぱい登  
場してんだけど」

俺達はアヤシイ宗教団体みたいな人達に囲まれていた。

……いや、俺だって馬鹿じゃないから、この人達がたぶんみんなの言ってる外国の魔術使いだろうとは分かるよ？

「ああ……あの衣装はホロンね……」

エレナはアヤシイ人達を見て言った。ホロン？ ホロンって外国の名前？

「まったく……前の戦争でうちの国にボロ負けしたくせに……魔術使い寄こす余裕があるんなら自分の国を復興させるって話だわ」

エレナが呆れた目でフード男達を見る。……あの、キャラ変わってません？

「エレナ様、私にお任せを」

ルイスがエレナを見て言った。……やべ、今の台詞超かっけえ。

「そうね……この人数、貴方の準備運動にもならないものね」

エレナはそう頷いた。……待て待て、この人数って、軽く10人はいるぞ？

「私、疲れちゃった……。早く帰りたいから、さっさと終わらせて？」

「御意」

エレナの言葉に、ルイスは二本の剣を構えた。うわ……二刀流って超かっけえ。

ルイスは二本の剣を上手に使い、相手に魔法を使う隙を与えず次

々と倒していく。

「ルイスって……凄い」

俺は思わず呟いた。

「でしょう？ 性格には難有りだけど、実力では何も言えないわ  
エレナはふふっと笑ってそう言った。

「あの男といっしょにいたら、私なんて魔法を使う必要もないの。  
だから、他国に舐められるのかしらね……」

エレナは苦笑してそう呟いた。

「へえ……凄いな……ていうか、エレナ王女ってどれくら  
……」

俺の言葉が止まったのは、エレナの後ろにフード男がふいに現れたから。

エレナが振り向くより早く、フード男は何か魔法を唱えた。

途端に、男の手から炎が現れる。俺は反射的に、エレナとフード男の間に入った。

「……ッ！」

……あれ？ 攻撃が来ない？

俺は恐る恐る目を開けた。目の前には、倒れているフード男の姿。

「あれ……この男……なんで……？」

俺はぼかんとして眩く。

「……コウキ、やるじゃない」

エレナがそう眩いた。

「え？ 俺？」

俺は聞き返す。

「ええ、コウキが私より早く魔法を使ったなんてびっくり」

「え、俺のおかげでエレナ王女助かったの？」

「コウキがいなくても自分で大丈夫だったけど……ありがとう。咄嗟に庇ってくれたの、嬉しかったわ」

そう言っつて、エレナは俺に微笑んだ。

「ルイスも全員倒し終わったみたいだし……どう？ お礼代わりに、城で夕食をご馳走するわ」

……俺、王女様との恋愛イベント発生中です。

story 5 . . . It is a love event , and ge

突然ですが…読んでくれた方、評価をしてくださったら…嬉しいです（図々しい奴）

あと…昨日のアクセス件数、300弱でめちゃめちゃ嬉しい自分があります（笑）。

そして話は変わりますが…ナルニア国物語、良いですね！！（変わりすぎだろ）。

ちよつと…良すぎて良すぎて…もう大好きです（笑）。

最近再ハマりしてるんです。

…変なあとがきですいませんでした。

「貴様…正装というものを知らんのか？」

俺の服を見て、ルイスがわなわなと震えながら言った。

「これじゃ…だめ？」

俺は自分の服装を見ながら呟く。

正装に着替えると言われたけど、俺はさっきの乱闘で汚れたままの普通の服だった。まあ、普通の服といつても、Tシャツにジーパンとかじゃなく、ナル ア国物語みたいな服だけど。…この例えで伝わる？伝わんない？まあいいや。

「ルイス、そんなに怒らないで。でも…夕食の席にはお父様やお母様もいるし、さすがにその服じゃ…何か貸してあげるわ」

エレナが苦笑して、侍女を呼んだ。そうか、そうだよな、国王様とお妃さまがいるんだもんな。しばらくして、侍女が何か服を持ってきた。

「はい、これでいいでしょう。魔法で織り込まれてるから、サイズは問題ないはずよ」

「おう、さんきゅ…」

「貴様！『おう』とはなんだ『おう』とは…！」

…ルイス、ほんとうるせえな。俺がもつと魔法使えたら、あいつネズミに変えてやるのに。

俺はそう思いながら、心の中でため息をついた。

\*\*\*\*\*

そういえば、珠洲ちゃんつてどこ行ったんだろ？と思ったのは、エリナと共に夕食の席に向かっている時だった。

いままで思い出さなかったのも不思議だが、あの乱闘の時に別れてから会っていない。

心配してくれてないかなあと、少し期待して思う。

「…ありえるかも。俺今絶好調だもんなあ」

思わずそう呟いた。

だって、異世界に来たら凄い魔力をもっていることが分かって、魔法を教えてくれる女の子は凄い美人。

そして王都では可愛い王女様を救って城に招かれてる…これからどんなことが起こるのだろうかと考えると、自然に頬が緩んでくる。

「コウキ、この扉の向こうにお父様とお母様がいるわ」

エリナの言葉に、俺は現実に戻った。

目の前には、大きな扉。金で装飾がされてあつて、まさに城ってかんじだ。

「うわ…すげえ」

俺は思わず、扉を見上げて呟いた。

「あ、そんな口調お父様たちの前でしちゃだめよ？お父様は自分に

とって無礼だと思ったらすぐに死刑にするような人だから…」

エレナは俺の言葉遣いを嗜めた。…え、嘘、死刑？俺そんなこと聞いてないんですけど…。

俺の心臓は、急にばくばく言い始めた。

「うっ…やべ…やばい…あれ、どう言えば…」

残念ながら、馬鹿な俺には丁寧な言葉遣いが出来ないらしい。

やばい…死刑決定だ俺…。

不安がっている俺に気付かず、エレナは扉を開けた。途端に、中から眩しいほどの光が漏れた。

俺はエレナに続いて、大広間に入った。

中には、長いテーブルがあり、数人の人が席についている。みんな冠をかぶっているから、王族だろうか。

「遅かったな、エレナ」

国王らしき男の人が、低い声で言った。黒髪に、彫りの深い顔、髭も漆黒で、みるから気難しそうだった。

「遅れて申し訳ありません、お父様」

エレナが膝を折ってお辞儀した。

国王はエレナを軽く睨み、俺に視線を移した。やばい…真っ向から睨まれると、凄い威圧感。

「して、その者は？」

「先刻お話しした、カミヤ神谷昇紀コウキです。街での戦闘の際、私を庇ってくれたのです」

国王に向かつて、俺は頭を下げた。何か言わなければと思ったが、言葉が出なかった。

「ほう…カミヤ殿、娘が世話になったな。後で褒美を取らそう」「い、いえ…ありがとうございます…」

俺は緊張で震えながら、なんとか答えた。こんなに緊張したのなんて、15年生きてきて初めてかもしれない。

「さあ、早く席につきなさい」

国王の言葉に、俺とエレナは席についた。

テーブルには、食べたこともないようなご馳走が並んでいた。豚の丸焼きとか、子羊の冷やし肉とか、ブドウ酒とか、変な形をしたサラダとか、色とりどりのデザートとか。よだれが出そうになる。

「カミヤ殿、知ってるだろうが、一応紹介しよう」

国王の言葉に、俺は慌てて料理から視線を外した。

「私の右隣が、正妃のフィリス。そしてその隣が第一王女であるソフィアだ」

国王の隣にいる40歳くらいの女の人と、18くらいのキツめな美人が俺に向かつて微笑んだ。

ソフィア…エレナを目の敵にしてるっていう王女か。

「そして、左隣が第二妃であるシルヴィア、エレナの母親だ」

40弱くらいの金髪美人が、俺に向かって微笑む。そうか、エレナの美貌は母親譲りか。

「そしてエレナの隣が、第三妃であるシエリーだ」

茶髪の30くらいの女の人が、俺に微笑んだ。この人には、子供がいないらしい。

「紹介はこれくらいでよいか。ではカミヤ殿よ、大したものではないが、食事を楽しんでくれ」

「はい…頂きます」

この食事で大したことないって、金持ちの感覚はどうなってるんだと思いつつ、俺は国王に微笑んだ。人に愛想笑いを浮かべたのなんて、始めてだ。

\*\*\*\*\*

食事を終わると、俺は国王に呼ばれた。

「なんででしょうか？」

俺は足ががくがく震えないように精いっぱい頑張りながら、小さい声で言った。

来る来る、死刑判決が…ッ！

「それほど怖がらなくとも良い。なに、先ほど話した褒美のことだ」

「褒美…ですか」

褒美…すぐに国王の前から離れられたら、それが今一番の褒美なんだけどな…。

「何か、欲しいものはあるか？遠慮せず申してみよ」

欲しいもの…『娘さんを下さい』なんて、言えるはずないよな。俺は心の中でため息をついた。

「い、いいえ…特にありません」

「そうか…うむ…そうだ、カミヤ殿は魔法が得意と聞いたが？」

国王は俺をじつと見て言った。

「はい…一応は」

俺は苦笑して言う。

俺の自信も、この人の前じゃ出すに出せない。出した瞬間、『戯けたことを！』と殺されそうだ。

「では、何か質の良い杖をカミヤ殿のために作らせよう。…まだ、杖を持っておらぬと聞いたが？」

「はい…ありがとうございます」

俺はさっさとその場から立ち去りたくて、何でもいいからと思いついて頭を下げた。

「では、今宵は城に泊まるがよい。明日には杖も完成するだろう」

「はい…ありがとうございます」

\*\*\*\*\*

「…様、カミヤ様、お目覚めでしょうか、カミヤ様」

翌朝、俺は侍女の声で目が覚めた。一瞬、見慣れない天井に戸惑う。

「あ…そうか、ここ城か」

俺の呟きに、侍女がくすくすと笑った。

「な、なんだよ…」

「申し訳ありません…おもしろい方だなとおもいました」

くすくす笑いながら、侍女は言う。

俺は顔を赤らめながら、朝食を食べる為に大広間へ向かった。大広間には、昨日とは違い、エレナだけが座っていた。

「あ…ごめん、待った？」

俺は慣れない敬語で訊ねた。エレナは微笑んで、

「いいえ、大丈夫、今日は私だけなの。朝食は大体、みんな自分の部屋で食べるし、お父様は忙しいから」

と言った。そして、

「あ、そういえば、お父様が朝食を終えたら、…王座の間、…に

来るようにと言っていたわ」

と付け足した。

「、、王座の間、？」

「ええ、お父様が職務をするところ…玉座があるところよ」

「へえ…ありがとう、後で行くよ」

俺はトーストにかぶりつきながら、そう答えた。

なんか：最近こっちばっか更新するのは何故でしょうか。ファンタジーってことで、現実逃避でもしたいのかな（笑）。

あと、お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます\*。\*  
(´、´)(\*)\*。

そして、今のタイトルは仮タイトルなので、変わるかもしれません。  
『ひきこもり』が抜けるかも。…全然ひきこもってないし。

タイトルが変わったとしても、よろしくお願いします。

俺は、侍女に案内されて、王座の間、に來た。

「国王陛下、カミヤ様が参りました」  
「入れ」

扉の中から、短く返事が聞こえた。俺はどきどきしながら、扉を開ける。

「失礼します」

中に入ると、王座に国王が座っていた。周りには、偉そうな人がいっぱいいる。  
視線が…痛い。

「うむ、ではこれで要件は終わっただろう、しばし外で待っている」  
国王が周りの人達にそう言うと、周りの人達は俺を見ながら去って行った。

これが噂の、『人払い』というやつか。

「カミヤ殿」  
「は、はいっ！」

俺は慌てて、意識を国王に戻した。

「これを、褒美として与えよう」

国王は大きな長方形の箱を、俺に渡した。箱には装飾が施されていて、いかにも高そうだった。

「今開けてもいいですか？」

「かまわん」

俺の問いに、国王は頷いた。

俺はわくわくしながら箱を開けた。中にはビロードのクッションに、俺の身長より少し低いくらいの長い杖が置いてあった。

先の方には、サファイアのような宝石が埋め込んである。

「うわ…すげえ…」

俺は杖を見つめて、思わず呟いた。呟いてからあっと思ったけど、国王は俺の口調には気づいてないらしい。

「この杖…長いですね」

俺は杖を見て言った。珠洲ちゃんに貸してもらった杖は、もっと短かった。

「杖は魔力ごとに変わるからな」

国王は笑って言った。

「知らなかったか？」

「はい…俺、全然この世界…魔法とかの知識がなくて」

俺は頭を掻きながら答える。

国王はふむ、と俺を眺めた。うう、やめてください…めっちゃくちゃ怖いです…。

「不思議な者だな、お前は」

国王は顎を掻きながら言った。

「不思議ですか？」

俺はきよんとして聞き返した。俺的に、不思議要素は0だと思うんだが。

「不思議だ。お前ほどの魔力の持ち主がなぜ今頃、魔力調べ、を受けているのか、なぜいままで杖を持っていなかったのか、そして、なぜこんなにもこの国に疎いのか」

…え、ちょっと、なんか不穏な空気なんですけど。

俺はびくびくして国王を見た。国王は鷹のような目で、俺を見ている。

「お前…異国のスパイではなからうな？」

…え、嘘、超違うんですけど。ていうか、ちょっと、やばくない？俺スパイ嫌疑かけられてるんだけど。

「え…や、まさか…」

俺は震えている声で言う。やべ…俺、下手したら死んじゃう？すると国王は俺を見て、

「…だろっな」

と呟き、がははと笑い始めた。

「…え？」

いまいち状況が掴めない俺。これ、どうなってんの？なんで国王笑ってんの？

「いや、すまない。少し聞いてみただけだ。お前みたいな者にはスパイは務まらんと、最初から分かかっておるわ」

…なんか心境的には微妙なんだけど、スパイ嫌疑は晴れたみたいだからいいのかな…。

「いや、気を悪くさせてすまなかった。もう行っていいぞ」

「あ…失礼、します」

俺は複雑な心境で、王座の間を後にした。

\*\*\*\*\*

「おかしい」

さっきから何度、この台詞を呟いたのだろう。たぶん、100回以上は言っているだろう。

でも、おかしいものはおかしい。

俺は、このままエレナとラブロマンスになるはずだろうか？

小説のジャンルだって、『ファンタジー』から『恋愛』になるはずだ。

でも…なんでだ？なんで、俺は今城の正門まで来ていて、エレナちゃん笑顔で手を振って別れを告げようとしているんだ？

「…おかしい、絶対におかしい」

これは何か起こって、俺がエレナの許婚だったとかの衝撃の事実が明らかになるとか、この前の乱闘でのが評価されて側近になるとか、そんなイベントが起こるはずだろ？

このまま帰るなんて、ありえない…はずなのに、俺の脚は城の敷地をまたごととしてる。

なんで、なんで、なんで？

俺の…俺の、恋愛イベントは!？

s t o r y . . . T h e m a g i c w a n d w a s g o t t e n .

…なんか、めっちゃくちゃ短くてすいません。

次は…どうしよう、とりあえず、珠洲ちゃんと再会…の予定です。

…その前に、ナルニアの二次創作短編を書くかもですが（笑）。

s t o r y 8 . . . D i d n o t y o u . . . a g e . . . k n o w a r

今回は…話が進んでる感じがしません(笑)。  
でも、お読みいただけたら幸いです。

俺の今の気持ちを一文字で表そう。

、、何で、、

…ん？何で、何で、なのかって？

だって、俺はエレナとラブラブになるはずだろ？なのになんで今、城の正門から出てるんだ？

なんで、街をぶらぶら歩いてるんだ？

何で珠洲ちゃんを捜してるんだ？

…いや、珠洲ちゃんはいい、美人だし、相手としては凄く良い。でも、ここは普通王女のエレナとだろう。

「…なんで、あんなに簡単に終わったんだ」

俺は、ぽつりと呟く。

もうちょっと俺に関心持ってくれてもよかったのに…。

俺が正門から出る時の、ルイスの顔が頭の中に浮かぶ。

満足気な、見下したような顔。…ああ、いらつく！！

「あのためき！自分だけエレナに近いと思って、良い気にいるのも今のうちだぞ！

俺がエレナの心を奪ってやるからな！おしつ、がんばれ俺！！」

俺はそう怒鳴って、空に向かって拳を突き出した。周りの視線がイタイ気がするのは…気のせいだろう。

伸びをして、また歩き出す。…と、後ろから聞き覚えのある声で、

「あ、いた、コウキーっ！」

と、呼ばれた。声の主は、もちろん珠洲ちゃん。

「お、珠洲ちゃん、おひさー」

俺はそう言って、軽く手を上げた。

「おひさー…じゃない！」

珠洲ちゃんはあからさまに怒った顔をして、俺に杖を向けた。

「え、ちょ、待って！何何何何！」

俺は慌てて杖を体の前に出した。無意識のうちにバリア的なものが出来て、珠洲ちゃんの攻撃をガードする。

「あ、コウキ、杖持ってるの？いつの間に？凄い高そうな杖じゃん」

珠洲ちゃんは俺に謝りもせず、杖をじろじろと眺めた。

そうか、俺に攻撃するのにはなんの抵抗も無く、なんの罪悪感もないのか、そうかそうか。

「…コウキ？さっさと質問に答えなさいよ、その杖どこで手に入れたの」

珠洲ちゃんはじろつと俺を睨んで、自分の杖でつんつん突いてくる。あの、何気に痛いんですけど。しかもつんつん突いたところから火花散ってるし。さすが魔法の杖だな。

「…国王様にもらった」

俺は短く答える。つんつんされるのは、たとえ相手が美少女でも嫌なものだ。

「へえ、国王様に…って、え！？国王様！？」

珠洲ちゃんは目を丸くして俺を見た。俺はこくと頷く。

「コウキ…何したの？」

珠洲ちゃんは眉をひそめて、俺を見てくる。

「ちよいちよいちよい、なんですか、その『何したんだコイツ』的な目は。」

「昨日の乱闘騒ぎの時にさ、俺がエレナ助けてあげたんだよ。そしてたらお礼に夕食に呼ばれて、んで城に止まって、褒美としてこの杖貰ったんだ」

俺は鼻高々に語る話を、珠洲ちゃんは胡散臭そうに聞いていた。信じてない？信じられないだろうけど、本当の話なんだよなあ。

「…コウキ、嘘を言うと天罰が下るわよ」

珠洲ちゃんは呆れた顔で言う。ほら、やっぱり信じてない。

「本当なんだって！俺がエレナ助けて…」

「王族の方のことを呼び捨てにするのも、重罪よ。衛兵に聞かれないうちにちゃんと敬称つけなさい」

珠洲ちゃんはため息をついて、俺に注意した。様付け？でも俺、たぶんエレナより年上だぜ？

「…なあ、エレナって…」

「エレナ、様、…！」

珠洲ちゃんの噛みつくような表情に、俺はしぶしぶ呼び方を変える。

「エレナ…様って、何歳なんだ？」

「今年の4月に14になられたそうよ」

…一歳俺のほうが年上じゃねえか！

俺は心の中で叫んだ。…ますます、様付けをしたくなくなる。

「…そういうば、コウキって何歳なの？」

珠洲ちゃんは俺を見て、ふと訊ねた。

「俺？15歳」

「…嘘」

珠洲ちゃんは目を丸くして俺を見た。

…え、そんな反応？俺、そんなに老けて見える？それとも童顔？

「コウキ…私より年下だったんだ」

「…え、そんなに以外？」

俺はぼかんとしている珠洲ちゃんに訊ねる。そんなに驚くことか？  
これ。

「だって…コウキ、19くらいかと…へえ、15、へええ…」

「珠洲ちゃん、18くらいでしょ？」

「…なんで分かったの？」

珠洲ちゃんはまた目を丸くして俺を見た。俺、女の子の年齢見抜く  
のだけは得意だからな。

「私、同じくらいだと思ってたのに…3歳も年下だったんだ、へえ…。」

コウキ、外見だけは大人びてるのね。中身は凄いい子供なのに…」

…後半部分の台詞は無視しよう。でも、俺大人びてるのか、へえ…。  
俺は始めて聞く評価を、心の中で繰り返した。

異世界から来た大人びてる15歳の天才魔術師…うん、けっこう良  
いキャラクターだ。

「…コウキ、何にやにやしてるの？気持ち悪いわよ」

…年齢を知られて、今までより毒舌になった気がするのは気のせい  
か…？

「まあいいや、さつさと村に帰るわよ。日帰りのつもりなのに一泊  
しちゃったんだから」

珠洲ちゃんはそう言うのと、箒を取りに行った。なんか…俺、これか  
ら尻に敷かれそう…。」

そんなことを思いながら、俺も慌てて珠洲ちゃんの後を追いかけた。

やっと、珠洲ちゃんと再会しました。

あと…うーん、悩み中なのですが、『登場人物・用語について』と  
かって、書こう…かな？

晃紀の容姿とか、全然書いてないな、と思ったんですが（単に文章  
力がないだけなんです）…どうしようかな…。

俺と珠洲ちゃんはムギ村に向かって箒を飛ばしていた。

時速60km強で空を飛ぶと言うのは、かなり気持ち良い。これで箒無しだったらもつと気持ち良いんだろうな。

…そんなことを考えながら飛行してたのが悪かったのか、俺は目の前に高い壁が迫っていることに気付かなかった。

「コウキー!!」

珠洲ちゃんの声に、俺はやっと目の前の障害物に気づく。

しかし、もう距離は1mもなく、一瞬後には俺は…ッ!!

…て、え? 衝撃がこない?

俺は恐る恐る、ぎゅっとつぶった瞼を開いた。俺は壁から1cmあるかないかという、ぎりぎりで止まっていた。もちろん、俺の故意で止めたわけではない。

「…はあ、はあ…ギリセーフ…」

後ろで、息の荒い珠洲ちゃんがそう呟いた。俺が振り向くと、珠洲ちゃんは杖を俺に向けていた。

「珠洲ちゃん…今、一体何が?」

状況が全然わからない俺。珠洲ちゃんはキッと俺を睨んだ。

「コウキ…あんだ、グレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈、グレイト・マウンテンレンジにつっこむところだったのよ?」

ぐ、ぐれ…？英語の成績が10段階中2だった俺には、今の英語は理解できない。

…いや、さすがにマウンテンは分かるけど。グレイトは素晴らしい？でもレンジって？チンってするあれか？

「ぐれいとまうんでんれんじ…何それ？」

俺の言葉に、珠洲ちゃんはあとため息をついた。

「グレイト・マウンテンレンジ。偉大なる山脈、という意味よ」

「へえ…マウンテンレンジで山脈なんだ…。ていうか、そもそも偉大なる山脈って何？」

英語の意味は分かっても、それが何かは分からない。…仕方ないだろ、この世界にきたの数日前だもん。

そんな俺を見て、珠洲ちゃんは再度ため息をついた。

「コウキって、ほんとに無知なのね…まあいい、教えてあげるわ。

グレイト・マウンテンレンジ  
偉大なる山脈っていうのは、この国の西の国境…フェルトシア王国と、隣国のテルムーン共和国に跨っている大きな山脈よ。標高は約12345mで、横に987kmもあるの。山頂は余りに空気が薄くて、私達は10分といることが出来ないわ。先住民であるミサ族が、山頂に暮らしているけれど…人間とは、言い難いわね」

珠洲ちゃんの説明を、俺は目を丸くして聞いていた。

標高12345m！？エベレストより高いじゃねえか！てか、何？ミサ族？また怪しげな奴らが出て来たな…。

「グレイト・マウンテンレンジ  
偉大なる山脈に関する情報はまだまだあるんだけど…とりあえずは、これくらいにしとく。コウキ、そんなに一気に憶えられないで

「しよ？」

「ぐ…失礼な。そう思ったけど、反論出来ないのは事実だ。俺は記憶力が少しだけ悪い。」

「テストを一夜漬けで百点取れる人間なんて、この世にいないと思ってるからな。」

「…じゃあさ、珠洲ちゃん、テルムーン共和国って？」

「俺は偉大なる山脈グレイト・マウンテンレンジに関する事は諦めて、新しく聞いた国について訊ねた。現実世界では地理とか嫌いだったけど、この世界だと超おもしろえ…。」

「ああ、テルムーンね？王族がないから、サジヤ大臣っていう人が治めている国よ。共和国、っていうのは名ばかりで、実質サジヤ大臣の独裁政権。貧富の差が激しいらしいわ。」

「それと…テルムーンの魔法は衰退してるらしいの」

「珠洲ちゃんは眉をひそめて言った。」

「衰退？」

「俺も眉をひそめ、訊ねた。」

「ええ、サジヤ大臣があまり魔法を好まないから、政権を握った36年前に、魔法禁止令、を出したんですって。魔法無しで他国と戦をしようとするのも馬鹿な話だけど…テルムーンには、戦に勝つ秘策があったの」

「秘策？」

「…動物使い、…が、いっぱいいたの」

「動物使い？」

またまた聞き慣れない単語だ。数少ない俺の知識だと、サーカスのライオンの火の輪潜りとか？

「あらゆる動物を、思い通りに操れる者のこと。そんな人は本当に少ないの。人口が5億を超えているフェルトシア王国にも、100人いるかどうか…。

でも、そんなに珍しい動物使いが、テルムーンには数百人とか、数千人もいるらしいわ」

「それ…すげえな」

てか、動物使いつて凄くね？あれじゃん、どっかの映画みたいに、『ライオンの背中にのって走る』ことも、『白くまに乗る』ことも出来んじゃない！やべ、超かっけえ。

「…コウキ、絶対羨ましがってるでしょ」

「…え、なんで分かんのか？」

珠洲ちゃんに言い当てられ、俺はどきりとした。そんなに分かりやすいかな、俺。

「数日一緒にいるだけで、コウキの性格は分かったから。でもね、動物使いも、そんなに良いものじゃないのよ？」

珠洲ちゃんは苦笑して言った。

「なんで？超かっこよくない？」

「動物使いは、血筋で受け継がれるから、次にどこで動物使いの才を持った者が生まれるか、大体分かっちゃうのよ。そして動物使い

が生まれたら、その者は国のために戦に出なければならぬ。必ずよ。それが、テルムーン共和国の決まり…。逆らったら一族全員皆殺したものだ」

「…こええな、それ」

俺はぶるつと身震いした。一族全員皆殺し…怖い言葉だ。

「でしょ？でもなぜか、誰もサジヤ大臣に逆らおうとしないの。10年前に起こった反乱を最後に、いまままで一度も逆らおうとする者はいない…」

珠洲ちゃんは目を伏せて言う。綺麗な心の持ち主…かどつかは置いていて、胸を痛めてるんだな。

俺はぼーつとそんなことを考えた。まあ、こんな話してるときに考える事じゃないって分かってるけど。

「…テルムーンの説明も、これくらいでいいでしょ」

珠洲ちゃんは顔を上げてそう言った。

でも、この世界の国とかの話おもしろいし、もっと聞きてえな…。

「ね、珠洲ちゃん、もうちょっと話してよ。この世界の国のこと」

俺は期待を込めた目で珠洲ちゃんを見る。が、

「はいはい、もう説明するの疲れちゃったからまた今度ね」

と、軽くあしらわれた。

今回は、近くの国の状勢(?)とかを入れて見ました。

名前のセンスは…やっぱり、気にしないでください(笑)。

そして!今日弓道の都大会だったので…女子団体3位で関東予選通過!!

関東大会に行けます…ッ (< > )

めちゃくちゃ嬉しい…。初メダルは、凄く重くて、感動でした…ッ  
!!

あと、昨日のアクセス数700越え…私的に、凄く嬉しいです。

ありがとうございます。お気に入り登録してくださった方も増えて…最近、嬉しいことばかりです (^ロ^ )

俺の住んでいる(?) ムギ村は、グレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈のすぐ近くだった。だからムギ村は山脈に阻まれて、西からの太陽光が届きにくい。

俺は篝から降りて、威圧感のある大きな山脈を見上げる。

「うわ… 壮大だな」

思わずそう呟いた。、、 壮大、、 なんてフレーズ、使ったの初めてだ。

「コウキ、もたもたしない！ さっさとマリアさん達に報告しに行くわよ！」

俺が珍しく感動しているのに、珠洲ちゃんはすたすたと先を歩いて急かす。

「ちよ、待ってよ珠洲ちゃん！」

俺は走って珠洲ちゃんを追いかけた。

\*\*\*\*\*

「へえ… コウキがAAAトリプルA… それは驚いたね…」

珠洲ちゃんが王都でのことを報告すると、マリアは口をぽかんと開けて驚いた。

「……そんな魔力持った人に会うなんて、思っても見なかったよ」

「ええ、私も驚きました。しかも場合によればSと同等の力も、とマツカートさんは言っていましたし……」

俺は黙って不二人の会話を聞いていた。聞いてるだけでも、超楽しい。だって俺、めちゃくちゃ褒められてる……。俺、生きてるうちに褒められるなんて思っても見なかったぞ？

「いや、生きてるのかどうか微妙なんだけども。でも、俺の思考は、」

「ねえ、お兄ちゃんラファエルに行つて来たんでしょ？」

という幼い声に中断させられた。

声のする方を見ると、アリアが俺の服の裾を持って俺を見ていた。

「え、ラファエル？ああ、王都か、うん、行つてきたよ」

内心、小さい子苦手なんだよなーと思いつつ俺は答えた。

「わあ、いいなあ、どんなだった？きらきらしてた？まほーつかいがいっぱいいた？お姫様には会った？」

アリアはそんな俺の心の声に気付きもせず、あどけない笑みを浮かべて質問を続ける。

「きらきら？魔法使いは分かんないけど、エレ……お姫様には会った

よ

俺が営業スマイルでそう言うと、アリアは、いいなあ、と瞳を輝かせた。

「お姫様、綺麗だった？優しかった？」

「うん、そりゃあもつめちゃくちゃ可愛いの！金髪ふわふわの緑眼美人！」

エレナのことを聞かれて、俺はテンションが急に上がった。だって思い出しただけで顔がにやけるぜ。

「わあ、いいなあ、アリアもお姫様に会いたい！」

「いつか会わせてあげるよ」

俺はにやっとしてアリアに言う。

「お兄ちゃんが、会わせてくれるの？」

アリアは目を見開いて訊ねた。

「もち、だってエレナは俺の未来のお嫁さ…ッ」

「馬鹿！何を戯けたことを言ってるの？」

俺の言葉は、珠洲ちゃんの魔法弾によって阻まれた。

ああ、なんで珠洲ちゃんの台詞があいつ…ルイスと似て聞こえるんだろう…。

「痛ってえ…珠洲ちゃん…不意打ち、無し…」

俺はよろよると立ちあがりながら呻いた。これ、結構痛い…。俺は少し、ゲームの主人公に同情した。こんな痛いもん、いっつも受けてるんだな…かわいそうに…。

「あら、本気出してないわよ?」

珠洲ちゃんはふんと俺を見下げて言う。

「当たり前だろ!本気でやったらやばいし!本気の魔法弾とか死ぬだろ!」

「…コウキ、私に対して暴言禁止って言わなかった?」

珠洲ちゃんは俺を睨んで、また杖を向け魔法弾を放つ。

「ちょっと、危なッ!!てか、そんなの言われたっけ!?!」

俺は慌てて飛びのく。体痛くてバリア張る余裕なんてねえよ…。

「そんなの忘れたわよ、師匠の言ったことくらい覚えときなさい」

珠洲ちゃんは杖を下ろし、はあとため息をついて言った。

「珠洲ちゃんこそ、弟子に言ったことくらい覚えとけよ」

俺は小声でぼそつと呟く。しかし、珠洲ちゃんには聞こえていたよ  
うで、

「それが弟子の態度?」

と、もう一発魔法弾を食らった。

\*\*\*\*\*

「痛ってえ…背骨がぎしぎし言ってるし…」

珠洲ちゃんの帰った後、俺は伸びをして呻いた。そんな俺を見て、  
マリアはけらけら笑う。

「魔法弾をもらに食らったんだから、痛いのも当たり前だよ」

「でもさあ、珠洲ちゃん酷くない？不意打ちなんてさあ…」

ぶーぶー言ってる俺を見て、さらに笑うマリア。マリアもマリアで  
ひびく…。

「でも、もつぶーぶー言うのもやめて。コウキと話さなきゃいけない  
ことがあるんだからね」

「ん？」

真剣そうな雰因気に、俺は椅子に座りなおした。

ただ…俺、真剣な話って苦手なんだけど…。

「コウキ、家が無いって言ってただろう？珠洲によれば、世界を渡  
って来たみたいだし…。

これからもうちに居るのなら、服とかいろいろ必要だろうし、これ  
からもうちにいるか、それとも一人で暮らすか決めてもらわないと」

「ああ、そっか…。でも俺、一人で暮らすつつつても金とか無いし  
な…。てか、え？俺場合によってはこの家についていいの？」

俺はびつくりして聞き返した。マリアはこくと頷く。

「行くあてもない子供を放りだすようなことはしないよ。それに、アリアもコウキのことを気に入ってるみたいだし」

マリアの言葉に、俺はアリアに目を移した。きらきらと俺を見つめている。

「俺、子供に好かれるような奴だっけ？綺麗なお姉さんに好かれたほうが嬉しいんだけどな…」

「じゃあ…俺、たぶん一人じゃ暮らせないし…ここにいてもいい…ですか？」

俺は初めて、人に遠慮がちに言ったと思う。マリアはにっこり笑って、いいよ、と言ってくれた。

「…でも、俺は出来るだけ早いうちに城で暮らせるようになるつもり…いや、なるけど」

俺は誰にも聞こえないような声で、呟いた。

s t o r y 1 0 . . . i : : I s i t l i k e d b y t h e c h i

気付いてみれば、プロローグ入れて11話目!!

なんか更新速度が(自分的に)早いです!!この調子で::頑張ろう

(笑)。

「ん…」

俺はちゅんちゅん鳴く鳥の声に、重い瞼を開いた。

「朝…か…」

窓から外を見ると、広い草原と青い空。鳥の声で目覚ますなんて、何年ぶり…いや、生まれて初めてかもしれない。

「何時だろ…って、そっか…」

俺は腕時計を見て、再度ため息をつく。

なぜかは知らないが、俺のアナログ時計はこの世界に来てから止まったままだ。ずっと12時32分を指したまま。

でも意味も無いのにつけてしまうのは、癖だろ。…いや、現実世界でも時間を無視した生活してたけどさ、腕時計ってしてたほうが…こいいじゃん？

…え、腕時計したまま寝るのかって？それは…あれだよ、なんとなくはずしたくなかったから。

あ、でも、普通の時計はこの世界にもある。

「…お兄ちゃん、何ぶつぶつ言ってるの？」

俺の思考を邪魔したのは、幼い女の子の声。

「あ、アリア？」

振り向くと、きよとんとした瞳で俺をしげしげと見てくるアリアの姿。

てか、俺、アリアに聞かれてた？ていうか…、

「俺、声出してた？」

俺の問いに、アリアはこくと頷く。

うわぁ…恥ずかしい…。

「それより、お母さんが呼んでるよ。朝ご飯だって」

「え…ああ、うん、今行く」

俺はそう言って、アリアに続いて階段を下りた。ちなみに俺の部屋は屋根裏部屋だ。

「ああ、コウキおはよう、早く朝ご飯を食べて。食べ終わったら珠洲が呼んでたよ」

「珠洲ちゃんが？」

俺は椅子に座りながら訊ねた。

テーブルの上にはスクランブルエッグやハムやパンといった、現実世界でもありふれた食べ物がある。並んでいる。

「うん、今朝早く珠洲の鷹が来てね」

「へえ…って、鷹!？」

軽くスルーしそうになった俺は、紅茶を吹き出した。

鷹？鷹ってあれか、ハリー・ポッターの守護霊とか、そんなカンジ？

「コウキ！もう、汚い…何をそんなに驚いて…」

マリアは俺にハンカチを渡しながら言う。

「だって…鷹？何それ？」

俺はテーブルをハンカチで拭きながら訊ねる。

「珠洲の召喚獣だよ、知らなかったかい？」

「召喚獣…うわ、すげえ…」

、召喚獣、という単語に、俺は瞳を輝かせた。

「今日珠洲に見せてもらったらどうだい？」

「うん、そうする！」

俺はそう言って、いそいでご飯をかきこんだ。

\*\*\*\*\*

俺は珠洲ちゃんの家に行って向かった。

、召喚獣、と考えるたび、胸が高鳴る。俺の召喚獣、どんなんだろ…。

俺はわくわくしながら、チャイムを鳴らした。

「入って」

珠洲ちゃんの声に、俺は扉を開けた。召喚獣の姿を探すが…いない。

「おはよ、珠洲ちゃん、早速だけどさ、召喚獣見せてくれない？」

俺は部屋をきよるきよる見回しながら言った。

「召喚獣？なんで急に？」

珠洲ちゃんは怪訝そうに俺を見て言った。

「マリアがさ、朝に珠洲ちゃんの召喚獣の鷹が来たって」

「ああ、アルクのことね？」

珠洲ちゃんは手をぼんと打って言った。アルクってのが、召喚獣の名前らしい。

「うん、俺その…アルクが、めっちゃ見たいんだけど」

「…いいわ、見せてあげる」

珠洲ちゃんはそう言って、チヨークを持った。

そのチヨークで、床に何か…魔法陣のようなものを書き始める。

「…召喚獣って、魔法陣が必要ななの？」

俺の問いに、珠洲ちゃんは書きながら頷いた。

「召喚獣は上級魔法の中でも更に難しい部類だから。魔力もA以上じゃないと出来ないし…。あ、でも、かなりの魔力をもった人なら、召喚獣も魔法陣無しで呼び出せるけどね…よし、出来た！」

珠洲ちゃんは手ではんぱんとチヨークの粉を払いながら言った。

床には、複雑な魔法陣。

「じゃあ、これからは話しかけないで。すぐ終わるから」

珠洲ちゃんはそう言うと、杖を持って魔法陣の近くに立った。中じゃないの？と質問したくなかったが、黙って珠洲ちゃんを見る。

「…ふう」

珠洲ちゃんは息を吐き出して、杖をくるんと回した。途端に、白いチヨークで書いた魔法陣は青く光り始める。

魔法陣から、風が強く吹いていて、珠洲ちゃんの長く黒い髪がなびいている。

珠洲ちゃんは、たん！と勢いよく杖を魔法陣の中に振りおろした。光が魔法陣から溢れ、風がもっと強くなった。

「…来るわよ」

珠洲ちゃんが言った。俺は魔法陣の中を凝視する。

初めに、黄色い嘴くちばしが見えた。そして、次第に茶色い羽毛や、黄色く光る鋭い目が現れる。

そしてその全体が見えた時、

「うわ…すげえ」

俺は思わず、感嘆の声を漏らした。

普通の鷹より二回りほど大きい鷹が、ぴゅうっと鳴いて珠洲ちゃんの肩に止まった。

「この子が、私の召喚獣のアルクよ」

珠洲ちゃんはアルクの頭を愛しそうに撫でながら、俺に言った。

とうとう、召喚獣登場です（笑）。

それと、最初の更新から少し、珠洲ちゃんの鷹の大きさを変えました。

くるくる変わってすいません。

そして、昨日のアクセス数1000を超えました！！めちゃ嬉しい…。  
あとお気に入り登録も増えてました！

本当にありがとうございます。これからもよろしく願います！

s t o r y 1 2 . . . i s 、 、 A L C 、 、 d e f e c t i v e ? ( 前 書 き )

すみません、前回出てきた珠洲ちゃんの召喚獣の大きさ？変えました！

くるくる変わってすみません…。

鷹：アルクは、俺を睨んでいる。

やばい…俺よりずっと小つちやいのに超恐い…。

「アルク、こいつは私の弟子のコウキ」

珠洲ちゃんがアルクの頭を撫でながら言う。…て、え、ちよつと待  
つて。やっぱり召喚獣って言葉分かるの？

「珠洲ちゃん、召喚獣って喋れるの？」

俺はアルクを珠洲ちゃんを交互に見ながら訊ねた。

珠洲ちゃんはくすくす笑って、

「召喚獣と喋れるのは、その主だけ。私はアルクの言葉が分かるけ  
ど、コウキは分からないわ」

と言った。へえ…そんなもんか。

「あ、でもアルクがコウキに伝えて欲しいことがあるみたい」

珠洲ちゃんはそう言って、アルクと何か話しはじめた。

でも…俺にはアルクがぴゅぴゅ言ってるようにしか聞こえない。

「コウキ、アルクが『うちの珠洲に手エ出すなよ。手エ出したら命  
はねえからな、ああ？』だって」

…随分お言葉遣いの悪い召喚獣をお持ちのようで。しかもあれじゃ

ん、不良じゃん。

「珠洲ちゃん、そろそろ召喚獣いいや（訳：さっさとアルク消えろ）」

俺はにっこり笑って珠洲ちゃんに言う。

「そう？まあ今日の本題は召喚獣じゃなかったしね。アルク、帰っていいわよ」

珠洲ちゃんの台詞に、アルクは恨めしそうに俺を見た。たぶん、俺は今勝ち誇った笑みを浮かべているだろう。

アルクは最後に一声ぴゅうっと鳴くと、青い光と共に消えた。同時に、魔法陣も消える。

「よし、邪魔者アルクもいなくなったし…珠洲ちゃん、俺に今のやらせて」

俺は瞳を輝かせて言う。珠洲ちゃんは俺を見て、はあ、とため息をついた。

「今？まだまだだめ、もうちょっと魔法を学んでからね」

「え、嘘、だめ？まだだめ？俺けっこう魔法出来るのに？」

俺は落ち込んでいるのを隠しませず言う。だって、すぐにやれると思ってたんだもん。

「だーめ、出来るだけの魔力はあっても、まずは中級魔法を習得しないと」

「中級魔法？」

俺は眉をひそめて聞き返す。そう言えば、召喚獣は上級魔法とか言  
つてたな…。魔法にもランクがあるのか。

「ええ、でも今は魔法の事はいいわ。町に行くわよ」  
「町？」

町って、この前行った…ていうか、あれは王都か。

「そう、ムギ村から一番近い町だから、アカネ町かな。けっこう大  
きい市場があるし」

珠洲ちゃんはそう言って、地図を俺に見せた。

ムギ村、とかかれた場所から東南に、アカネ町、という町があった。

「筈で10分くらいよ」

珠洲ちゃんは地図をたたみながら言う。10分…めっちゃ近いじゃん。  
そう思いながら、俺はあることに気づく。

「…珠洲ちゃん、俺金無い！」  
「大丈夫、マリアさんから貰って来た」

珠洲ちゃんはそう言って、ずっしりと中身の詰まった巾着袋を出し  
た。

「うわ、すげえ…てか、マリア太っ腹…」  
「マリアさん、何気にお金持ってるのよ」

珠洲ちゃんはそう笑って言う。

へえ…普通の家庭かと思つてた俺は見る目がないのか…。

「じゃあ、はい」

珠洲ちゃんはいつの間にか持つてきていた箒を俺に渡した。

俺は箒を受け取ると、素早く跨る。…箒無しで飛べたらそっちの方がカッコいいんだけどさ、うん。

「じゃあ、行くわよ」

珠洲ちゃんが箒で飛び上がった。続いて、俺も勢いよく飛び上がる。びゅっつという風が、心地良い。

「今回飛ばすから、ちゃんとついてきてよ？」

珠洲ちゃん言葉に、俺は自信満々で頷いた。

途端に速度を上げる珠洲ちゃん。俺も前のめりになって速度を上げ、珠洲ちゃんを追いかけた。

s t o r y 1 2 . . . i s 、 、 A L C 、 、 d e f e c t i v e ? (後書き)

今日はまさかの二話更新!!

∴ 両方とも短いですが(汗)。でもまあ、一日に二話更新は大きな  
進歩だ!(笑)。

「今日は野菜の特売日だよ」「安いよ安いよーっ!」「新しい布が入りましたよー」「ちよつとそこのお兄さん、寄つてかないかい?」

そんな声が四方から聞こえる、雑多な市場。そこを珠洲ちゃんと俺は歩いていた。

「まずは、服やマントを買わなきゃね」

珠洲ちゃんは俺を見て言う。

「マント?」

マント、と言われて俺の脳裏に浮かぶのは、戦隊ヒーローとかが来てそうな真っ赤で風にはためいているマント。…だせえ、絶対着たくない。

「うん、…ほら、フードかぶってるあの人!たぶん旅人だと思うけど…着てるでしょ?」

珠洲ちゃんの指差した先には、青いゆったりとしたフード付きのマントを着ている男の人。

ゲド 記で着てるようなやつ。

「うわ…なんかかけえ、めっちゃヨーロッパっぽい!」

俺は瞳を輝かせてマントを見つめた。そういえば、王都に行くとき

も珠洲ちゃんが貸してくれたっけ。

「だから、まずは仕立屋ね」

珠洲ちゃんはその言うて、目的地に向かってすたすたと歩き出す。でも、始めてこの市場に来る俺には四方八方から誘惑があつて…、

「珠洲ちゃん、なんか旨そうなものがあるんだけど…」

「珠洲ちゃん珠洲ちゃん、なんか変なもの売つてるところあるよ？寄つてこっつぜ」

「珠洲ちゃん！なんか変な生き物が馬車つばいの引いてるんだけど！」

「珠洲ちゃん、あそこに滅多にいない美人が！！ちよつと待って、ナンパさせて！」

「珠洲ちゃ…」

「うるさいッ！…！」

とうとう珠洲ちゃんは、俺に怒鳴った。

「さつきからあれがどーだこれがどーだ…！しまいには美人がどうだあ？女に現を抜かすな！さっさとやることだけやるの！遊ぶのはその後…！」

珠洲ちゃんはびしっと指を付き付けて、睨んで言う。

やべ…超恐い…、母さんよりもこええよ…。

「は、はい…」

さすがの俺も、擦れた声で従った。

それからは、気になったものがあったても口に出さず、心のメモ帳に

書き込む。美人がいた時は、心の写真付きで。

「…」

まだお怒りモードの珠洲ちゃんの声に、俺は茶髪美人から目を離した。

目の前には、『仕立屋Tolkien}マントからネグリジュ、ドレスまで』という看板。

「と、とるきえん？」

「トールキン」

珠洲ちゃんが俺をキツと睨んで訂正する。∴仕方ねえじゃん、英語力皆無なんだもん、日本人なんだもん。

「ぼんやり突っ立ってないで、入るわよ」

珠洲ちゃんはそう言って、ドアを開けてさっさと中へ入ってしまった。

「∴俺、珠洲ちゃんのドSスイッチ押しちゃったかな…」

俺はそう呟いて、珠洲ちゃんの後が続いて入った。

\*\*\*\*\*

中に入ると、狭い店内に色とりどりの布が散らかっていた。

ドアのすぐそばにベルがあって、珠洲ちゃんはそれを鳴らしている。

りりん、と透き通った鈴の音。それと共に、店内の奥の方からはたばたと物音が聞こえてきた。

「…っと、いらっしやい、っと、お待ちください…よいしょ…うん、ok…うん、はい、いらっしやい」

ぶつぶつ言いながら出てきたのは、身長140cm程の小男。ベレ帽を横に傾けてかぶっていて、白髪だらけの長髪は頭の後ろでくくっている。そして、茶色いスーツと、七分丈。見るからに、仕立屋だった。

「お久しぶり、トールキンさん」

珠洲ちゃんは小男…トールキンに微笑んだ。

「おお、珠洲さん、久しぶりですね。今日はなんの御用で？私が前作った旅行用マントは、もう破れてしまいましたか？そんなにやわじゃないと思っただんですが…ああ、それとも、ドレスですか？とうとう貴族の坊ちゃんに夜会に招かれました？ならば珠洲さんにはこの色が似合うと…」

「待って待って、夜会になんか招かれてないし、旅行用マントはまだ使えるわ」

一気にまくしたてたトールキンに、珠洲ちゃんは苦笑して言う。

「ほ…？ならば、どんな御用で？」

トールキンはぽかんとして珠洲ちゃんを見つめた。

そして、その視線は、今気付いた、というように、俺に向けられた。

「ほ…ほっほー、このお若い方ですね？」

「ええ、コウキにマントと、普段着を数着仕立てて欲しいの」

珠洲ちゃんは俺を前に出して言った。俺はトールキンに向かって、軽く頭を下げる。

「…珠洲さんの、恋仲の人かな？」

トールキンはにやにやと笑って、俺に訊ねる。

俺はもちろん…、

「はい、珠洲ちゃんは俺のかの…ごぶツ！…」

俺の言葉は、珠洲ちゃんの魔法弾に阻まれる。…これ…前にも一度…。

「コウキは、私の弟子よ。こんな奴でも、魔力調べでAAA受けたの、おかしいでしょ？」

珠洲ちゃんはそう言って、トールキンに微笑む。  
こんな奴って…無くない？

「弟子か、なるほど。そういう始まりもありだな」

トールキンはこくんこくと頷きながら言う。俺は痛む背骨を擦りながらやっとなり上がる。

「でしょ、トールキンさん！俺の本命はエレナだけど、珠洲ちゃんもけっこう…ごがあッ！？」

…またもや背後からの、魔法弾。しかも…気のせいかな、威力がさっきの倍以上な気がするんだけど。

「コウキとは、そういう関係にはならないわ。…必ずよ」

まだ何かいいそうなトールキンを見て、珠洲ちゃんは、必ず、と付け足した。

そうか、俺は恋愛対象には必ず入らないのか…。いやでも、こんな仲から女子は男子にいつの間にか惹かれて…って、よくあるしね。俺にも起きるよ、そんなことが。

俺は床に仰向けに寝っ転がりながら…いや、正しくは仰向けに倒れながらそんなことを考える。

「…コウキ、といったな？ さつさと立たないか、寸法が採れませんかぞ」

トールキンは俺を見下げて言う。うわ…身長140cmの男に見降ろされるって、めっちゃ複雑…。

「コウキ、さつさと立って。私だってこの後行かなきゃ行けない所があるんだから」

珠洲ちゃんに言われ、俺はゆっくり立ち上がった。ああ…身体が痛てえ…。

「では、測るぞ」

トールキンはメジャーを持って、俺の前に立った。極めてありふれた方法で俺の寸法を測る。

…なんだ、魔法じゃねえんだ。

「ふむ…年齢に比べて少し大人な身体つきだな」

トールキンは俺の結果を見て呟いた。やっぱり、俺って大人っぽいんだ…精神年齢は14なのに。

「服は適当に仕立ててくれる？そうね…5着くらい。マントの色は、コウキ、好きな色選んで」

珠洲ちゃんがてきぱきと言う。俺は目の前の布の山をあさり始めた。

「…あ、これが良い！」

俺は一枚の布を引っ張り出して言う。

「ほう、濃紺ですな」

トールキンは俺の選んだ布を見て言った。へえ、これ濃紺っていう色なのか。

「じゃあ、これでマントもよし…トールキンさん、私達今日一日町を回るんだけど…前理までには出来る？」

珠洲ちゃんの問いに、トールキンは自信満々で頷いた。

「じゃあ、コウキ、次の店へ行くわよ」

珠洲ちゃんは俺にそう言うと、ドアをばたんと開けて出ていく。俺も急いで珠洲ちゃんを追った。

町での買い物、一話にまとめるつもりだったんですが…まとまりませんでした。

ただ単に、私の文章力不足ですね…（汗）。

あと、またまたお気に入り登録が増える（）。（）。  
本当嬉しいです、ありがとうございます…！！

出来れば感想も…なんて、思ってる私は図々しいです。

俺の前を歩く珠洲ちゃんは、本屋っぽい所に入って行った。続いて俺も店内に入った瞬間、

「珠洲さんッ！お久しぶりです！」

という声が聞こえた。声のするほうを見ると、大きな丸い眼鏡をかけた、三つ編みの女の子。

年齢は…17くらいか、みるからに文学少女、ってカンジ。顔は中の中くらいなので、俺の恋愛対象には入らないな。

俺は頭の中で、そんなことを考える。え、そんな偉そうに言ってる分はどうかのかった？俺はたぶん、上の上だな、うん。…数少ない友人とは、意見が食い違うけど。友人は中の上か、良くて上の下って言うけど。

…話を戻そう。珠洲ちゃんはその文学少女を見つけた途端、

「あ、チカちゃん、久しぶり！」

珠洲ちゃんは親しげに文学少女…チカちゃんに話しかける。

「一か月ぶりね、店はどう？」

「はい、おかげさまで。珠洲さんは相変わらず忙しいですか？」

「うーん、厄介ものが出来たから…」

珠洲ちゃんはそう言って、目だけを動かして俺をみる。

…え、何、俺厄介なの？それ酷くない？

「この方は…珠洲さんの恋び…」  
「なわけないじゃない」

珠洲さんの恋人ですか？と言いかけたチカちゃんの言葉にかぶせ、  
珠洲ちゃんは猛烈に反論する。

珠洲ちゃん…そんな猛烈に反論しなくても…。

そりゃあね、俺の本命はエレナだよ？でももちろん珠洲ちゃんにも  
十分チャンスが…

「じふっ！？」

俺の思考は、痛烈な痛みに中断された。

魔法弾…ではなく、珠洲ちゃんの拳が鳩尾にヒットしている。

「ちょ…げぼげぼ…珠洲ちゃ…痛い…こほ」

「コウキが何考えてるか分かったから、殴った」

咳をしながら呻く俺に、珠洲ちゃんは冷たく言う。

え、嘘、何考えてるか分かったの？でもさ、俺声に出してませんよ  
？…たぶん。

考えながら不安になった俺は、ちよつと空気化してきてるチカちゃ  
んに、

「俺、声にだして言った？」

と訊ねた。俺凄くない？何気に影薄くなってきたる子を救ったよ！！  
…うん、何度も言うけど、引かないでほしい。

チカちゃんはまるい眼鏡の奥で目をぱちぱちさせ、

「いいえ…何も言ってませんでしたよ？」

と、首を傾げて言った。…仕草的にはドストライクなのに、なんで神様はこの子に上の上の顔を上げてあげなかったんだろ…。惜しい。でも、何も言っていないのになんで分かったんだろ？と、もんもんと考えてる俺を見て、

「何も言っただけでも分かるの、あんたの思考回路は十分熟知したから」

と、珠洲ちゃんは珠洲涼しい声で言った。

これこそ、一心同体で言葉で言わなくても伝えたいことが伝わる仲ってやつだな！！

…え？ポジティブ思考な人なのかって？違う違う、俺は至って普通さ。

あ、『普通って思ってるんだー、イタイ人ー』っての無しな？

「…コウキ、表情で分かるわあんた。一心同体なんかじゃないか、らッ！！」

「…ほッ！？」

最後の『らッ！！』と共に、またもや拳が飛んできた。妄想…いや想像に夢中だった俺は、いとも簡単に吹っ飛ばされる。

「うう…痛ってえ…、体も痛いし心も痛てえ」

「…最後の何なのよ」

珠洲ちゃんは、はあ、とため息をついた。

「魔法弾じゃないだけ良いと思いなさい」

「ああ…そういうえば珠洲ちゃんすぐに魔法弾飛ばしてくるような奴だったわ…」

腰に手を当て偉そうに言う珠洲ちゃんを見て、俺はため息をついた。

「…こーら、師匠に向かってため息つかないの」

「ついませーん、ししょー」

俺が適当に返すと、またまた拳が飛んでくる。…今度は予想してたから避けられたけど。

「あっ、コウキ！　なんで避けるの？　ちゃんと当たりなさいよ！  
！」

珠洲ちゃんはぎゃあぎゃあ怒鳴る。

ちよっと…ちよっととき、冷静になってよ、ね？

俺は心の中でそう呟くが、怖くて口には出せなかった。

\*\*\*\*\*

「す、珠洲さん、落ちつきました？」

チカがお茶の乗ったお盆を乗って、少し不安げに珠洲ちゃんに訊ねた。

「ええ…落ちついたわ、ありがとう」

珠洲ちゃんは深呼吸すると、お茶を一气飲みました。

「はあ…時間を無駄にしちゃった…」

珠洲ちゃんは時計を見て呟く。時刻は午前11時…なるほど、腹の虫が鳴くわけだ。

チカちゃんは口に手を当ててしばらく考え、

「もう11時ですか…あつ、そうだ！　ここでお昼を食べて行きませんか？」

と言った。ぱあつとしている満面の笑顔。…何度も言うけど、これを珠洲ちゃんにやってほしい。

「え、でも…悪いわよ」

珠洲ちゃんは躊躇って言う。珠洲ちゃんも遠慮を知ってるんだな、と心の中で呟いたのはトツプシークレットだ。

「いえいえ、全然良いですよ！　珠洲さんにいろいろ聞きたいことがありますし、料理も30分くらいで出来ます！　是非、食べてって下さい。私、料理の腕には自信があるんですよ？」

チカちゃんが、瞳をきらきら輝かせて言う。あの…俺の存在、忘れられてませんか？

「うーんと…じゃあ…食べてこようかな」

珠洲ちゃんが微笑んで言った。…ちくしょう、今携帯があれば、珠洲ちゃんの微笑みをカメラで撮つといたのに…！

…でも、とりあえずは『俺も食べてくよ？』って、許可とらなき

やな、うん。

俺はそう思っ、チカちゃんに話しかけた。

「あのさ、チカちゃ…」

「コウキは、お金あげるからどこかで食べてきてね？」

俺の言葉にかぶせ、珠洲ちゃんが強引に言う。…えつと…目が『コウキに食べさせる』飯は無い』っていつてるんですが…。

「あ、コウキさんはいいんですか？別に量の心配なら…」

「いいの、私チカちゃんと二人で話したいし、ね？」

戸惑っているチカちゃんに、珠洲ちゃんは微笑んで言う。それ、俺にとっては悪魔の微笑みだよ…。

「じゃあコウキ、800リルあげるから、これで食べてきて」

珠洲ちゃんはそう言っ、俺に銅色の硬貨を8枚渡した。

「…リル？」

俺は思わず聞き返した。訊き慣れない単位だ。

「あれ、まだ言っ、なかつたっけ？この国のお金よ。100リルが銅貨で、1000リルが銀貨、10000リルが金貨よ。」

「へえ…けっこう覚えやすい…」

そう呟き、俺は銅貨を手の中で転がした。珠洲ちゃんはすたすたと店の奥に入っていく。

チカちゃんは俺を見て、

「コウキさん？ 鍵を閉めるから、外で食べるならもつ出てもらわないと…」

と言った。

「あ、ごめんごめん！」

俺は慌てて外に出る。後ろで、鍵のがちゃっとな閉まる音。

「さて…どこで食べるかなあ…」

俺は銅貨を握りしめて、呟いた。

何も知らない町で、只今一人ぼっちです。

story14 . . . It is lonely now . (後書き)

感想とか評価とかがつかまりました！ありがとうございます！！

そしてポイントが36ポイント…！！

他の作者さん達にとっては低いかもしれませんが、私的にめっちゃ嬉しいです、ありがとうございます！！

そして…感想を呼んだところ、文章がなってない、とのことでした。変な文章とかを見つけたら、教えてもらえるとありがたいです。必ずばお願いします。

…おそらく、7月最後の更新です。8月もよろしく願います。

s t o r y 1 5 . . . H o m e m a d e f o o d o f . . . f e r u t o

八月最初の更新

店から締め出され、俺はとぼとぼと町を歩いてた。

別に、町を歩き回ることは嫌じゃない…というか、俺にとっては不思議なことだらけのこの町を好きに見て回れるのは、嬉しい。

でも…やっぱりさ、となりに美女が可愛い子がいて欲しいわけよ、分かる？

「…てことは、まずはナンパだな」

俺はそう呟くと、外見が上以上の女の子を探す。

なぜかこの世界には、可愛い子が多い…気がする。あつ、今すれ違った子は残念な顔だけだ。

「可愛い子可愛い子…あつ、あの子に決定」

目に入ったのは、茶髪のショートカットの女の子。年齢は…少し年上かな。

…そういえば、なんでこの国って髪とか目の色とかいろいろあるんだろ…名前も英国風っぽいとか、珠洲ちゃんみたいに日本風っぽいものもあるし。文字も読めるし、言語もなんで通じてるんだ…？

「…考え始めてもキリねえよな…」

俺はため息をついて呟く。まあ、いつか誰かが説明してくれるだろ。説明なくても、まあこの世界楽しいからいいや。

そう思って、俺は茶髪の子の元へ走る。

「ねえねえそのキミーっ!!」

俺の声に、茶髪の子は振り返った。振り返る姿も可愛い、うん。

「あのさ、俺といっしょにお昼食べない？」

俺はにっこり笑顔で女の子に言う。女の子はぽかんと俺を見て、くすくす笑い出した。

「私、あなたのこと知らないわよ？」

「うん、俺もキミのこと知らない、これナンパだし」

俺の言葉に、女の子はきょとんとして、

「なんぱ？なんぱって？…難破？」

と聞き返した。いやいやいや待てい、難破って何だよ難破って。

「うーん…もしかしてキミ、天然ちゃん？」

俺は笑顔を崩さず訊ねた。だって、俺天然も好みだし、うん。  
なのに女の子は、

「…すみません、ちょっと急いでるので…」

と、早足で俺から離れて言った。あれ…あれ？俺のナンパは完璧だったと思うんだけどな…。

俺は首を傾げながらも、次の女の子を探す。

「…あ、あの子にしよ」

次に見つけたのは、黒髪さらさらの大人っぽい美人。  
でも…結果は同じ。作り笑顔を浮かべて、走り去って行った。

「うーん…じゃあ次は…」

俺が次の女の子を探そうとすると、その邪魔をするかのように腹がぐうぐうと鳴った。

「…腹、減ったな」

仕方ない、諦めるか。そう考えて、俺は探すものを女の子から店に変えた。

「えっと…旨そうな店無いかなー…」

そう呟きながら歩く俺の目に留まったのは、『フェルトシア料理専門店』という店。

この国の食べ物…って、なんなんだろう？そういえば、この国の民族料理っぽいものを食べたことがない。城では、なんか普通の洋食だったし。

「…ってことで、あの店に決定」

俺はそう呟いて、店の暖簾のれんをくぐった。…あ、今更『独り言多い』  
なんて言うなよ？十分知ってるから。

\*\*\*\*\*

「いらつしゃい」

俺が店に入ると、優しそうなおばさんが歩み寄って来た。

「あれ、始めて見る顔ねえ…お兄ちゃん、この店は初めて？」

「うん…てかアカネ町自体始めて」

「へえ…どこから来たの？」

「ムギ村」

そんな会話をしながら、俺は席に案内された。口調が少しぶっきらぼうなのは、腹が空いてるから。

「ムギ村かあ…けっこう近いのにね」

おばさんの言葉に、俺は笑顔で答える。今はどうでもいい会話より、ご飯が欲しい。

「あの、メニューとかってどこに？」

おばさんの言葉が止まった瞬間を見計らって、俺は訊ねた。

おばさんは、

「え？あ、ああ、ごめんなさいね、すっかり話しちゃったわ。ほら、あそこに書いてあるわよ」

と言って、壁を指差した。壁には、メニューの書いてある紙が貼っていた。

でも…文字は読めるけど、どんな食べ物なのか想像がつかない。

「えっと…おばさん、おすすめて何かある？」

俺が訊ねると、おばさんは『人気メニュー！』と書かれている欄を指差して、

「あれかしらね。ヴィヤスープ」

と言った。ぶい、ぶいやスープ…？スープの一種か…？

「ぶいやスープ…って、何？てか、スープじゃ腹いっぱいにならないと思うんだけど…」

俺の言葉に、おばさんはきょとんとして、次には笑いだした。俺がきょとんとしていると、おばさんは、

「ヴィヤスープを知らないの？スープと言っても野菜とかがいっぱい入っているから、食べきれないほどよ」

と笑って言った。へえ…じゃあ、シチュー的なものなのか。

俺はまだくすくす笑ってるおばさんに、ヴィヤスープを注文した。

「はあ…もうわけ分かんねえ」

おばさんが厨房に入って行った後、俺はそう呟いて机に突っ伏した。お気楽な俺だが…なんでこの世界の文字が読めるのかとか、気になることはいっぱいある。なのに、なんでか分からない状況が歯痒い。珠洲ちゃんあたりなら知ってんのかな…。そんなことを考えていると、

「ヴィヤスープ、おまちどお〜」

という声。

「…え、早くね！？いくらなんでも！！」

俺は驚いて振り向く。でも、後ろにはちゃんと、ヴィヤスープと思われる深皿を持ったお婆さんの姿。

お婆さんは俺の言葉に下手なウインクを返して、

「私は『調理魔法だけは得意だな』って言われているの。手作りにも負けない味よ」

と言った。調理魔法…またまた便利そうな魔法があるもんだ。

俺はそう思いながら、スプーンを手に取った。

「はい、これがヴィヤスープよ」

お婆さんは、深皿をテーブルに置いた。中には、白い液体の中に沈む、色とりどりの野菜。

…こんな書き方じゃ旨そうじゃない？じゃあ、もっと簡潔に言っと…ホワイトシチューだな、うん。

でも、見た目はともかく味が気になる。俺はスプーンで白いスープをすくい、口に運んだ。

「…どう？おいしいでしょ」

お婆さんが余裕たつぷりの笑みを浮かべて、訊いてくる。

味は…なんだろ、ホワイトソースっぽいけど、ホワイトソースじゃない。でも、他に例えるものが無い。

不思議な味だ。でもなぜか…、

「はい」

俺の言葉に、おばさんはもつと笑顔になった。そして、

「でしょう？その野菜も自家製なのよ」

と、野菜を指差す。この野菜も、不思議な味がする。でも、なぜか旨い。

「これ…フェルトシアの家庭料理なの？」

俺の問いに、おばさんは頷いた。

「けっこ昔から作られている料理でね、これを嫌いな子供はいないわ」

…さすがに『嫌いな子供はいない』という部分は信じがたいが、旨い料理に満足している俺はさっきよりずっと良い笑顔でおばさんの話を聞いていられた。

しかし30分くらい続くおばさんの料理自慢話に、さすがのヴィヤスーブ効果も薄れたらしい。

俺は顔の筋肉が硬くなつていくのを感じた。そして、

「でね、この料理は…」

「ごめんおばさん！俺人待たせてるからそろそろ出るー！」

俺は耐え切れず、おばさんの話を強制的に終わらせた。

「え？あら、もうこんな時間。楽しい話は時間が立つのが早いわね

え  
」

おばさんは時計を見て、ほほほと口に手を当てる。正直、俺は楽しくなかったけどね、この話。

そんな俺の心に気付く訳もなく、おばさんは、

「じゃあ、お会計ね。600リルになります」

と言った。高いのか安いのかよく分かんないけど、俺は銅貨を6枚渡した。

これで良いんだよね？

「はい、ちょうど。じゃあ、また来てね」

おばさんは満面の笑顔で送ってくれた。

「また来ます。…料理の話はもう訊きたくないけど」

俺が小さな声で付け足した言葉を、おばさんはもちろん知るはずもない。

『ヴィヤスープ』は、フランス料理たぶんの『ブイヤベース』からひねりました。

それと：ポイントが61ptになりました！！60超え、めちゃくちゃ嬉しいです。

ありがとうございます。

評価、感想など待ってます！！辛口大歓迎、よろしくお願いします！！！！

店から出た後、俺は珠洲ちゃんと合流した。そしてそのまま、トルキンの店へ向かう。

「トルキンさん、コウキのマントはもう出来てる?」

珠洲ちゃんの問いに、トルキンはにっこりして(というか、どや顔で)頷いた。

「これでどうかな?」

トルキンは、俺に濃紺の布で出来たマントを渡す。広げると、予想以上の大きさだ。どっしりしていて、凄く丈夫っぽい。

「コウキ、羽織ってみて」

珠洲ちゃんの言葉に、俺はマントを羽織った。

こんな厚い布だから、羽織ったら暑いかなと思っただけど、思ったより厚くない。というより、風が通り抜けて快適だ。

「...驚いたかな?」

びっくりしてる俺を見て、トルキンが満足気に言う。

「わしは服作りだけは魔法に頼らんからな。その風通しは、わしな  
らではなのだぞ」

ふふん、と得意気に言うトールキン。…地味にうざい、と思うのは俺だけだろうか。

でも、俺のイライラは珠洲ちゃんの、

「ふーん、コウキに濃紺って似合うのね」

という言葉に、宇宙の彼方へ飛んで行った。

「似合う？でしょでしょ、似合うでしょ！珠洲ちゃん、いつつもあるんこと言ってるけどやっぱり俺のこと…」  
「ふッ」

もはやお約束となった珠洲ちゃんのパンチが、俺の言葉を遮った。

「珠洲ちゃん…いくらシンデレでも…暴力は…」

俺はごほごほ咳き込みながら言う。  
でも珠洲ちゃんはきよとんとして、

「っ、つんで…？何それ」

と聞き返した。

「え？あ、そっか、この世界には『シンデレ』って言葉はないのか…」

俺は思わず呟いた。確かに、この世界の様子を見る限り、『シンデレ』とか、そういう言葉は無さそうだ。

「で、なんなのその…っん…っんでれ？」

珠洲ちゃんは俺を睨んで訊いてくる。まさか、俺が珠洲ちゃんに何かを教える日が来ようとは…!!  
嬉しさに胸を躍らせながら、俺は説明する。しかし…

「ツンデレっていうのは、ツンツンしてるけど時々デレる人のこと」  
「…は？意味分かんない」

…俺には、説明力が無いしかった。でも、これが一番簡単な説明の仕方だと思っただけだな…。  
そう思いながら、俺は説明し直した。

「だから、えっと…いつもはツンツンしてて、態度とかが冷たい人でも時々優しくなったり甘えたりすること」

今度は少し分かったらしく、珠洲ちゃんはふーん、と俺を見た。  
そして、

「…まあいいわ。つんで…ッ、ツンデレはとりあえず置いといて、さっさと会計して帰るわよ」

と言う。何が、まあいい、のか知らないが、とにかくさっさと帰りたいらしい。

「トールキンさん、全部でいくら？」

珠洲ちゃんはトールキンに向き直ると、ひまわりのような笑顔を見せる。その笑顔、俺にも見せて欲しいんだけど…。  
そんな俺の思いは露知らず、その笑顔を向けられたトールキンは、

「マントが12000リル、他5着の普段着が6000リルづつで…合計42000リルですね」

と、事務的に話を続ける。

42000リル…物価はよく分かんないけど、日本円ではどれくらいなんだろう？

でも、さっきの昼飯が600リルだったから、同じくらいかな…？そんなことを考えていたら、いつの間にか会計が終わっていた。

またお越しくださいませー、という言葉に送り出され、俺と珠洲ちゃんは店を出る。

「さて、と…生活必需品は…もうこれで全部ね」

珠洲ちゃんがメモを見て呟く。

「え、嘘、服だけ？あれは？歯ブラシとか」

俺は驚いて聞き返す。訊いてから『歯ブラシ』という単語はこの世界にもあるのだろうか、と思った。

でも予想に反して珠洲ちゃんの答えは、

「歯ブラシは客人用があるってマリアさんが言ってたわ」

だった。どうやらこの世界にも、歯ブラシは存在するらしい。

「だから、当分は服だけで大丈夫」

珠洲ちゃんはそう言いながら、早くも箒を手にした。

「…あれ？珠洲ちゃん箒どっから？箒の預け場所なんてこの町にあ

「たっつけ？」

俺は不思議に思って訊ねる。珠洲ちゃんにはあーっとため息をついて、

「ちゃんと朝行きました。コウキが町をきよるきよる見てる間にね。しかも、筥預け場所はどの町にもあるのよ？この国の主な交通手段は筥だもの。あ…平民は、だけどね」

付けくわえられた言葉に、俺は食い付いた。

「平民？つまり他の移動手段もあるってこと？」

瞳を輝かせる俺に、珠洲ちゃんは苦笑して頷いた。

「貴族や王族の方は、筥なんて使わないの」

「竜とか！？竜の引く馬車とか？」

「竜？まさか、違うわよ」

珠洲ちゃんは、竜、と訊いた途端笑いだした。

「竜に馬車を引かせられるものなら、見てみたいわ」

なんだ、竜じゃないのか。俺は少し落胆したけど、やっぱり好奇心は残る。

「じゃあ、貴族や王族は何に乗るの？」

「そうね…天馬の引く馬車、かしら」

…天馬！？竜と同じ部類じゃん！めっちゃめっちゃファンタジーじゃん

！！

「天馬つて、あれ？ペガサス？羽生えてて角生えてる馬!？」

「…角が生えてるのはユニコーンね」

俺の言葉に、珠洲ちゃんは冷静につっこむ。

「うわ、すげえ…それめっちゃめっちゃ見てみたいんだけど」

「…はあ、いつか見れるわよ」

あまりにもテンションの高い俺に疲れたのか、珠洲ちゃんはため息をついて行った。

「とにかく、今日はもう帰るわよ。明日も朝早いんだから」

そう言つて、箒に跨る珠洲ちゃん。俺も箒に跨りながら、

「…明日も早いのか？」

と、少しテンションが下がった声で訊ねた。

え、なんでテンションが下がるのかって？だってここんとこずっと早起きだぜ？いままで時間を無視して寝てたんだもん、疲れるだろ。珠洲ちゃんはそんな俺の心境に気づくはずもなく、

「当たり前。コウキは早く召喚獣の魔法を使いたいんでしょう？だつたらそれまでに初級魔法や中級魔法をマスターしなきゃ」

と言つた。召喚獣か…召喚獣のためなら仕方ない。

「…はあ、うん、召喚獣のためなら頑張るよ」

俺はこくと頷いて言った。

なんか…今日はいつにもまして文章が変な気がします、本当にすいません！！

文章力、つけたいなあ…（苦笑）。

ちなみに、たぶん明日は更新できません。

…部活、さぼりた…（殴）。

あれから数日間、俺はずっと珠洲ちゃんに魔法の指導を受けていた。初級魔法も中級魔法も、完璧にマスターした。

初級魔法は少量の火をつけたりとか水を出したりとかで、中級魔法は食べ物や生き物を出すことだ。

なぜか知らないが、食べ物や生き物のほうが難しいらしい。

そして、今日は上級魔法を習うんだけど…。

「ね、お願い！召喚獣やらせてってば！！」

「だーめ、上級魔法をマスターしてから」

こんな会話が、さつきからずっと続いてる。だって俺は召喚獣やりたいのに、珠洲ちゃんはだめっていうんだぜ？

「…じゃあ、一回！一回でいいから！一回で成功しなかったら上級魔法をマスターするまで待つから！」

「一回…ね。まあ…一回で成功するはずはないし…うん…一回だけよっ。」

俺のこの言葉に、珠洲ちゃんはしぶしぶ頷いた。

「じゃあ…まずこの魔法陣を床に書いて」

珠洲ちゃんは魔法陣の見本が書いてある紙と白いチョークを俺に渡して言った。

「…俺、絵下手なんだよなあ…珠洲ちゃん、書いてくれない？」

俺は魔法陣を見て、珠洲ちゃんに言った。髪に書かれている魔法陣には複雑な文様とかがいっぱい書いてある。…書ける気がしねえ…。

「だめ、これは術者が自分で書かないと意味がないの」

「え…俺、書けねえよ」

俺は紙と睨めっこをしながら呟いた。

「うーん…出来る人なら魔法陣無しでも召喚獣を呼び出せるようになるんだけど…でもまずはみんな魔法陣を書くし…もう、とにかく書け!!」

えーっ?なんか最後キレてませんかー?

俺はそう思ったけど、これ以上怒らせたらやらせて貰えないような気がして、素直に魔法陣を書き始めた。

\*\*\*\*\*

「…まあいつか」

数十回の書きなおしの後、やっとokが出た。これでも歪んだ円に何か分かんない紋様ばっかなんだけど…まあいいだろ。  
俺はため息をついて、

「次は何するの?」

と訊ねた。

「その前に、召喚獣についての説明をするわ」

珠洲ちゃんは俺を睨んで言った。俺、習うより慣れる派なんだけどな…。

「召喚獣は、ただの生き物を造り出す魔法と違い、異世界からなんらかの生き物を召喚する術のことよ。

この世界と異世界の間、歪み、を作って、魔法陣をその出入り口にするの。

コウキが、世界を渡る術、を身につけているのなら、もちろん異世界の存在は知ってるでしょう？」

「俺の世界から呼び出すの？え…なんか微妙…母さんとか呼び出されたりしないよね？」

俺の言葉に、珠洲ちゃんはため息をついた。

俺、ため息つかれるようなこと言った？だって、母さんとか呼び出されるの嫌じゃん。

「異世界は、コウキのところだけじゃないわよ。もっといっぱい別の世界があるんだから。それに、人が呼び出されるなんて聞いたことないわよ」

珠洲ちゃんは笑いながらそう言う。

「なんだ、良かった…じゃあさっさと…」

「まだ説明は終わってないわ。

その魔法陣により、異世界の獣が呼び寄せられる。その異世界から呼び寄せられた獣と、契約、をしなきゃいけないの」

「…、契約、？」

俺は訊き返した。珠洲ちゃんはこくと頷く。

「獣が契約をするかどうか訊いてきたら、必ず、する、と答えなきゃいけないの。そうじゃなきゃ、獣は元の世界へ還ってしまふ。契約の方法は、魔法陣に自分の血を一滴落とし…」

「ま、待って待って、血!？」

俺は慌てて珠洲ちゃんの手を遮った。相手に自分の血を飲ませるとか…怪しい宗教の生贄の儀式っぽいんですけど…!

珠洲ちゃんは平然とした顔で、

「そうよ、血。はい、これでやってね」

と言って、俺に銀色のナイフを渡した。…やばい、ちょっと怖くなってきた。

「こんなところかな…まあ、一回目で成功するなんて思っていないから、楽にやってね。」

杖をくるって回して、魔法陣の中をつくだけだから。まあ、見たことあるから分かるわよね」

珠洲ちゃんはそう言うと、近くの椅子に座って俺と魔法陣と眺め始めた。

「どうやら、ここからは放置らしい。」

「…よし、やるか!」

俺は覚悟を決め、杖を握った。

まず、珠洲ちゃんがやったようにくるんと杖を回す。途端に、青く

光り始める魔法陣。

ここまでは順調なようだ。珠洲ちゃんは少し驚いたらしく、椅子から身を乗り出した。

俺は次に、たん！と勢いよく、杖を魔法陣の中に振りおろした。魔法陣の中から吹いている強風が、俺の髪を揺らす。ぱあっと魔法陣から光が溢れ、ごおおという音がする。

「…嘘」

珠洲ちゃんが、そう呟くのが聞こえた。どうやら、成功らしい。見ているだけでは感じられなかったが、何かが来る予感がする。そして、俺の予感は当たっていたらしい。魔法陣の中から、何かが出てくる。

「…嘘、嘘、嘘」

珠洲ちゃんがそっぴいなながら、後ずさった。

そして、その出てきたものの全体像が見えた時…俺も、尻もちをついた。

そして思わず漏れる、

「…嘘、だろ？」

という台詞。だって、魔法陣の中から現れたのは、

「竜の召喚獣、だなんて…」

銀色の鱗を持った巨大な竜だったからだ。

story 17 . . . The first art of summons . . .

やっと…やっと晁紀の召喚獣登場です…ッ！

…つつこまないでください、竜好きなんです、私。女子の癖に、恐竜とか昔から好きだったんです（笑）。

そして、アクセス数10000突破！！読者様、ありがとうございます  
ます！

これからもよろしく願います！！

俺の前に現れた竜は、ぐるりと部屋の中を見回した。

そして、俺をじろりと眺め続ける。さすがの俺も…体長6mほどもある竜に睨まれて、何も喋れない。

そして竜は俺をみて、

「…主様めしあまツ！！1000年ぶりに呼び出してくれたのですねっ！！」

と言った。俺は竜を見つめて、固まる。

…ちよっと待って。キャラ違くない？俺の予想してた竜って、重々しく偉そうなことを言う竜だったんだけど…。

俺はそう思いながら、

「主様って…俺？俺、竜…さんのこと呼び出したの、初めてなんだけど…」

と言った。少し予想と違って、声は震えていた。

しかし声の震えなど竜は気づいていないらしく、

「竜さんだなんて。私わたくしはエルヴィーネと申します。お好きなようにお呼びください。

そして、私をお呼びになられたんですもの、貴方様は主様なんです。たとえ、会ったことがなくとも」

と、たぶん笑顔…なのだろう、歯を見せて言う。でも、歯というより牙だからめちゃくちゃ怖い顔になるんだけど。

「…コウキ？どんなかんじなの？」

珠洲ちゃんが、俺の横に来てこっさり訊いてくる。そういえば、召喚獣の言葉ってその術者しか理解できないんだっけ…。前に珠洲ちゃんが言ったことを思い出して、俺は今の会話…というより、竜…エルヴィーネの言葉を珠洲ちゃんに教えた。

「へえ…もうちょっと堂々とした…大人の男の人みたいなイメージをしてただけ…」

「どっちかというところ、20くらいの女の子っぽいよ、この竜」

俺と珠洲ちゃんは囁きあう。相手がこんな竜だったからか、最初にあつた警戒心は薄れてきていた。

なんで声が震えていたんだろう、と思うくらいに。でも、エルヴィーネはなぜかこの様子が気に入らなかつたらしく、

「主様、その少女と話している暇があるのなら、さっさと契約を致しましょう？」

と、少し不機嫌そうな声で言った。

こんなキャラでも、相手は竜。俺は慌ててエルヴィーネに向き直った。

「そ、そうだな、うん、契約しよう」

…あれ、でも契約って確か、血を魔法陣に落とすんだよね？

そう思い出すと、ちよつと…恐くなってきた。一滴で良いつて言つてたから大きな傷なんてつける必要は無いんだけど、いままでナイフで自分を傷つけたことなんてないわけで…ナイフを持つ手が、震えてくる。

「…一滴で、いいんだよね？」

俺は確認するように、エルヴィーネに訊ねる。

「ええ、一滴で大丈夫です」

エルヴィーネの言葉に覚悟を決め、俺はナイフを腕に当てた。ぐつと力を込めると、血が滲む。

痛みを堪えながら、なんとか血を魔法陣に落とす。

途端に、もともと光っている魔法陣は更に光を増した。

「…う、わ」

眩しくて、思わず目をつぶってしまいそうになる。でも、その光も数秒で収まっていった。

「…契約完了です」

エルヴィーネの言葉に、俺は魔法陣からエルヴィーネへ視線を戻した。

「主様の命が終わるまで、しっかりとお仕えさせて頂きますね」

そう言って、頭を下げる…おそらく、お辞儀をするエルヴィーネ。

「え…あ、ああ、よろしく、エルヴィーネ。…うーん、エルヴィーネって言うのもな…エルでいいか？」

俺は頭を掻いて言った。『ヴィ』の音とか囁んじゃいそうだ。

「はい、好きにお呼びください」

エルヴィーネ…いや、エルはそう言った。さっそく、呼ばせてもらうことにする。

「じゃあさ、エル、質問していいか？」

「なんなりと」

俺の質問に、すぐに答えるエル。なんか、いちいち答える言葉がつかいいんだよな…。  
そう思いながら、俺は訊ねる。

「エルって…何歳？メス…女の子、だよな？」

「はい、私はもちろん女です。歳は…何歳だったでしょうか…」

エルの瞳が、どこか遠くを見つめる。何歳か憶えてないほどののかな？え、まさかのおばあちゃん？

「あ…そういえば、さっき、1000年ぶり、って言ってたよな…1000歳は超えてるってことか？」

「そうですね…確か、1200を超えていたとは憶えているのですが…」

エルは悶々と考え、ぶつぶつ呟いている。

…待て待て待て、1200？竜ってそんなに生きるもんなのか…。  
俺は新しく生まれた疑問を、口にする。

「…なあ、竜って大体どれくらい生きるんだ？」

「大体、3000年ほどですね。長生きのものは5000年ほど生

きますが…」

エルは、この疑問には簡単に答えた。それにしても5000…生きる歴史じゃん。

でも、普通の竜が3000年くらいだとすると…。

「エルは、成人したくらいなのか？」

俺の問いに、エルははいと頷いた。そして、

「はい、私はもう大人です…数十年前に、なつたばかりですが」

と続ける。…数十年前って…竜の時間はどれだけなんだよ…。

そして、少し呆れてる俺の背中をつんつん突く者がいた。後ろを振り向くと、そこには珠洲ちゃん。

珠洲ちゃんは、

「コウキ、初めてであんまりにも長く使っていると魔力の消費が激しいわよ」

と俺に囁いた。

「え？でも俺疲れた感じしないよ？」

俺はきよんとして訊く。全然疲れてないのに、せつかく来たエルを元の世界に戻すのはなんか勿体ない。

「召喚獣は後から来るから。一回成功すれば、またいつでも呼び出せるんだし」

「うーん…分かった」

俺はしぶしぶ、エルを返すことにした。珠洲ちゃんが師匠だし、なぜか不機嫌そうなエルに向き直る。

「なあエル、今回はそろそろ還ってくれないか？」

「もう…ですか？」

エルは少し残念そうな声で言う。

「うん…また、いつでも呼び出すからさ」

俺はエルに笑顔を向けて言った。エルはなぜか目を輝かせて、

「ええ、またいつでもお呼びください！特に御用が無くても、呼んでくださいね？」

と言った。俺が頷くのを確かめて、エルは青い光となって消えた。今まで大きな竜がいたせいか、部屋が急に広く感じられる。

「……………」

珠洲ちゃんは今になってまた膝の力が抜けたのか、無言で床に膝をついた。そして、擦れた声で呟く。

「竜の召喚獣だなんて…マツカートさんの言ってた『場合によっては』って…召喚獣のことだったのね…」

なんか…ふざけちゃった気がします、エルヴィーネのキャラ。すいません。

最初は雄な予定だったんですけどね…(汗)。

あと、ともさん、成海さん、『ひきこもり設定』などに関連する出来事が起こる予定…ですので、まだおつき合い頂けると嬉しいです。ただ、まだそこまで長い気がします…。

「んんん…」

俺はぼんやりする視界で、窓を見た。眩しい日差しが、窓から入ってきている。

「…そうか、朝か」

俺はぼつりと呟いた。昨日、家（マリアの家だけ）に帰った途端、疲れて寝ちゃったんだった…。

やっぱり、召喚獣の魔法は疲れるらしい。

俺がぼんやりと考えていると、ドアの方から、

「…お兄ちゃん、起きた？」

という幼い声がした。声の主は、もちろんアリア。

「あ、うん、起きたよ。てか、結構日が高いけど…今何時？」

俺はアリアに向き直って訊ねた。

「12時少し前。お母さんが、『せめてもう起きなさい』だって」

「…久しぶりにそんなに寝たな」

俺は欠伸を噛み殺して呟いた。こんな時間まで寝たのはこの世界に来てから初めてだ。

俺は慌てて着替え、階段を下りた。

「コウキ、随分寝てたねえ」

マリアが皿をテーブルに置きながら言う。

「あ、うん、なんか疲れちゃって…」

俺は頭を掻いて、苦笑混じりに言った。

「昨日、始めて召喚獣の魔法を使ったんでしょ？珠洲から聞いたよ。疲れるのも当たり前だね」

マリアは頷きながらそう言う。椅子に座りながら、

「そういえば、珠洲ちゃんがエルのこと見てさだ…って言ってたけど、ランクって召喚獣の種類で変わるの？」

と訊ねた。マリアはこくと頷いて、

「私は魔法に詳しくないんだけどね、召喚獣を出せるだけでも、かなりのランクってことは知ってるよ。以上じゃないと出せないらしいし…」。

あ、でも、例外、が王都にはいらっしやるんだけど」

と言った。そして、

「竜の召喚獣だなんて、間違いなくさだよ。そんな召喚獣を出せるのは、第二王女様くらいじゃないかな」

と続ける。へえ…エレナも凄い奴出せるんだ…。

俺はそう思ったけど、それより気になったことがある。

「なあ、王都に、例外、、がいるって言ったけど…どんな人？」

俺はそう訊ねた。でも、俺はマリアの、

「ああ、ルイス・フィユール様だよ」

という答えに、絶句した。ルイス！？あのめっちゃめっちゃムカつく奴！？

マリアはそんな俺の様子気付かず、話を続ける。

「ルイス様は、魔力ランクはこらしいんだけどね。子供の頃に、誰かが描いた魔法陣で試しにやってみたら召喚獣が出てきたそうだよ」  
「へえ、すげえな…って、え！？人が描いた魔法陣で？」

俺は聞き流しそうになって、慌てて聞き返した。

「魔法陣って、自分で書かなきゃ機能しないって…」

俺の言葉に、マリアは頷く。

「そうだよ、普通はね。でも、ルイス様は他人の描いた魔法陣でも召喚獣を出せるのさ。」

そこも、あの方の、例外、。

…まあ、魔法陣がなきゃ出せないらしいんだけどね。そこは、ランクの魔術師といっしょかな。

でも、あの方がこの国唯一の、例外、、なのは確かだよ」

マリアはそう一気に言って、パスタを口に運んだ。でも、俺はフォ

「クを動かさない。  
なんか、負けた気分だ…。」

「…あ、そういえば、ルイスの召喚獣って？」

俺はふと思いついて、再び訊ねた。  
「マリアはパスタを飲み込んでから、

「豹だよ」

と短く答えた。

「豹って…動物の？」

間抜けな質問をしてしまった、と気づいたのは、口に出した後だった。

「もちろん。それ以外にどんな豹がいるの？」

「あ、いや…気にしないで、ごめん」

俺は苦笑して、パスタに意識を戻した。

しかし、食べながらもルイスとルイスの召喚獣のことを考えてしま  
う。

豹か…かっこいい召喚獣と契約してんじゃん、あいつ。

てか、ルイスと言えばエレナだよなあ…。エレナに会いたいな…最  
近どうしてんだろ。

俺はエレナの顔を頭の中に浮かべて、はあっとため息をついた。

\*\*\*\*\*

「…コウキ…あなた、ほんとうに下手ね？描き直したの何回目？」

俺は珠洲ちゃんの冷たい視線にさらされながら、今日何回目かの魔法陣を描く。

『珠洲ちゃんの、下手、って言葉も、今日何回目？』『…そう言いたいところだが、今は取りあえず魔法陣に意識を集中させる。なんとか、魔法陣らしきものにはなった。』

「じゃあ、もうやり方は分かってるでしょ？もう一回召喚獣…エル、だっけ？エルを出して」

珠洲ちゃんは腕を組んで俺を見る。俺は昨日と同じことをした。当たり前だが、またエルが現れる。

「主様ッ！お早いお呼び出しですね、嬉しい限りです！今回は、どのような御用件でしょうか？」

さすがに二度目は、エルのテンションに驚かない。…白銀の鱗と鋭い群青の瞳には、いまだにすこしビビるけど。

「いや、用件っていう用件は無いんだけど…ほら、あの…なんとなく」

俺はただどしく答える。魔法の練習で呼び出した、とは、なんとなく言いにくかった。

「そうですね？…あれ、今日もあの少女がいつしよなのですね」

エルはふと珠洲ちゃんに顔を向け、言った。

「ああ、珠洲ちゃんは俺の師匠だし」

俺はエルに言う。エルはふーんと、俺に目を戻した。そしてふと思つたように訊ねる。

「そつといえば、主様は竜に乗って空を飛んだことはお有りですか？」

「え？ナイナイナイ、あり得ない。俺竜と会つたのエルが初めてだから」

俺はエルの質問に、首をぶんぶんと横に振つた。

「そうですか。…ならば、今日は私に乗って空を飛んでみませんか？」

「…え、嘘、いいの!？」

エルの言葉に、俺は目を輝かせた。竜に乗って飛ぶって…なんか、めちやくちやかっこいい。

「ええ、もちろんですわ。私なら、魔術師たちの使う…なんでしたっけ、箒とやらよりも高く、早く飛べますし」

エルは得意気に言う。

「え、じゃあ、今日飛んでもらっていい？俺めっちゃ乗ってみたい！」

「では、背中にお乗りください」

エルはそう言っつて、乗り易いように低くしゃがんだ。  
俺は、ちよつと待つて、と言つて珠洲ちゃんに言つ。

「あのさ、今からエルに乗つて飛んでくるから。…だからさ、今日の魔法の練習は…」

「分かつてるわ、今日は免除してあげる。というより、私も今日はしたい事があつたから、コウキが出かけてくれるなら嬉しいわ」

俺の言葉にかぶせ、珠洲ちゃんが答える。

「ありがと、珠洲ちゃん！」

俺はそう言つと、エルの背中に飛び乗つた。

ばさつと翼を開き、エルは飛び立った。飛行機が離陸した時に感じるような、胃袋がぐんつと持ちあがる感覚。そして一瞬後には、空の上。

「…凄！早いじゃん！」

俺は遙か下の地上を見て歓声を上げた。気分は、始めて飛行機に乗つた小学生だ。

「もつと高度を上げましょうか？」

「うん、頼む！」

俺の返事に、エルはもつと高く飛んだ。箒で飛んだ時よりずっと高いから、この国の様子がよく見える。

東の方に海があつて、島らしきものが確認出来る。西にある山々はグレイト・マウンテンレンジ、偉大なる山脈で、あとは特に目立つた山とかはない。

遠くに見える王都まで、点々と小さな町があるけど、他は草原だけ。

なんか、凄く地図に描きやすそうな国だ。

「あ、あれはなんでしょう?」

エルの声に、俺は、ん?と聞き返した。

「ほら、山脈のすぐ下に、行列が…兵士と、少女と…」

エルは目を細めて、グレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈の下の方を見ている。

でも、俺にはなんも見えないんだけど…。やっぱり、竜って視力いいのかな。

「エル、俺には全然見えないんだけど…気になるから、行ってみて  
「はい」

俺の言葉に、エルは頷いてグレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈の方へ飛ぶ。

すぐに、その行列は見えてきた。先頭の白馬に乗っているのは、ふわふわカールの金髪に、白いドレスの少女。そして、そのすぐ隣を俺の大嫌いな奴。…そう、エレナとルイスだ。

その後ろに、数十人の兵士が続いている。

「エレナ!」

俺はエルの上から身を乗り出して叫んだ。エレナはきよるきよると辺りを見回し、俺に気づいて目をまるくした。ルイスも、俺を見てぼかんとしている。

「エル、エレナ達の近くに降りてくれ」  
「はい」

エルはその行列のすぐ傍に着陸した。俺は地面に降りると、走って  
エレナの方へ向かった。

s t o r y 1 9 . . . O n l y i n L e w e s . . . t h e e x c e n

祝、20話目!!

そして…総合評価が、100pt超えました!!

本当に本当に、読者様に感謝です!これからも、よろしくお願ひします!!

「エレナ、久しぶり。俺、コウキだけど憶えてる？」

俺の言葉に、エレナは答えない。まだ、目を丸くして俺とエルとを交互に見つめてる。

あのルイスでさえ、俺がエレナを呼び捨てにしたのに何も言わない。数十秒後、やっとエレナは口を開いた。

「コウキ…もちろん憶えてるけど…あの竜は…？」

「良かったあ、憶えててくれたんだ！そうそう、あの竜はエルつつて、俺の召喚獣」

俺は憶えててもらえたことに満面の笑みを浮かべながら、エレナの質問に答える。

「こ、コウキの召喚獣？あの…エルっていう竜が？」

「正式には、エルヴィーネですが」

エレナの言葉に、いつの間にか近くに来ていたエルが答えた。

エレナは驚いてエルを見る。もともと、驚いていたのはエレナだけじゃなく、周りの兵士やルイスまでも驚いていたけど。

「あ…エルヴィーネ？そう…じゃあ、貴方はコウキと契約をしているのね？」

「はい、今は主様…コウキ様に、お仕えしております」

「そう…」

エレナは俺とエルを交互に見た。そして、

「まさか、コウキが竜の召喚獣を使っていたなんてね」

とルイスに言う。ルイスはなんともいえない表情で俺を見ていたが、

「…そうですね、私も驚きました」

と、苦虫を噛み潰したような表情で言った。

「…まあ、貴方に召喚獣のことで驚かれても、て感じなんだけれどね」

エレナは苦笑してルイスに言う。たぶん、ルイスが魔力ランクCでも召喚獣を使えるから、そう言ってるんだろう。

「…エレナ様も、この国に二匹としない召喚獣をお持ちではありませんか」

「まあね…コウキと同じランクだけれど」

エレナは俺をちらっと見て言う。エレナも、Sランクの召喚獣使えるのかな？

俺はエレナにそう訊ねた。するとルイスが、

「馬鹿者！エレナ様はこの国唯一の、Sランクの魔力を持っているのだぞ！貴様のような中途半端な力の持ち主ではないのだ、そんなことも知らなかったのか！」

と、俺に怒鳴ってきた。…あの、俺ルイスに聞いてないんですけど。

「はあ？中途半端ってなんだよ中途半端って！てか俺の魔力ランクなんてお前知らないだろ？  
ていうか、俺お前に訊いてねえし！」

俺はルイスを睨んで言う。そんな俺とルイスのやりとりを、くすくす笑って見ているエレナ。  
そして、

「まあ、コウキも怒鳴らないで。あのね、Sランクの魔力の持ち主が出たら、国に報告されるの。まだ報告は一件も無いから、コウキがSランクじゃないって分かるのよ。」

ルイスが『中途半端』って言ったのは、SランクじゃないのにSランクの人と同等の召喚獣を使っていたから」

と、丁寧に教えてくれる。さすがエレナだ。

「へえ…ていうか、エレナSランクなんだ？凄い…召喚獣って何？」

俺はふと、今更な質問をする。

「私の？グリフォンのオズウィルよ」

「ぐ、ぐり…？」

「グリフォン。…知らない？半分が鷲で、半分がライオンの動物なんだけど…」

きよとんとしている俺に、丁寧に説明してくれるエレナ。でも…何その恐そうな動物。

しかも、『怖い』ってだけで、全然想像つかねえし。

「…エレナ、その…オズウィル？呼び出してくれない？全然想像つ

かないんだけど」

「え、今？今はちょっと…時間も無いし…私達は行くところが…」

エレナはすまなそうな表情で言う。

「行くところ？どこに？」

「あ…ええ、ちょっと…」

俺の台詞に、エレナは言葉を濁す。ん？なんかあるな？俺の勘がそう言っている。

「ねえ、どこに行くの？めっちゃめっちゃ気になるんだけど」

俺は突っ込んで訊く。が、まだエレナは目を泳がせて『えっと…』と言っている。

もうちょっと掘るべきか。

「なあ、あの…」

「黙らないか！エレナ様が言いたくないのが見て分かるのか馬鹿者！貴様の目は節穴か？」

俺の言葉は、ルイスの怒号に中断された。エレナはぱつとルイスを見る。

「や、だつて気になるし…」

「エレナ様が神参りかむまいりをしていようが、それは貴様には関係ないだろう！」

「あ…」

ルイスの言葉に、俺とエレナは同時に『あ…』と言った。

エレナは『もう』という感じで、手でこめかみを押さえているし、ルイスは『やってしまった』という表情で固まっている。

「かむまいり神参りていうのに…行くんだ？」

俺の質問に、エレナは観念したように頷いた。

短いですね...すみません。今回2000文字いつてないです...。

そして、次の更新はもしかしたら...合宿の後かもしれないです。つまり、16日以降かも、です。

上手く行ったら、合宿前(12日前)にもう一、二話更新出来るかも...。

「ルイス：貴方が口を滑らせたんだから、私がコウキに喋っても仕方ないわよね？」

エレナの突き刺すような視線に、ルイスは頷いた。

「はあ：あのね、コウキ。コウキは良い人だつて分かってるから教えるけど：、神参り<sup>かむまい</sup>、：、つていうのは、10年に一度行われる儀式でね、王族の誰かが、偉大なる山脈<sup>グレイト・マウンテンレンジ</sup>の頂上まで、お参りにいくことなの」

「へえ：なんで、偉大なる山脈<sup>グレイト・マウンテンレンジ</sup>の頂上？別に神様がいるわけでもないだろうに」

俺はそう訊ねた。だつて、前に珠洲ちゃんが言ったのは、頂上に：：なんだっけ？何か族がいるって：。でも、

「それがね：：いるのよ。神様ではなく、神の末裔といわれている人だけだね」

エレナは、そう答えた。

「：嘘、だつて珠洲ちゃんが前頂上には何か族がいるって：：」  
 「ミサ族、ね。でも、それは噂よ。私達がわざと流したの」  
 「わざと？なんで？」

俺は眉をひそめて訊く。嘘なんかつかなくても、どうせ誰も偉大<sup>グレイト・マウンテンレンジ</sup>

る山脈に上らない気がするんだけどな…。

「だって、神の末裔がいるなんて言ったら、その力にあやかろうとする者は必ずいるでしょう？」

「どんな人だって…巨大な権力を手に入れられると分かったら、性格だって豹変する。たとえ、事実か事実じゃないか分からなくても、ね」

エレナは少し目を伏せ、言った。ルイスがエレナの後を継いで、

「だから、我々は嘘の噂を流し、グレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈には神の末裔などいないと信じさせているのだ。貴様に教えたのは例外中の例外なのだぞ？」

と言った。うん…分かったけど、その『貴様』って呼び方、そろそろやめてくれないかな？俺には『晃紀』っていう名前があるんだけど。

「そっか…でも、グレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈に上るのがってかなり大変なんだろう？なんでそんな行事続けてるんだ？てか、王国の王女が行かなくても…っていうか、普通は王様じゃないの？そこ」

「コウキ、お父様に万が一のことがあったら、この国はどうなるの。それに、王位を継ぐお姉様も同じ。だからこの行事には第二王女という立場である、私が行くのよ」

エレナがルイスに変わって答えた。

「へえ…っていうか、この国って女も王様になるの？」

「ええ、男女の差は関係ないわ。関係あるのは、生まれた順だけ。それにお姉様も、かなりの魔力の持ち主だしね」

「エレナ様、魔力でエレナ様に敵う者はおりませんのに…だから、私はいつもエレナ様に王位を継いでほしいと…」

「ルイス、跡継ぎについては貴方に何度も言ってるでしょう。私はお姉様と競おうなんて思っていないわ」

「でも…」

ルイスとエレナの会話に、俺は完全に蚊帳の外となった。でも、跡継ぎ問題か…なんか、完全に俺の範囲外だな。

「もうこの話は終わり！コウキだって困ってるでしょ。ルイス、次にこの問題を口にしたら、側近からはずすわよ」

エレナの強い口調に、ルイスはしぶしぶ黙った。ルイスが黙ったことを確認し、エレナは俺に顔を向けた。

「コウキ、ごめんね。こんな話訊かせちゃって…」

「え、あ、ううん、全然」

俺は首をぶんぶん横に振った。エレナはまだ少しすまなそうな顔をしていたが、ありがとう、というふうに少し微笑んだ。うん、エレナにはやっぱり笑顔が似合うよ。

そしてエレナは、あっという顔をして瞳を輝かせ、

「あ、そうだコウキ、貴方も神参りに来ない？」

と言った。

「え！？俺も？」

「え、エレナ様！！何を…ッ！！」

俺とルイスは同時に言った。

「あのね、実は行く途中で兵士の一人が病に倒れちゃって…急遽、来れなくなっちゃったの。だから、一人増えたっていいの。」

コウキは凄腕の魔力の持ち主だし、Sランクの召喚獣を使えるんだから、護衛にも最適よ。」

少し変な人だけど、おもしろいし。コウキさえよければ…来ない？」

エレナは遠慮がちに瞳で、俺を見る。そんな目で見られたら…頷くしかないじゃないか。

俺はルイスの『断れ』視線を無視して、こう答えた。

「是非行かせて頂きます」

エレナちゃん and ルイス登場ーっ！

ちなみに、次の更新は予約更新で13日か14日にする予定です。  
上手くいけば、13日にstory22、15日にstory23  
を更新出来ればな…と思っています。まだstory23は書いて  
いないのですが(汗)。

ちなみに、感想などを頂いても12〜16日の間は返信が出来ませ  
ん。

…感想を頂ければ、ということですが(笑)。

…といった次第で、俺は今山道を歩いている。

珠洲ちゃんに伝えなきゃ、と思ったけど、もうエレナが伝書バトを飛ばしてくれたらしい。

神参りかむまいを教えるわけにも行かないし、どう説明したんだろ…。まあいいか。

ちなみに、エルは一度戻した。山道を巨大な竜連れて歩くわけにも行かないし。

「あ、そういえばさ」

俺はふと思って、エレナに問いかける。

「山頂って空気が薄くて、10分もいられない…って珠洲ちゃん言ってた気がするんだけど…大丈夫なの？」

「え？ああ、それも嘘よ」

「…嘘？え、でも標高12345mなんですよ？」

俺は目を丸くして訊ねた。そんなに高いなら、絶対行き出来ねえ気がするんだけど…。

「そうだけど…頂上は神の聖域だから。末裔とはいえ、神のいる場所、かなりの魔力は満ちているのよ」

「へえ…すげえんだな」

「魔力って、凄いのよ…そういえば、コウキは世界を渡って来たんでしょ？なぜ言葉が通じるのか不思議じゃなかった？」

エレナの問いに、俺は頷いた。…正直お気楽思考だからそんなに気にしなかったんだけどね。

「それも、コウキが魔力を持っているからよ。魔力は、いろんなことを可能にさせるの」

「へえ…じゃあ魔力をあんま持っていない人は、言葉は通じないのか？」

俺がそう訊ねると、エレナは頷いた。

「ええ、通じないわ。…少なくとも、こう簡単に会話することは難しいでしょうね。勉強すれば別だけれど」

「へえ…魔力って凄いんだな」

俺はそう言っつて、また歩くことに専念する。鬱蒼と木の茂る山道だ、凄く歩きにくい。

エレナとルイスは馬に乗ってるけど、他の人達（俺も含めて）は歩きだ。あ、食料とか積んでる馬もいるけど。

エレナは息の上がつて来てる俺を見て、

「コウキ…大丈夫？馬変わりましたよ？」

と心配そうに言った。本当は今すぐにも変わってほしいけど…、

「大丈夫、俺、体力、は、自信ある、から…」

と、めいっぱい強がって答えた。息が上がってて説得力無い？…息については無視してくれ。

…それにあれだし、俺馬とか乗れないし。

「…そう」

エレナは少し苦笑して言った。何も言わない所がエレナの優しさだな。

そのまま、無言で歩き続ける。何か言え、会話を作れと俺は心の中で叫ぶが、もう一人の俺が体力を使うな、無言でいると言う。はあ…どうしたらいいのさ。

「…あ、そうそう」

しばらくして、エレナが口を開いた。俺は汗を拭いながらエレナを見る。

「この山は世界でも魔物の出る確率の高い山だから、気をつけてね。まあ、私やルイスやコウキがおれば大丈夫だと思うけど…兵士達もちゃんと守らなきゃいけないんだから。」

「そうなの？俺こついう所に来るからみんな　くらい持ってんのかと思ってた」

俺の問いに、エレナは

「　以上の人は、大体魔術師とかになっちゃうから」

と答えた。エレナのその答えに、俺は再度問い返す。

「魔術師？魔術師って職業なの？俺、なんか勝手に魔術師とかそんなカンジになってるのかと…」

「うーん…例えば『パン屋』とかそういう種類の職業ではないのだけど、魔力が　以上ある人は魔法を極めようとするから、自然に『

魔術師』になるのよ。

それに、病とかいرونなこと魔法は必要とされるから、十分魔術師で食べていけるしね」

エレナは丁寧な、俺の問いに答える。

「へえ…いいな、魔術師って。かつこいいし、金稼げるし」

「うーん…まあ、全員魔術師になって嬉しいって思ってるわけじゃないけれどね」

俺の言葉に、エレナが苦笑して付け足す。

「ある程度の実力を持った魔術師は、戦があつたら出なきゃいけないから…。戦に行くような職業に、つきたいなんて人はそんなにいないわ。… 以上は、魔術師になることを義務付けられているんだけどね」

「へえ…」

でも、戦ってやっぱり…かつこいいよな、うん。男の浪漫ってやつ？エレナは目を輝かせる俺を不思議そうな目で見つめてるけど…うん、エレナには分かんないよ、男の浪漫は。

「…エレナ様、こいつにそこまで丁寧に教えてやる価値はありません。どうせエレナ様のお話の半分も理解してないですよ」

…なんだ今のいらいらする声は。…いや、分かるけど。ルイスの声だつて分かるけど…！  
でもさ、

「俺話の内容分かってるし…！」

俺はルイスに噛みつかんばかりの勢いで言う。ルイスはふん、という感じで俺を見て、

「貴様の脳味噌は鳥以下だろうが。理解出来るはずがあるまい」

と言う。はあ…なんでルイスってこんなうざいキャラなのかな…。俺はルイスに舌を突き出し、こう言った。

「ふん、理解出来ないのはルイスの方だろ？ばーか」

「…貴様ア！！そこへ直れ！成敗してくれる！！」

…ちよちよちよ、待って待って！！なんで剣二本なの！俺に対して本気がよ！！

俺は慌ててバリアを貼る。ルイスがバリアに刀を振り下ろしてんだけど…大丈夫かな、刀がかけるよ？

「くう…小癩な！そのバリアを解け！！正々堂々と剣で勝負しろ！」

「誰が解くかよ馬鹿！お前相手に剣ってお前に有利過ぎるだろ！！てかバリア剣で叩いていいのかよ、剣の刃がかけるぞ馬鹿！」

「馬鹿はお前だ！この剣は魔法で鍛えてあるのだぞ、バリア如きでかけまい！」

「そんなの知らねえよ馬鹿！」

「無知な貴様が…」

「ルイス！！」

次の台詞をいかけたルイスの言葉を、誰かが遮った。その臨とした声の持ち主は、もちろんエレナ。

「コウキも、もう黙って。なんで貴方達はこう何度も何度も…」

エレナはこめかみを押さえて、ぶつぶつと言う。

「ルイス、味方に剣で斬りかかるだなんて何事？それに、今回の種を蒔いたのは貴方よ。ちゃんと反省なさい。コウキも、馬鹿だなんて言わないの。これから…」

「魔物が出たぞーっ！！」

エレナの声を遮ったのは、兵士の焦った声だった。俺達は慌ててその声の方へ顔を向ける。

「い、いっぱいいるぞっ！！」

兵士の一人が裏返った声で叫ぶ。確かに、白い大きな狼のような魔物が数十匹いた。

「早速、つてわけね」

エレナが呟いた。

そして俺とルイスを見て言う。

「二人共…やることは、分かってるでしょうね？」

s t o r y 2 2 . . . M a g i c . . . B e n o t t e r r i b l e . . .

初の予約更新です!!...上手く行ったかな...

次の更新は、14日の予定です。次回はとうとう戦闘描写...と言うのでしょうか。上手く書いていませんが、次話もよろしくお願います。

予約更新の日、前話で予告した日と違ってすいませんでした。

「二人共…やることは、分かってるでしょうね？」

エレナが、俺とルイスを見て言った。

「もちろん、魔物を倒せばいいんだろ？」

俺はひゅうつと口笛を吹いて言う。来た来た来た、俺の活躍シーンが。

ルイスは魔物を一瞥し、

「承知しております。…エレナ様、お下がりください」

と言う。エレナは心外というように、

「あら、今回は私も戦う気にいるんだけど？」

と、ルイスを見て言う。ルイスははあつとため息をついた。

「エレナ様、貴方様のお力は誰よりもよく知っています。しかし、本来王女というものは戦うべきではありませんし、こんな魔物数十匹、私一人で十分です。魔物の対処が甘い兵士が少し負傷していますが、彼らもフェルトシアの兵士。全員戦えないわけでもありません。

よって、エレナ様が自ら戦う必要はないかと」

ルイスはこれだけの台詞を一息で嘯まずに言った。滑舌いいな、こ

いつ。

てか、私一人でって…俺の存在、忘れてません？

「はあ…貴方よく、そんなに言うわね。分かった、言い方を変えるわ。私は戦わなきゃいけないんじゃない、戦いたいのに」

エレナはため息をついてルイスに言う。てか、戦いたい王女なんて初めて訊いたぞ。

これからはあれか？戦うヒロインの時代か？

「エレナ様…エレナ様の民を守りたいというお気持ちはとても素晴らしいですが、私はなんのための側近、なんのための護衛ですか」  
「あのね、ルイス。もちろん民を守りたいという気持ちはあるわ。でも、私だって戦ってストレス発散したいのよ。王城じゃあ…息が詰まるの」

エレナは最後を、すこし言いづらそうに付けくわえた。憂い顔、つてこんな顔かな。

ルイスはその言葉を聞いて、はあーっと長く息を吐いた。そして、仕方なさそうに言う。

「では…必ず、お怪我をなさらないと…約束してください」

「ルイス…貴方、私があ程度の魔物に破れるとでも？」

「いえ、決してそのようなことは…万が一です。エレナ様は、魔物相手には余裕でも、石から飛び降りて足首を捻挫、なんてことがあるかと…」

「な…ッ、そんなことないわよ！ほら、こんなこと言っているより、さっさと魔物を倒した方がいいわ」

エレナは顔を赤くして怒ると、指で魔物たちを指差した。…うん、

俺最初っから思ってたんだ。

ルイスとエレナ、二人で口喧嘩してるより魔物倒した方が時間の有効利用じゃないか？って。

まあ、俺が言う隙なかったけど。だから今更エレナが言ってるわけだけど。

そんなエレナは俺を見て、

「ほらコウキ、ぼんやりしてないで、貴方も魔物を倒さなきゃ。働かざる者食うべからず、って、知ってるでしょ？」

と言った。へえ…日本のことわざ、ここにもあるんだ。

俺はそんなことを考えながら、杖を持ち直す。俺の下手な魔法陣を書いている時間はないから、攻撃系の魔法で…って、俺攻撃魔法習ってねえじゃん…。

攻撃魔法は上級魔法らしくて、俺はその前に召喚獣をやっちゃったから結局習っていない。

「…まあ、なんとかなるだろ」

俺はそう呟いて、魔物に向き直った。白い狼の様な物はぐると唸りながら、俺に近づいてくる。

そして、一気に間合いを詰めると俺に飛びかかって来た。

「うわっ！！」

俺はぎりぎり魔物を避ける。まさに、紙一重、…といった感じだ。

慌てて杖を魔物に向け、心の中で、『なんか攻撃しろ！』と叫んだ。

…が、その願いも虚しく、杖からは僅かな火花が散っただけだった。

「うわ、まじかよ…珠洲ちゃんに攻撃魔法聞いとくんだった…」

俺は半ばパニックになりながら呟く。

「お前！！その戦いざまはなんだ！まだ一頭も倒してないのか！！」  
ルイスが俺を見て怒鳴った。怒鳴りながらも魔物の首を一閃し、返り血を浴びている。

「い、今から倒すところだよ！！」

俺はそう叫ぶと、杖を握りしめた。ふと、ある言葉が脳裏を霞める。  
、、出来る人なら、魔法陣無しでも召喚獣を呼び出せるようになる

…、

「…一か八か…」

俺はそう呟き、とん！と勢いよく杖で地面を叩いた。

やり方が分かってたわけじゃない。なんとなく、本当に一か八かでやった。

なのに…地面には、青く光る魔法陣が現れ、その中からエルが勢いよく飛び出した。

「主様、御用件ですか？」

エルはいつも通りの声で俺に訊ね、辺りを見回して眉をひそめた。

「これは…何の騒ぎです？」

「エル、白い狼みたいなのを倒してくれないか？もちろん、人に

は怪我させずに」

俺はエルに慌てて言った。俺の言葉にエルは短く、

「御意」

と答えた。そして勢いよく飛び立つと、空から魔物に襲いかかる。ルイスとエレナはしばらく、戦いを忘れぼかんとエルを見ていた。エルは素早く舞い降りて、魔物をあざ笑うかのように食らっていく。襲われて喚いていた兵士でさえも、しばらく無言でエルを見ていた。エルは数分で全ての魔物を食らうと、口の周りについた血を舐めながら、俺の近くに再び舞い降りた。

「主様…これで、よろしいでしょうか？」

「…あ、ああ、うん、凄いよ」

俺は一瞬言葉に詰まり、慌てて褒めた。

「まさか食べるとは思わなかった」

「あつ、すいません、不愉快な所をお見せしてしまい…」

俺の表情に何を感じ取ったのか、急に謝るエル。俺は慌てて手を振って、

「いや、ううん、いいよ、俺が頼んだんだし」

と言った。エルはもう一度『すいませんでした…』と言って、還って行った。

「…召喚獣に頼るしか魔物を倒す術すべが無いのは微妙だが…」

ルイスがふいに言った。

「貴様にあれほどの召喚獣を出すだけの魔力があるということとは認めてやるう」

その言葉を聞いて、俺はぽつりと呟く。

「…認めるんなら、名前で呼べよ」

ルイスは俺を見て、ふっと笑った。

「まだ名前で呼ぶほどは認めていない」

まず最初に、戦闘描写（？）(ド下手ですいません。

本当に本当に下手ですね…読み苦しい文をすいませんでした。

戦闘描写のアドバイスとか、して下さると嬉しいです。

そして、次の更新は…2日後以降です。すいません、ちゃんとした日は分からないです。

では、ここまでお読み頂きありがとうございました。

あの魔物達を退治してからは、順調だった。  
雑魚レベルの魔物は出たが、それも一匹ずつとかで、さっきのよう  
な大軍は来なかった。

「日が暮れて来たわね」

エレナが暮れかけてきた日を見て呟いた。

「そろそろ、野営地を決めますか？」

ルイスがエレナを見て訊ねる。エレナは頷いた。

「ええ、真っ暗にならないうちに決めましょう。夜になると魔物も  
出やすいし」

「…なあ、何泊くらいで頂上まで着く？」

エレナの言葉を聞いて、俺は訊ねた。1 2 3 4 5 m っていうけど、  
1日で登れるかなって思ってたんだけど…。  
そういえば、エベレストより高いし…エベレストは一日じゃ登れな  
いし、数泊するのは当たり前か。

「そだね…7泊くらいかしら」

エレナは顎に手を当てて考えながら言った。…今、俺が『仕草可愛  
い』って心の中で叫ぶと思った？

残念、俺この世界に来てから可愛い女の子の可愛い仕草をいっぱい  
見たから慣れちゃったんだ。

…いや、可愛いと思ったけど。何回見ても可愛いものは可愛いけど。それに…、

「貴様！何をぼんやりしている、さっさと天幕を張るのを手伝え！！」

俺の妄想…想像を邪魔したのは、ルイスのイラつく声。

俺が声のする方にしぶしぶ顔を向けると、黄色い天幕を張ろうとしているルイスがいた。

「…天幕ってさ、魔法で張れないの？」

俺はぼそつと呟いた。だって、俺力仕事なんて出来ねえよ…。インドアだったんだもん。

「馬鹿者、テントは張ること如きに魔法など必要ない！己の力で天幕を張れ！」

「…魔法も、己の力、だと思っただけど…っつか、あれか、ルイスって魔法が使えなか…ッ、ごぶあ！？」

俺が全てを言い終わるより早く、ルイスの二本の剣が俺の首のあった場所を斬り裂いた。

慌てて避けた俺は、尻もちをついてルイスを見上げる。

二本の剣はクロスしていて、あんなのを食らったら俺の首は文字通り飛んでいただろう。

「ば…馬鹿じゃねえの！今の攻撃今までで一番こええよ！！」

俺は憤慨してルイスに怒鳴った。もちろん、次に攻撃してきてもいいようにバリアを張ってから。

「そんな攻撃をされる種を蒔いた貴様が悪いんだろう」

ルイスは悪びれもせず、俺を睨んで言う。

「だって…ッ、まあ、そう…だけどッ！」

俺は反論出来ないことに唇を噛み締めた。コイツに負けるとか…最悪。

「ほら、自ら認めるほどだろう？こんな攻撃をされても仕方ない」

ルイスは勝ち誇った顔で言う。…うっぜえ、超絶うっぜえ。

「ほら、分かったらさっさと天幕を張るんだな」

「…ちっ、分かったよ」

俺はぶつぶつ言いながら、天幕を張り始める。なんとなく、魔法は使えない。使ったら…負けた気がする。…もう負けてるけど。ぶつぶつ言いながら天幕を張る俺と、勝ち誇った顔のルイス。ふと俺がエレナに目を向けると、彼女はくすくすと笑っていた。

\*\*\*\*\*

「では、貴様は夜の12時から1時までの護衛だ、いいな？」

ルイスは手を腰に当て仁王立ちして、俺に言った。

今は、エレナのテント…というより、天幕の護衛の順番を決めてい

る所だ。ルイスが10時から11時まで。兵士二人が11時から12時まで、そして俺が12時から1時までだ。その後も兵士が二人ずつ、一時間交代で護衛するらしい。

俺とルイスが一人ずつなのは、実力を認められて、ということらしい。

「やっぱりルイス、俺のこと認めてんだな」

俺が勝ち誇ったような笑みを浮かべてルイスにそう言うと、ルイスは目をむいて、

「貴様のことは認めているが、少しだぞ！　少しだけだ！　そんなに偉そうにされる義理はない！」

と俺に怒鳴った。…はあ、なんでこう、素直じゃないかな。

「やっぱりルイスもツンデレか…」

俺は思わずため息をつく。珠洲ちゃんといいルイスといい、俺の周りにはなんでこう、ツンデレが多いんだろう。

ルイスの「ツンデレとはなんだ」視線は、とりあえず無視する。

…無視し始めて、数分、やっとルイスが折れた。

「はあ…ここで無用な言い争いをしていても仕方ない。貴様はさつさと天幕で寝ている。12時になったら起こしに行く」

お、成長したな、と思いつつ、俺はその言葉に従って天幕に入った。

正方形の天幕の中は、けっこう広い。一辺5mくらいか。端に簡易ベッドが数台ならんでいる。

「…はあ、ルイスもツンデレか」

俺はため息をつきながら、簡易ベッドに横になった。

「ふあ…眠い…」

俺はごろんと寝返りを打つと、そのまま眠気に身を任せた。

\*\*\*\*\*

「…い、…きる！ おい、起きろ！ おい！」

ぐらぐらと揺すられて、俺は重い瞼を開けた。翳む視界に映るのは、きらきら光る金髪に、青い眼。

「る、いす…？」

俺は目を擦りながら起き上った。頭がぼーっとしていて、なんで起こされたのか分からない。

俺の表情からそんな気持ちを読み取ったのか、ルイスは、

「護衛の交代時間だ。まったく、貴様はいつまで寝こけているつもりだ」

と言った。護衛の交代…そうだ、うん、そうだった。

「ごめんごめん、寝ちゃって…」

俺は頭を掻きながらベッドから飛び降りる。

「はあ…エレナ様の天幕の側に、兵士が二人いる。その二人に交代を告げて、さっさと護衛につけ」

「ん、了解」

俺は眠い頭をなんとか起こそうと努力しながら、エレナの天幕に向かった。

俺がさっきいた天幕より一回り大きい天幕の入り口に、銀の鎧を着た兵士が二人立っている。

「おい、交代だつて」

俺がそう言いながら近づくと、兵士は頬を緩ませた。

「助かった。眠くて仕方なかったんだ、坊主、後を頼むぞ」

口髭を生やした兵士が、俺の頭をぼんぼん叩く。…坊主？俺、これでも15歳ですよ？

少し疑問を感じつつ、俺は兵士と交代した。

でも、それにしても…、

「見張りつて、暇だな」

俺は空を見上げて、呟いた。夜空には、数え切れないほどの星でも、俺は天体観測には興味ないから、空を見ても楽しくない。なんか敵とか魔物とか来たら、護衛も意味あるんだろうけど。

「それにしても楽しくない…」

「きゃあああ!!」

俺の独り言を邪魔したのは、劈く様な悲鳴。…え？今のって…  
エレナの悲鳴？

俺は慌てて、天幕の中に入った。が、予想していたような、『天幕の中には誰もいなかった』展開では…なかった。ちゃんと、天幕の中にいた。でも、天幕は破れていて、エレナが呆然とその穴を見ていた。

「エレナ!! どうした!？」

俺は慌てて訊ねる。

「魔物が…ロランの剣が奪われて…どうしよう…取り返さなきゃ…ッ」

エレナは震える声で、そう言う。

「剣？なんで？ていうかロランって？」

俺の問いに返答を返すことなく、エレナは枕元に置いてあった杖でだん！と勢いよく床を叩いた。

青く煌々と光る魔法陣から、金色こんじきのグリフォンが飛び出した。

「コウキごめん、ルイスに伝えておいて!!」

エレナはそう叫ぶと、グリフォンに飛び乗った。

「オズ、飛んで」

エレナの声に、グリフォンは勢いよく飛び立つ。  
金色のグリフォンの姿が夜空に消えると同時に、ルイスが勢いよく天幕に入って来た。

「エレナ様ツ！！ …エレナ様は！？」

ルイスは天幕の中を見回して、俺に詰め寄った。

「な、なんか、魔物っぽいのに罗兰の剣？ が奪われたとかで …オズとかいうグリフォンで飛び立って…」

俺だって状況を理解してなかったけど、とりあえず説明する。  
ルイスは、“罗兰の剣”という単語に反応した。

「なるほど…エレナ様…」

そう呟いて、ルイスは空を見上げた。今の説明で、ルイスは何があつたのか分かつたらしい。

「え、ちょっと待って、ルイス、どういう事？」

きよとんとしている俺を見て、ルイスは視線を泳がせた。説明すべきかどうか、迷っているらしい。

しばらくして、小さな声で、

「罗兰とは…エレナ様の、忘れようにも忘れられない方だ」

と、語り始めた。

合宿から帰還しましたーっ!!

そして返ってPCを見てみると…160pt!?200000アクセス  
ス!?

本当にありがとうございます!!これからもよろしくお願いします!

そして…軽く次回予告を。

次は、エレナの過去です。エレナ目線で進みます。まだ書いていないので、突如変更があったら申し訳ありません。

では、次話もよろしくお願いします。

「お父様、何の御用ですか？」

エレナは不安そうな瞳で父王であるアルノルト・フェルトシアを見つめた。

13歳になったばかりのエレナには、恋人がいた。しかし、その恋人は平民であるため、アルノルトに何度も『逢うな』と言われていたのだ。今日も、そんなことを言われるだろうと思っていた。そして…予想は、的中しなかった。…いや、したというべきかなぜなら、アルノルトの口にした言葉は…、

「今日、お前をお前の許婚に合わせようと思ってな」  
 だったからだ。

「え……い、許婚？ お父様、それはどういうことでしょうか？」

エレナは動揺を隠そうとしながら、訊ねた。

「そのままだ。お前には許嫁がいる。生まれた時から決まっていた者だ。……お前も、分かっているだろう？ お前が現を抜かしているという平民の想い人などと、添い遂げることは出来ないということ」

「そ、んな……私は、許婚などに会いたくありません！ 私は好きな方と添い遂げるのです！ 名も知らぬような許婚とは、決して添い遂げません！」

エレナは憤慨してアルノルトに訴えた。しかし、アルノルトはエレナを見て、言う。

「お前がなんと言っても、無駄なことだ。許婚の相手のフレンドーズ家は、この王国の3本指に入る名家。王家としても、強い繋がりを持っていたい」

「そんなの……ッ！ 私は……私は、国の為だけにある道具なのですか？ 国の為に……私は、自分の感情を捨てなければならぬのですか？」

エレナは瞳に涙を溜めて言った。そのアルノルトは迷いもせず、

「そうだ。それが王女の定めだ」

と言った。

\*\*\*\*\*

エレナは、マントのフードを深くかぶって、王都を歩いていた。衣装屋の近くに探し人を見つけ、駆け足になる。

「レオンッ！！」

エレナの声に、黒髪の少年……レオンは振り返った。エレナと気付くと、にっこり笑って手を振る。

「ごめん……ちょっとごたごたがあつて……待った？」

「ううん、大丈夫。それより、ごたごたって平気？」

レオンは心配そうにエレナに訊ねた。エレナは軽く手をひらひらと振って、

「大丈夫大丈夫、レオンは何も心配いらないわ」

と答える。許婚のことを、レオンに言う気はなかった。

「そう？　ならいいんだけど……」

「それより！　今日は、何する？」

エレナは話題を変えようと、強い口調で言った。レオンもそんな口調からエレナの気持ちを読み取ったようだ。だからすぐに笑顔を見せて、

「うん、今日は海を見せたくて」

と言った。

「海？」

エレナはきよとんとして聞き返す。

「そう、海。エレナは王都から出たことがないから、見たことないだろう？　遠そうに思えても、車で2時間くらいだし、行ってみたいなと思ってさ」

「海かあ……素敵！　是非行ってみたいわ」

「好奇心旺盛なエレナなら、そう言うと思った」

エレナの輝く様な笑顔に、レオンも笑って言った。

\*\*\*\*\*

「わぁ……これが、海……。綺麗ね、果てしなく続いているみたい」

エレナは海を見て、感嘆の声を上げた。目の前には、どこまでも続く、澄んだように青い海。所々でイルカが跳ねている。

「な、綺麗だろう？ ……あつ、ほら、あの赤い船を見て。あれが、僕の父さんの船なんだ」

レオンはそう言って、近くに見える赤い船を指差した。白い煙を吹きながら、こちら側に向かって進んでいる。

「そういえば、レオンのお父様は船乗りなんだっけ……。いいなあ」

エレナは船を見つめて呟いた。レオンはきよとんとしてエレナを見る。

「そうかなあ？ ただの船乗りだよ？ 異国に貿易に行くわけでもないし……。魚を採るだけで、ぎりぎりの生活だし。魔法だって、全然才能がないんだよ？」

そしてレオンは、『僕だって、魔法が得意じゃないし。遺伝だよ』と、苦笑気味に続けた。

エレナはそんなレオンを見ていたが、口を尖らせて、

「もう、レオンは分かかってないわね……。お父様に魔力がどんなにあるうと、お金がどんなにあるうと、私はレオンのお父様の方が、ずっといいと思うけどなあ」

と言った。レオンはそんなエレナを見て、目を伏せた。エレナはそんなレオンを見て、首を傾げる。

「……どうしたの？ 浮かない顔をしているけど……」

エレナの問いに、レオンは言いづらそうに唇を噛んだ。……が、決意したように口を開く。

「あの、さ……噂で、聞いたんだけど……エレナが……2年後の15歳の時に、結婚するって。」

それで……近いうちに、許婚との婚約発表があるって。それって……本当のこと？」

レオンの問いに、エレナは目を泳がせた。否定も肯定もしなかったが、レオンはそれが肯定の意味だと分かった。

「そっ……か。婚約かぁ……エレナも、大人になったなあ」

レオンは無理して笑いながら、砂浜に寝転んだ。エレナは泣きそくな表情で、

「でも、私、結婚なんかしたくない！ 許婚なんか、嫌。私は、レオンが……ッー！」

と嘆く。レオンはふうーと息を吐いて、起き上った。そして、エ

レナの肩を抱く。

「エレナ……でも、君は……こんなことは言いたくないけど、君はこの国の王女なんだ。だから……平民の僕と結ばれることなんか、絶対に出来ない。そりゃあ、僕だってエレナが好きだけど、でも……」

レオンの言葉に、エレナはぱつと顔を上げた。

「レオンも、お父様と同じこと言うのね！ 王女だから！ 王女だから愛している人とは結ばれない！ 王女だから好きなように生きれない！ 全てが王女だから駄目なのよ！ ……いえ、そうじゃないわね。レオンにとって、私はその程度の存在なんだわ。よく分かった。貴方もお父様と同じ考えだなんて、幻滅だわ、さようなら！」

エレナはレオンを睨んでこう叫ぶと、背を翻し箒の元へ急いだ。

「ちょ、待ってよ！ エレナ！」

レオンはそう叫んで追いかけるが、エレナはさっさと箒に跨ると、勢いよく飛び立つ。

レオンが箒の元へ辿り着いた頃には、エレナの姿は空の彼方へ消えていた。

「僕が……エレナのことをどうでもいいなんて……思ってるはず、ないじゃないか……」

レオンはそう呟いて、一人で静かに涙を流した。

\*\*\*\*\*

「エレナ様……もう、お時間ですが」  
「嫌よ、絶対に嫌。私は絶対に行かないんだから」

女中の声に耳を貸さず、エレナはベッドに突っ伏して鳴いていた。

「しかしエレナ様……国王陛下もお呼びですし……これ以上お待ちせすると逆鱗に触れてしまいます……」

「お父様なんて、怒ればいいのよ！ 私は、会いたくないって言うてるの！ 嫌よ、絶対に嫌、帰って、帰ってよ！！」

エレナはそう叫んで、近くにあったペンを女中に投げつける。魔力も暴走し、部屋の中には強風が吹き始めた。女中は顔を引き攣らせて、エレナの部屋を慌てて出た。そして、国王の元へ走る。

「へ、陛下……」

女中の震える声に、アルノルトは眉をひそめた。

「む、何事だ。エレナに仕度をさせ連れて来るようにと、命令したはずだが」

「え、エレナ様は御乱心です……魔力も暴走し……私では、止めようがございません……」

女中の言葉に、アルノルトはこめかみを押さえた。

「まったく……手を焼かせる娘だ。少し行ってくる」

アルノルトはそう言って、玉座から立ち上がり、エレナの部屋へ歩いた。

部屋のドアの前になると、閉まっけていても隙間から激しい風を感じられる。

「エレナ、入るぞ」

アルノルトはそう言うと、返事も待たずにドアを開けた。ドアを開けた途端、強風が吹き荒れる。

「お、父様……」

エレナは涙に濡れた瞳で、アルノルトを見る。

「魔力を暴走させてはいけぬと、日々言っておるうが」

アルノルトは部屋を見回して言う。部屋の中は、紙やペンが散らばり、窓にはひびが割れていた。

エレナは答えず、またベッドに伏せる。

「……エレナ。お前は一国の王女なのだ。いい加減、覚悟を決めよ。今まで、お前と平民の男の交際を黙っていてやったのだぞ」

「……お、父様は……酷い、方です」

エレナはベッドから起き上がり、アルノルトを見て、消えそうな声で言う。

「私が、こんなにもレオンを好いていると知っているのに……許婚だなんて。生まれた時から、決まっていただなんて。王女になん

て、生まれたくありませんでした……。なぜ、お父様とお母様は、私を生んだのですか。なぜ…子は、親を、家庭を、選べないのでしょうか」

エレナの言葉に、アルノルトは辛そうに唇を噛んだ。そして、エレナの目を見て言葉を紡ぐ。

「お前の納得するような理由は、ないだろう。それに、どんなに納得するような理由があっても、お前がこの国の王女であるという事実は変わらない。ならば……その“王女”という役目を、まっとうせよ。

定められた人生を歩み、その人生をまっとうすれば……次に生を受けた時には、お前の好きなように歩める人生が、待っているかもしれないぞ」

エレナは父の瞳を、じっと見つめた。そして、観念したように、

「……そう、ですね」

と呟く。

「私が……私だけが、“第二王女”なのですから……。でも、本当に、お父様はそうお思いですか？

今のこの人生を、定められた通りに生きれば、次は、私の望む人生が待っていると」

エレナは父の顔を貫かんばかりの瞳でじっと見て、訊ねた。父は、ゆっくりと頷く。

頷いたのを見て、エレナははぁーっと息を吐き出した。

「分かりました……。許婚の方に、お会いします。お待ちせして、申し訳ありませんでした」

\*\*\*\*\*

エレナが正装をして大広間に行くと、長いテーブルの向こう側に一人の男が座っていた。あの男が、許婚だろうか。漆黒の髪に、薄い紫の瞳。座っていても、長身だろうと予測出来る。

「お待ちせして、申し訳ありませんでした……。エレナ・フェルトシアと申します」

エレナはそう言ってお辞儀すると、椅子に座った。男は立ちあがって、

「お初にお目にかかります、エレナ陛下。私はフレンワーズ家の二男で、ロラン・フレンワーズです。以後、お見知り置きを」

と言って、頭を下げた。そして、顔を上げて、

「ところでエレナ陛下。頬に涙の痕があるようだが……。そんなに、私にお会いすることが嫌でしたか？」

と言った。エレナはロランの口に浮かんでいる笑みを見て、真っ赤になった。

「そ、そんなことは……。ッ！！ 会って早々、無礼です！！」

「おっと、申し訳ありませんでした」

ロランはそう言って、また軽く頭を下げる。  
エレナは、一発でこの許婚が嫌いになったと自覚した。

今回は、エレナの過去の話です。一話に収まるはずだったんですが  
…二話かかつちやいそうです…(汗)。

急に、アングルが変わってびっくりしたかもしれませんが、前回の  
最後にある通り、ルイスが話しているということ。…ご都合主義、  
ですかね(汗)。

では、次話で過去は終わるはず…です。

…なんか、ロランが気持ち悪いです、はい。

そして、ロランの設定を大幅に変えました。 すいません。

自己紹介の後、会食は穏やかに進んだ。

ロランも、紳士的な男で結婚相手としては最適なのだろう。でも、エレナは最初のロランの印象が消えなかった。

「…分かっているのよ。もともと先入観で許婚なんてって思ったからだって」

エレナは思わず、口に出して呟いた。

「エレナ陛下？」

その呟きが聞こえたのか、ロランがエレナに視線を向ける。…もともと、ほとんどエレナしか見ていなかったのだが。

突然話しかけられたエレナは、反射的に声のした方へ顔を向けるが、話しかけた相手がロランだと知ると、少し嫌そうな表情を隠すことが出来なかった。

「呟いたつもりでしたので…私には、丸聞こえなのです。今の表情といい、呟いた内容といい、私はなぜそこまで貴女に嫌われているのですか？」

ロランの言葉に、エレナは目を泳がせた。本音を本人の前で言うてしまえば、すっきりするだろう。

でも、そんなことが出来るような状況ではないし、これから一生一緒に暮らす相手と、ぎくしゃくするのも名案ではない。

そう考え、

「いえ…別に、嫌ってなどおりませんよ？ ロラン様だって、初対面の人をいきなり好きになれと言われても、無理な話でしょう？」

と、エレナは苦笑交じりで言った。ところがロランは心外という顔で、

「私は、もうエレナ陛下のことをお慕いしておりますが」

と答えた。この台詞に、エレナが固まったのは言うまでもない。数十秒間固まってから、やっとのことでエレナは口を開く。

「それは…とても、人を好きになりやすいのですね。すぐさま他の方を好きになってしまうなんて、ロラン様と恋仲になった方は大変ですね」

最後に皮肉を混ぜてしまったのは、無意識だった。ロランはエレナを見て目を丸くし、

「まさか。私ほど人に惚れにくい男は他にいませんよ」

と、笑って答えた。

「たった今、初対面の私に惚れたといったではありませんか」

エレナは少し口を尖らせて言う。

ロランは少し目を泳がせてから、

「実は、エレナ陛下との対面はこれが初ではないんです」

と言う。予想外の言葉に、エレナは目を丸くした。そんな様子の

エレナを見てくすりと笑い、ロランは続ける。

「ええ、私は何度も、国の行事でエレナ陛下のお顔を拝見していましたが。喋ったのも、今宵が初めてではないんですよ」

「国の行事でのことは納得できますけど…喋ったことが？ 失礼ながら…私には、その記憶は…」

エレナはなんとか思い出そうとしながら言う。こんな嫌な男と喋った記憶なら、どこかにあるはずだ。

忘れることは、ない…と、思う。記憶力は良い方だという自信もあった。

「…あ」

やっと思い出した記憶に、エレナは思わず声を上げた。ありえない。ありえないが、確かにあの少年は、“ロラン・フレンワーズ”と名乗っていた気がする。

しかし、数年でこんなにも性格が豹変するだろうか。あの頃は、もっと優しく、笑顔の弾けるような少年だった。そう思いながらも、エレナは恐る恐る訊ねる。

「もしやロラン様は…7年前、城の庭でお会いしましたか？」

エレナのその質問に、ロランはにこっと笑って頷いた。

「ええ、その通りです。あの時、エレナ陛下は6歳、私は8歳でした。

エレナ様にはお知らせされていなかったようですが、私はもう、貴女が私の許婚だと知っていたんですよ」

ロランの言葉に、エレナは顔が赤くなるのを感じた。  
では今回、動揺して、慌てていたのは自分だけだったのか、と。

「ではロラン様は…この婚約について、何も反論はないのですか？  
親に理不尽に決められた結婚に。ローラン様は私を慕っていると言いましたが…どうせ結婚するから慕わなければと、無理をしているのではないのですか？」

エレナの言葉に、ロランは頭を掻いた。そして苦笑交じりに口を開く。

「私は本当に、心から貴女様をお慕いしているのです。自分で言うのも難ですが…私は、自分の本当に好いている者と一緒になれないのなら、駆け落ちをするような性格です。」

私は初めてエレナ陛下を見た時から、貴女様をお慕いしていました」

ロランの台詞に、好きでもないのに顔が真っ赤になるのを感じた。

「あ、貴方は…なぜそんな恥ずかしいことを平気で言えるのですか」

ロランは、エレナの声が震えているのがおかしいのか笑って、

「お相手が、貴女だからでは？」

と答えた。エレナはわけが分からず、首を傾げる。

「エレナ陛下になら、どんな私も見せられる気がするんですよ」

ロランはそう笑って言う。

「な…だから、なぜロラン様はそんな恥ずかしいことを…ッ」

エレナは自分が言ったわけでもないのに、真っ赤になり、慌てて水を飲んだ。

「そんなに慌てて飲むと、咽てしまいますよ？」

ロランにそう言われると同時に、エレナは盛大に水を吹き出す。ごぼごぼと咳き込むエレナに、ロランはハンカチを差し出した。

「け、っごう…です…ッ、けほ」

エレナはそう断って、自分のハンカチで口元を吹いた。

「…けほ…はあ…お恥ずかしい所を、お見せしました…」

落ち付くと、エレナは座りなおしてそう言った。女中が持ってきた新しい水を、今度は慎重に飲む。

そんなエレナの様子を見て、ロランはくすくすと笑いだした。

「ッ、ろ、ロラン様！！ 無礼ですよ！」

エレナは真っ赤になって、憤慨した。ロランは口を押さえながら、

「いや…申し訳ありません…可愛らしい方だなと思ひまして…」

そう言いながらも、くくつと笑っている。

エレナははあつとため息をついた。もう注意しても無駄だと、や

っと気付いたのだ。

\*\*\*\*\*

「どうだった？ フレンワーズ家の御子息は」

不機嫌そうな顔で帰って来たエレナに、母であるシルヴィアが訊ねた。

「…なぜ、お母様にそんなことを言わなければいけないの」

エレナは母から目を逸らしながら呟いた。

「あら、貴女が会食の席で水を吹き出したと聞いたのだけど…あれは、嘘かしら？」

シルヴィアはころころと笑いながら言う。その言葉に、エレナは顔を赤くした。

「そ、んなことは…ッ！ …お母様には、関係ないでしょう」

エレナの言葉に、シルヴィアはそうねと頷いた。しかし最後に、

「私は、ロラン・フレンワーズ様も良い方だと思っわよ？」

と、悪戯っぽい笑みで付け加えた。

\*\*\*\*\*

「ロラン様も良い方だっというのは、分かってるわよ」

エレナはベッドの中で、そう呟いた。

「私に、本気みたいだったし。でも…」

頭の中に、レオンを思い浮かべる。喧嘩してしまったが、今になって後悔の念に苛まれていた。

今になって、レオンがエレナのことを思ってああ言ったんだと分かる。

「…明日。明日、レオンに会おう。それで…」

ロランが、会食の途中で言っていた。

“私は、自分の本当に好いている者と一緒になれないのなら、駆け落ちをするような性格です”

エレナは、半ば本気で駆け落ちを考えていた。ロランも悪い人じゃないと分かってても、どうしてもレオンが頭から離れなかったからだ。

絶対に、明日レオンに会って、決意を話す。そう誓って、エレナは眠りについた。

\*\*\*\*\*

翌朝エレナは、慌ててレオンの元へ向かった。  
朝早く訪れたエレナを見て驚いていたレオンだが、駆け落ちの事を話すとさらに驚いた。

「エレナ…それ、本気？」

「本気よ。それとも、レオンは私とそこまでしていっしょにいたいとは思わない？」

目を丸くして訊ねるレオンに、エレナは頷いて言う。

「ううん、僕はエレナが好きだ。ずっと…ずっと、おばあちゃんとおじいちゃんみたいにずっと一緒にいたいと思ってる。でも…君はそれでいいの？ だって…エレナはフェルトシアの王女様で、許婚だって…」

「許婚とはもう会ったわ。どんなに話しても、私がレオンのことが好きだったことしか分からない。

良い方だったけど…でも、愛とは違ったの。それに、王女と言っても第二王女よ。王位継承者でもないし、いなくなっただってみんな困らないわ」

レオンの言葉にかぶせて、エレナは一気に言う。それでもレオンはもごもご言っていたが、とうとう、

「…分かった。エレナがそんなに言うなら…駆け落ちするよ。僕だって、エレナといっしょにいられるほど、嬉しいことはないんだから」

と言った。レオンの返事に、エレナはぱっと笑った。

「じゃあ、私は今日の夜の12時に、王都の城門の外で待つてるわ。大丈夫、城門の兵士は眠らせておくから。絶対、遅れないですよ？ そしたら…どこか、他の国へ行きましょう。」

近くのホロンやテルムーンとかじゃなくて、海を渡った先の翔麗<sup>ショウレ</sup>国<sup>イコク</sup>とか」

その言葉にレオンが頷いたのを確認し、エレナは、

「じゃあ、とりあえず今は帰るね。絶対、絶対来てよ？」

と念を押し、城へ帰って行った。

「…嵐のように来て、嵐のように去ってったな」

一人残されたレオンは、そうぽつりと呟いた。

… 本当にすいません。なんで一話で収まらなかったんだろう…。

次こそは…次こそは！！終わります！！（たぶん）

そして、昨日のアクセス2400！ありがとうございます！！

… 密かに、累計pt 2000超えを狙ってるような私です（無謀な夢）

では、次の更新はたぶん21日か22日です。では、今回も読んでくださってありがとうございます。

s t o r y 2 7 . . . T h e p a s t o f E l e n a - D e a t h o f

スタヂオ。

夜中、エレナはこっそりと城を抜け出した。約束の時間まで、あと30分。

「…お父様、お母様、申し訳ありません…ロラン様も」

エレナは城を見上げて、そう呟いた。透明術を使っているから、兵士にはエレナの姿は見えない。

「…そう思うなら、城に帰ってくれませんか？」

突然後ろから声がして、エレナははつと振り返った。声の主は、ロラン。

突然現れたロランに、エレナは動揺した。姿が見えるはずは無い。だから、とりあえず沈黙をしていた。たぶん、ロランがああ言ったのは、たまたま呟いたのを聞かれてしまったんだろう、と想着。

「…黙ってても、無駄ですよ。私には、エレナ陛下の姿が見えています。」

証拠に、今、紺のマントを羽織っているでしょう？フードをかぶっていても、金髪が見えますよ」

ロランはそう言って、エレナの方へ歩いてくる。エレナは思わず、一歩下がった。

今の会話を聞かれてないか気になって兵士のほうを見たが、全然気付いていないらしい。

それにひとまず安心し、再びロランへ視線を向ける。

「……なぜ、私の姿が見えるのですか？ 透明術を使っているのに」

「それは…秘密です。フレンワーズ家に、代々伝わるものですか」

ロランのその答えに、エレナは口を尖らせた。

「……まあいいです。ロラン様、私は今から行かなければならない所があるのです。お引き取り願えませんか？」

エレナは出来るだけ口調が尖がらないように気をつけながら、ロランに言う。

「残念ながら、それは出来ません。エレナ陛下に去られてしまつたら、困りますし」

ロランは柔らかく微笑んだ。エレナは少し冷や汗を流す。

約束の時間までは、もう20分もないだろう。早くロランを振り切らないと、レオンを待たせてしまう。エレナはどうにか、この場を突破出来る策を考えていた。

そして、やっと一つ、策を思いつく。おそらく、相手がロランだからこそ通じる策だ。

少し躊躇うが、迷っている暇は無い。エレナはぱつとロランに顔を向ける。

「ロラン様、では、私は…」

何かを言いかけるふりをして、ロランに近づく。そして…エレナより高いロランの頬に、そっと口づけた。途端に、動きが止まるロラン。ぴったり十秒は固まった後、真っ赤になる。

「え…え、え…れ、ね…れな…へ、へい…か…ッ」

ロランはエレナを見つめ、口をぱくぱくさせる。エレナは悪戯っぽく微笑んだ。

「これで、私との思い出は十分でしょうか？ それでは、失礼しますね」

エレナはそう早口で言うと、たたつと走り出す。途中で魔法を使ったのか、ふつと姿が見えなくなった。数分後、やっとロランは動き出す。口づけされた紅い頬に手を当て、まだ視線を泳がせながら、

「エレナ陛下…：…申し訳ありません」

と、呟いた。そして、エレナの消えた方へと、走り出した。

\*\*\*\*\*

ロランがまだ固まっていた頃、エレナは高速移動の魔法を使っていた。…ただ、高速移動といっても、いつものは知る早さの3倍ほどになるだけ。時間が危ないことに変わりはない。

…が、なんとか、時間の12時には間に合った。素早く見張りの兵士を魔法で眠らせて、エレナは王都の外に出る。少し辺りを見回すと、木の影に少年が立っていた。

「レオン」

静かな声で呼びかけると、レオンはくるつと振り返る。声の主がエレナだと気付いて、にこっと笑った。

「ごめん…待った？」

エレナは慌ててレオンの元へ駆け寄り、心配そうに訊ねる。

「ううん、全然。僕も今来た所だから」

レオンのふつと微笑んだ顔に、エレナも自然に笑顔になった。レオンの手に、自分の指を絡める。

「じゃあ、行きましょ。どこか、遠い国に」

そうレオンの顔を見て言って、エレナは急に恥ずかしくなったように顔を伏せた。

そんなエレナを、愛しそうにレオンは眺める。何か言おうと、レオンが口を開いたその時、ひゅつと空を裂く音がした。感じ慣れた…でも、嫌な気配に、エレナはレオンを突き飛ばそうとした。しかし、一瞬遅く、レオンの肩から血が飛び散った。

「レオンッ！！」

エレナの目の前で、レオンがゆっくり倒れる。致命傷ではないが、レオンの血は、エレナを混乱させるには十分だった。動揺して、いつもならすぐに反撃できるはずなのに、エレナは動かない…いや、動けない。

その間に、近くの木から弓を持った襲撃者が降りてきた。どうやら、そいつがレオンを射つたらしい。

「…おい、動揺してる、チャンスだぞ！」

襲撃者が、他の仲間にもそう言うのが聞こえた。同時に、がさがさと他の者も出てくる。

しかし、すっかり動揺しているエレナには、反撃する余裕がない。レオンを抱え、“レオン”と呼び続けている。致命傷ではないということは、この状況では確認できないらしい。襲撃者は、その間にエレナの後ろから剣で斬りかかる。…が、エレナが、血を流すことは無かった。

「……エレナ陛下、少し、警戒が甘いんじゃないありませんか？」

まるで小説か漫画のようなタイミングで現れたロランが、襲撃者の剣を剣で受け止めていた。

「え……ろ、らん……」

エレナは目を丸くして、突然現れたロランを見つめる。

ロランはちらっと、レオンの様子を確認する。

「ちなみに、その少年は死ぬほどの怪我を負ってはいませんよ」

「え……？」

ロランの台詞に、エレナは再び目を丸くした。そして、レオンの顔を見つめる。

やっと、レオンの呼吸を確認したようだ。

「よ、かった…よかったあ……」

少し目を潤ませて安堵のため息をつくエレナを、ロランは少し哀

しそうな瞳で見つめる。

「…お前は、誰だ？ 王女の護衛じゃないよな？」

襲撃者は、ロランを睨んでそう訊ねた。

「…………お前達のような外道に教える名は、残念ながら持っていない」

ロランはふつと余裕の笑みを浮かべると、反撃を開始した。さつき刀を受け止めた剣を捨て、魔法で創り出した氷の剣で戦っている。エレナはぼうつと、そんなロランを見ていたが、はつとして、ロランに治癒魔法を施す。

「ごめん…レオン、私がこんなことを計画したから…ッ」  
「…………うっん…エレナのせいじゃないよ…」

目を細く開けたレオンは痛そうに顔を歪めて、それでも微笑もつとする。

「ま、待ってて。私、さっさとレオンに傷を負わせた者を倒すから」

エレナはレオンにそう言うと、立ち上がった。襲撃者に向け、杖を向ける。

途端に、襲撃者たちはたじろぐ。

「おい、王女が本気に…ッ」「に、逃げないと！」「逃げるってどうやって…」「とにかく、死ぬぞ俺達！！」

そんな声が聞こえてくる。エレナは襲撃者達を睨み、ぶんつと杖を振った。

エレナの長い金髪が、風に煽られる。

「ぐああっ!!」

叫び声を上げて、倒れていく襲撃者達。背中には、見えない刃物で切り裂かれたような傷がある。

「レオンに傷を負わせたなんて、許さない。楽には、死なせてあげないから」

冷たい瞳で襲撃者達を睨むエレナ。ロランは攻撃をやめて、事態を見守っていた。

レオンはおろおろと視線を彷徨わす。

「く、く、御慈悲……を……お、じよ……様……」

襲撃者達のリーダー格らしい男が、エレナの方へ手を伸ばす。一瞬後、ひゅんつと音がして、男の手から血飛沫が飛んだ。

「あああッ!」

「今更、慈悲など求めても無駄よ。レオンに手を出した時点で、貴方達の死は決まっているのだから」

男の叫び声など聞こえないのか、エレナは冷たい表情を変えずに言う。

「お、許してくだ……さい」

それでも諦めない男は、まだ続ける。

「何度言っても無駄よ。それより、その傷で喋るのは辛いでしょう？ いい加減、黙ったらどうなの？」

冷たく告げるエレナを見て、ロランはくすりと笑いを漏らした。ぱつと振り返り、今度はロランを睨むエレナ。

「何か、可笑しいことでもありましたか？ ロラン様」

「いえ……ただ、エレナ様は恐ろしいお方だなあと思っています」

ロランは男をちらつと見て、そしてまたエレナへ視線を戻す。

「当たり前でしょう。レオンを傷つけたのですもの」

エレナの言葉に、またロランはふつと笑う。

「それほどまでに愛されるレオン殿は、幸せでしょうね……」

レオンを見て、ぱつりと呟くロラン。それを聞いて、エレナはしばらく黙りこんだ。

少し考えて、口を開く。

「では、ロラン様もそのような方と出逢えたら、きっとお幸せになれるでしょうね」

エレナはにこつと笑って告げる。ロランははあつとため息をついた。

「エレナ様は……私の心を、傷つけて、その傷を抉っているとい

うことにお気づきですか？」

ロランの言葉に、きょとんとするエレナ。どうやら、無意識だったようだ。

そんなエレナを見てロランは更にため息をつく。

「……まあ、いいでしょう。私にも、まだチャンスはあるはず……ッ!?」

ロランは、言葉を言いきらずに目を見開いた。エレナは、悲鳴も上げられなかった。

「ろ……ッ!」

“ロラン様”という言葉は、喉の奥に張り付いた様で出てこない。エレナは、目の前の状況に絶句していた。自分の目の前に立っているロラン。さっきまで話していた彼の胸：正確には左胸、心臓の真上から、血に濡れた剣が付き出ている。それはつまり、彼が刺されたことを意味して……。

ロランは、声も上げずに地面に倒れた。その倒れた彼の後ろにいたのは、さっきの襲撃者達のリーダーらしい男だった。

男も、今ので体力を使い果たしたのか、どさっとその場に倒れる。

ロランに、治癒魔法を施す暇もなかった。一目見ただけで、もう死んでいる、と分かる。

「そんな……なぜ……ロラン様……」

エレナはロランを見て、ぽつりと呟いた。

王都の門からは、やっと騒ぎに気付いた兵士たちが、こちらに走って来ていた。

\*\*\*\*\*

後日、エレナはフレンワーズ家の邸へ招かれていた。

招いたのは、ロランの母親である、ルチア・フレンワーズらしい。ロランが死んだのは自分のせいだ、とエレナは思っていたので、なぜ招かれたのか不思議だった。母親にとって、息子の死の原因となったエレナに会うのは、嫌だろう。

「エレナ陛下…ようこそ、おいで下さいました」

エレナを邸の門で迎えたルチアは、息子を失ったばかりだからかやつれて見えた。

エレナは罪悪感に、目を伏せる。

「このたびは……。全て、私の責任です。本当に、申し訳ありませんでした……」

エレナはそう言って、頭を下げた。そんなエレナを見て、ルチアは慌てる。

「そつ、そんな、エレナ陛下！！ お顔をお上げください！ 私は、貴女様に謝ってもらおうと思って、お会いしてわけではないのです！！」

ルチアの必死の言葉に、エレナは恐る恐る顔を上げた。

顔を上げた途端、涙でうるんでいるルチアの目と目があって、一瞬目を泳がす。

「是非……お渡ししたいものが、あるのです」  
「渡したいもの……私に？」

エレナの問いに、ルチアは頷く。そして、一本の剣を手に取った。宝石などは埋め込まれていないが、細かな装飾の掘られている、美しい剣だ。

「これは、ロランの創った剣なのです」

ルチアは、剣を愛しそうに眺めて言う。エレナは、驚いてリチアを見た。

「ロラン様の創った剣？　ロラン様は、剣を創れたのですか……？」

「はい……もちろん、鍛冶屋になるつもりはなさそうでしたが、剣が好きで……。そこの鍛冶屋よりは、良い腕を持っていたのですよ。まあ、時間が無かったので、この一本しか創りませんでした」「それは……素晴らしいですね。ロラン様は魔法も出来るお方でしたから、とても強い剣でしょうね」

エレナは、ロランの創った剣を見つめた。白銀の刃は光を反射してきらりと輝き、どんなものでも切れそうだった。

ルチアはもう一度剣を愛しそうに上から下まで眺めると、鞘にしまった。そして、エレナに差し出す。

「エレナ様。これを、持っていてくださいますか」  
「……え？」

予想外の言葉に、エレナはきよんとした。

「でも……この剣は、ルチア様の大切なものでしょう？」

「もちろん、大切です。でも、ロランは貴女様のことをとても慕っておりました…。ロランも、エレナ様に剣をお持ちいただくことを、きつと望んでいます」

ルチアはそう言って、剣をエレナに差し出した。エレナは、剣を見つめる。

「……でも、私は、ロラン様の想いに答えることは出来ませんでした……。今だって……」

エレナは、震える声で言う。この前に危機一髪のところを助けてもらったとはいえ、やはり、エレナの心はロランには向いていなかった。

でも、それを聞いても、ルチアは優しく微笑んだ。

「ええ……知っています。昔会った時からずっと、エレナ陛下はロランを恋愛対象として見ていませんものね。どちらかということ……兄のように想っているように、見えましたよ？」

ルチアの言葉に、エレナは頷く。

「ええ……年上ということもあるのですが、ロラン様は兄のような存在でした。会ったのは、数年前の一回と、今回だけでしたが……。時間なんて、関係ありませんでした。

……私は、お姉さまがいるようで、いないような環境でしたから

エレナは苦笑気味に付け加える。王宮での跡継ぎの問題は、もうこの頃から勃発していた。

付け加えられた言葉を聞いて、ルチアは少し目を伏せる。

「……でも、ならば、ロランは貴女様にとって、必要な存在だったでしょうか？」

「……はい。愛している、愛していないは関係ないとして、私にとって、必要な存在だったんだと思います。あそこまで皮肉を言い合える相手も、初めてだったし」

そう呟いて、ふっとエレナは笑った。その笑みを見て、ルチアも笑う。

「なら、ロランはきつと喜んでいきますね。……ですから、貴女様がこの剣を持っていて悪い理由などありません。どうか……持つていて、欲しいのです」

ルチアの真摯な瞳に見つめられて、エレナはこくつと小さく頷いた。そして、震える手で剣を受け取る。

「ロランも、きつと喜んでいきますよ」

ルチアの柔らかい微笑みを見た時、今まで溢れなかった涙が、エレナの目から溢れた。

エレナの過去編終了ッ!!!

ロランが少し可哀そうでしたが…(笑)。

次は、現代に戻りますっ!

s t o r y 2 8 . . . T o t h e t o p . (前書き)

晃紀のことを、嫌いになること間違いなしな感じがします(汗)。

「……少し話過ぎたが、これがエレナ様があの剣を大切にする理由だ。長旅の時は、持ち歩いている。あんなにまで自分を想ってくれたのに想い答えられなかったロラン様への、罪滅ぼしと言っていた」

ルイスが、そう締めくくった。

「へえ……エレナにそんな過去が……ていうか、何気に恐いな」

俺は戦っているエレナの話を聞いて、少し身震いする。敵にしたくねえ……。

「……そういえば、レオンって奴は生きてたんだろ？ 今でも、エレナとレオンって交際してたりするの？」

ルイスの話によると、レオンは致命傷ではなかったから生きているはずだ。

……これはつまり、不謹慎だけど、俺の恋愛フラグが折れそうなことを意味してる。

そして、俺の恋愛フラグは……

「いや、エレナ様はこの一年、レオンという少年に会っていない」

見事に折られなかった。……え？ 会ってない？ 破局したってこと？

「どづいづこと？ だって、レオンは生きてるんだろ？」

「生きているが、エレナ様はあの夜のことをとても悔いていらっしやる……レオンに会ってはならぬと、思っているのだろう」

ルイスが、遠い目をして言う。レオンに会ってはいけない、ねえ……。

俺はごろんと寝転んだ。

「話ちよつと変わるけどさ、この話ってみんな知ってんの？」

「……本当に変わったな……。大体の話は、皆知っている。名家の御息が無くなったのだから、何も説明しないわけにはいかないだろう。私はエレナ様に信頼されているので全てを話してもらったが……」

ルイスの言葉に、俺の耳はぴくんと動いた。

「それってつまり、今全部を話して貰えた俺はやっぱり信頼されてるってことに……」

俺の言葉は、ルイスの拳に阻まれた。剣じゃないだけましか……？

「だから、貴様には話過ぎたとさっき言っただろうが！ 調子に乗るな。詳しい話を知っているのはエレナ様と私と、王族の方々とフレンワーズ家の方々だけなのだから、口を滑らすなよ。もし滑らせたなら……分かってるな？」

ルイスは片手で、腰に下げている剣を見せる。……絶対、絶対敵にしたくねえ。

俺の方がバリアとか張れるし強いけど！ ルイスに嫌われたらエレナにも嫌われる気がするんだもん！

……なんか俺、この世界に来てからキャラ崩壊が始まっている気

がするんだよな…。

でもいいや、てか俺、この世界に来てから前とは別人で生きてった方が…、

「……エレナ様ツ!!」

俺の思考を邪魔したのは、ルイスの大声だった。隣で座っていたルイスは、ぱっと立ちあがる。

俺も慌てて辺りを見回した。闇の中から、エレナがグリフォンに乗って俺達のすぐ傍に着地する。

腕に、長剣を抱えている。

「ルイス…ごめんなさい、何も言わずに飛び出して。暗くて姿は見えなかったけど、空を飛ぶ魔物が急に天幕に入って来て…私、慌てちゃって…」

エレナは目を伏せて、ルイスに謝っている。

「いえ、エレナ様だから、魔物如きに負けるなどとは思っていませんでした。」

それより、ロラン様の剣は御無事でしたか…?」

「ええ、大丈夫、魔物は目的があつてこれを奪ったわけじゃなかったみたいだから。それに、ロランが創った剣だから、ちょっとやそつとじゃ傷つかないわ」

エレナはそう微笑んで、剣を見つめた。……俺、エレナの中の順位で、ロランよりも下な気がしてきた……。

そう思つて落ち込んでる俺には目もくれず、ルイスは言い辛そうに口を開いた。

「エレナ様……実は、こいつに」

ここで、ルイスは俺を顎でしゃくる。おい、なんだよそれ、なんだよその態度。俺はじろつとルイスを睨む。が、ルイスは気にせず続ける。

「エレナ様のお話を…その、詳しく話してしまったのですが…」

ルイスの言葉に、エレナははあつとため息をついた。

「ルイス……貴方って人は、本当に肝心な所が残念なのね……」

エレナの言葉に、ルイスは縮こまる。縮こまる、といっても、身長が180cmはあるうかと言うほどの大男だから、全然ちっちゃくならないけど。

「本当に、申し訳ありません……」

「はあ……まあ、話してしまったものは仕方ないわ。コウキ」

エレナは、俺の顔を真正面から見る。じろつと見られても、『可愛いな』と胸が高ぶる俺はおかしいだろうか。

「他言無用よ。もし誰かに話したら……分かってるでしょう?」

エレナの言葉に、俺はがくがくと頷く。さっきのルイスより、ずっと怖い…。

てか俺がエレナに逆らっても無駄だって知ってる。うん、この世界に来てからかなりの自信家になった俺だけど、これだけは言える。エレナに逆らった途端死ぬ。

がくがく頷いた俺を見て、エレナはにこつと微笑んだ。

「……じゃあ、もうこの話はやめましょう。夜中に起こして、本当に申し訳なかったわ。」

「明日も大変よ、早く寝ましょう」

さつきとは全然違うオーラが、エレナから出てる。……恐れ。

俺は冷や汗を流しながら、寝床についた。

\*\*\*\*\*

翌朝、今までにないほど早く、俺は叩き起こされた。

叩き起こしたのは、もちろんルイス。朝っぱら怒号を飛ばされて、全然怒らなかった俺を、誰か褒めてほしい。

「うっ……眠い……」

俺はのろのろと、エレナの馬の横を歩く。神様、俺、寝られたら何もいらぬ。

「コウキ……大丈夫？ 本当にごめんなさい。昨日の騒ぎがなかったら、もっと眠れてたでしょう？」

「うん、正直俺もそう思……」

俺は正直に答えかけて、はっと口をつぐむ。ここで正直に、『うん、俺もそう思う。エレナのせいだな』なんて答えたら、嫌われること間違いない。

だから俺は営業スマイルで、

「や、全然大丈夫。昨日のは仕方ないよ」

と、エレナに笑いかけた。エレナも、

「ありがとう……コウキって、優しいのね」

と、俺に微笑みかけた。うん、この微笑みをもらっただけで、嘘をついた価値がある。

俺はそつ気を取り直して、先の長い道のりをまた歩き始めた。

\*\*\*\*\*

それから数日間、特に大きな事件は起きなかった。そりゃあ、魔物が出て兵士の足が片方食いちぎられそうになったとか、ルイスと俺が喧嘩してあやうく死ぬところだったとか、それに怒ったエレナに俺もルイスも夕飯抜きにされたとかはあったけど、特に語る必要もないだろう。

ということ、俺らはもう少しで、頂上につく。

「あ……」

隣のエレナが、声を上げた。俺がエレナを見ると、エレナは口を少し開けて、前方を見ている。

俺もエレナの視線を追って、前を見た。

「……あつ」

俺も、声を上げた。前方には、微かに人の影。

「あれが……神様の、末裔の方かしら」

エレナが、なぜか声を潜めた。

「そうですね……恐らく、そうでしょう」

ルイスも、エレナに釣られて声が小さくなっている。

「……行きましょう」

エレナが、決心したように言う。そういえば、エレナも神参りは今回が初めてだって言ってたな。

どんなことがあるか、心配なんだろうな……。でも、大丈夫、俺が絶対守ってやるし。

俺は心の中で、そう呟いた。そして、その人影の方へ歩む。

「……」

エレナ達に気付き、その人……男か、女かは分からない。性別の判断がつかない外見だ。微妙だから、男にしとくか。

男は、こっちに振り向いた。

「……ッ！」

兵士たちが、息を飲んだ。俺も、目を見開いてその男を見つめる。その男は、真っ白い服を着ていて、髪の毛も真っ白だった。肌も、抜けるように白い。

白くないのは、目だけだった。目だけが、赤い。その赤い目で、男は俺達をじろじろと見る。

「……貴方様が、神様の、末裔ですか？」

エレナの声が、震えている。男は、頷いた。

「はい。いかにも、私が神の末裔です。貴方がたの目的は、私でしょう？」

男の声は、低いとも、高いともいえない、微妙な声だった。

「はい。私達は、10年に一度の“かむまい神参り”のため、この偉大なグレイト・マウンテンレンジ山脈の頂上に来ました。末裔の方、なんと、お呼びすればよいでしょうか」

エレナは、男の赤い目を真正面から見ていた。うん……エレナって、凄い勇気の持ち主だと思う。

男はふつと微笑んで、

「私には、名がありません。お好きなように、お呼びください」

と言った。俺……今、神様（末裔だけど）を目の前に見てるんだよな。

俺はそう思っつて、その男をじろじろ見た。だって、神様を見る機会なんか他にないし、目に焼き付けとかないと。

そう思いながら見ると、視線に気づいたのか、神がこっちに向いた。真っ赤な瞳で見つめられて、俺は固まる。そして口を開いた神が言った言葉は、

「……どうやら、何年かに一度の客人が、同行しているようですね……」

だった。そして、もう一言付け加える。

「二人も」

story28 . . . To the top . (後書き)

やっと、現代に戻りましたーっ！

そして、お気に入り登録件数50件突破！！

……嘘じゃないかな？ 私、目おかしいんじゃないのかな、と思う毎日です（笑）。

では、これからもよろしくお願いします。

……ちなみに、私の友達が弓道の全国大会で4位になりました！！誰かに言いたい気分だったので、ここに書いてしまいました、すいません。

うう……すいません、駄文です。スランプ突入、ですかね（汗）。  
……いや、もともといつもがスランプな私ですが。

俺は、神様の言葉に目を丸くした。

客人、っていうのは、たぶん俺のことだよな。俺の方をがつつり見てたし、たぶん神様だから俺が異世界から来たって知ってる可能性あるし。

でも……“二人”？俺以外にも、異世界からトリップして来た奴がいるのか？

「……自分の他にもいるのか、という顔ですね」

げっ、読めんのか？俺の心読めんのか！？

「ええ、読めますよ。仮にも、私の祖先は創生の神ですから」

神様はにこつと微笑んだ。……やばくね？だって、心読まれるとか、俺後ろめたいことがたくさん……、

「へえ……それは、どんなことが知りたいですね」

……も、もう嫌だーっ！！

「すみません、少々からかいすぎてしまいました」

俺の心の叫びを聞いて、神様は苦笑した。こいつ……何気に正確悪い？神様の癖に。

「大丈夫、人の心が読めても、それを簡単に口に出したりなんか

しませんよ。

それに、私は“未裔”であって、神ではないと言ったでしょう」

神様は俺を見て言う。でも、他の人に言われなくても、自分の心の声が人に知られるとか、やっぱり嫌だろ。

俺がそう考えていると、それまで完全に蚊帳の外だったエレナがおずおずと神様に近付いた。

「あの……神様。実は私、この神参りで何をすればいいのか全然知らないんです」

神様はエレナをじっと見る。

「貴女が、フィルトシア王国第二王女の、エレナ・フェルトシア陛下ですね」

神様の言葉に、エレナはこくと頷いた。そして、微かに震える声で続ける。

「はい、そうです。……お父様が、よろしく伝えてくれと、言うておりました」

その言葉に、神様は目を細くした。

「貴女のお父上は……つまり、フェルトシア国王ですか。もう300年生きていますが、お会いしたことは無いですね」

「ええ。お父様は前国王の長男でしたから、神参りに来たことはありません。

神参りは、第二王子又は第二王女が行く定めですから」

……おいおいおい、ちょっと待て。エレナは軽くスルーしたけど、今凄いいこと言ったよね？

300年生きてる、とか言わなかった？

俺はじーつと神様を見る。外見的に、20代っぽい。てか、20代のかっこよくて優しい男で……300歳のじーちゃんには見えねえ……。

「そうですか。遠路、御苦労さまでした。

神参り、と呼んでいるんですね。これは、別に何をやる、ということもありません。遙か昔から続く儀式のようなものです。今は創生の神はいませんが、神というのは下の世界ではまだ色濃く残っているんですね」

神様はそう呟いて、後ろを向いた。それに合わせて後ろを向くと……白い家。大きさは、普通の……つまり、元の世界でいう年収700万くらいのサラリーマンが持っている家みたいな大きさ。それにしても、ただだけ白好きなんだよ……。

「今は暫く、私の家で休んでください。兵士の方々も、疲れ切っていますよ」

「ありがとうございます。では、休ませて頂きますね」

エレナの返事を聞いて、神様はどこかへ立ち去ろうとした。俺は慌てて後を追いかける。

「おい……神様っ！！」

俺の声に、神様は振り返った。赤い瞳で見られるとやっぱり怖いけど、これだけは訊いておかなきゃ俺の好奇心が満足出来ない。

「なんででしょうか？」

「さつき言ってた……“ 客人が二人” って？」

俺の言葉に、神様は微笑みを浮かべた。何もかも分かっている、という余裕のある微笑みだ。

……うん、うざい。

「ああ、それは後ほど。皆さんの疲れがとれたら、お話します」

……え？ 神様の言葉に、俺は目を丸くした。

普通さ、普通ならさ、ここで主人公だけがこの話を聞いて、場合によっては悩み苦しみ……ってやつじゃないの？

「貴方は、あまり悩むような人柄ではないと思いますが」

読むな！！ だから人の心を読むなあーっ！！

「おっと、すみません。時々つい読んでしまっただけ」

また読んでるだろうがあっ！！ こいつ、反省したように見えて反省してねえだろ！ 絶対！！

「反省なら、しているつもりなのですが」

……無駄だ、もう、こいつに何を言っても無駄だ……。

俺は心の中でため息をつく。無駄な心のエネルギーを使ってしまった……。

「さつきから思っていたのですが、なぜ貴方は私のことを“ 神様” と呼んだり、“ こいつ” と言ったりするのですか？」

……俺の心の声は無視かよ。なんでいつも呼んでのにさっきは読んでねえんだよ……。

「貴方が『読むな』と言ったので、読まないようにしたのですが……。  
私も、心を入れ替えたのですよ？」

今返事返したってことはばりばり読んだってことじゃねえかよ！！

「すいません。さっき時々読んでしまうと言ったでしょう」

……この頻度じゃ時々じゃねえよ。100%じゃねえか。  
てか、この不毛な言い争いいい加減やめようぜ……。

「そうですね。……でも、貴方ももう私に心の中で話しかけてる  
じゃないですか」

「な……ッ。……確かに」

俺は久しぶり……といっても、数分ぶりに声をだした。

「では、後ほど」

神様はそう言うと、今度こそ去って行く。  
今日一日で分かったこと。……神様は、性格が悪い。

\*\*\*\*\*

夜遅く、夕飯を食べ終わった俺とエレナとルイスは、神様に呼ばれた。

……あれ、兵士とか全員に話すんじゃないの？ 俺は不思議に思いながらも、神様についていく。

「どつぞ、こつちへ」

神様が壁を手で軽く押すと、隠し通路のような場所が現れた。忍者屋敷かよ。

「まあ、それほど極秘の話、というわけでもないのですが……。  
まあ、一応」

神様はふつと笑って、階段を下りて行く。

「なんででしょうね」

エレナがそう呟いて、神様の後に行く。続いてルイスで、最後が俺。

……別に、『なんで俺が最後なんだよ』とか思っていないから！！

「……」

全員何も喋らず、無言のまま階段を下りる。

30段くらい下ったところで、部屋に辿りついた。部屋の中はかなり狭い。しかも、部屋の中を照らすのは神様の手にもっている小さいランプだけ。

なんかこの感じ、心が躍る。あれだよな、ファンタジーな映画とかで、『実は、頼みが……』的な展開が俺を待っている……！！

……依頼者が、三百歳のじーさん（男女？）なことが、残念だけ

ど。可愛い…… エレナみたいなお姫様だったらなあ……。

「では……神の末裔様、お話とは……？」

エレナが、不安そうな瞳で神様を見つめる。神様はそれと正反対の顔……いつもの微笑んだ顔で、

「そんな、不安げな瞳で見なくても大丈夫ですよ」

と言った。エレナも頬を緩める。

「少し、伝えておきたいことがあるだけです」

「伝えておきたいこと？」

エレナの言葉に、神様は頷く。

「これは、エレナ様には関係ありません。世界を渡って来た客人へ伝えたいことですから」

そう言つて、神様は俺を見た。俺？ 俺に伝えたいこと？ あ、そうか、あれか。君はこれからこの世界でエレナと結婚するだろうから、もう二度と元の世界には帰れないとか。

神様だし、未来が見えるんだろう。だから俺に予言を……、

「違いますよ、予言ではありません」

……また読みやがったな神野郎。お前なんか……、暴走しそうになった心の声を、俺はなんとか抑える。

「……じゃあ、何を伝えたいんだ？」



祝、30話目!!

早いもので、もう30話です!!

そして、祝、ユニークユーザ5000人突破!!

ありがとうございます。

これからも宜しくお願いします。



？ 俺はトラックに轢かれて…たぶん死んだっばいけど……ルイス達もかな？

そんな俺に疑問に答えるように、神様は続ける。

「ルイスさん、貴方と貴方のお母上は、元の世界で死んでいるわけではありません。生きてる内に来てしまったのですから。だから……貴方のお母上は、帰りたいかと思ひまして、これを伝えたかったのです」

え、嘘、ルイス達死んでないの？ ていうか、それはつまり、俺は向こうでは死んでるから帰れないとか？

そんな俺の心を読んだのか、俺の方を向いて神様は言う。

「もちろん晃紀さん、貴方は向こうの世界では死んでいますが、帰れますよ」

神様の言葉に、俺は安堵して笑顔になる……こともなく、

「まつさかあ、帰るわけねえじゃん。何が嬉しくて元の世界に帰るんだよ」

俺は首をぶんぶん横に振った。神様は苦笑いして、またルイスに向き直る。

「お母上に言って、もし、帰りたいとおっしゃるならば、シヨウレイコク翔麗国に行くといいですよ」

シヨウレイコク？ またまた、訳分かんない地名が出てきたな……。

「そこに、世界を渡らせる術を身につけたという、呪術師がいる  
ようですから」

「……その呪術師に会えば、母上は帰れるのですか？」

ルイスは神様にそう訊ねる。凄い……俺だったら、そんなすぐに  
納得出来ないけど。

「ええ。もちろん、ルイスさん、貴方も」

神様の言葉に、ルイスは黙り込んだ。しばらくの沈黙。

「る……いす……」

その沈黙を破ったのは、エレナの震える小さな声。

「貴方も……帰るの？ 元の世界と……いう所へ」

エレナの目には、涙が浮かんでいた。たぶん、ここは泣けるシー  
ンなんだろう。でも、俺には泣けない。だって、エレナさつき俺が  
帰るとか帰らないの話してた時、全然泣かなかったじゃないか！！

「それは……分かりません。母上の御心次第……」

ルイスは視線を泳がせる。

「ルイス……もし、貴方が帰りたいなら、私のことは気にしない  
でね」

エレナは涙を堪えているような表情で言う。いや、たぶん……て  
か絶対、堪えてるんだろうけど。

「エレナ様……」

「私なら、大丈夫だから。そりゃあ、いなくなっちゃったら寂しいけど、ほら、コウキだっているんだし、私のことなら、気にしないでいいから！」

エレナは変に明るい調子で言う。そうか……やっぱり、俺はルイスがいなくなっちゃった時の予備か……。

でも、とりあえずルイスがいなくなれば俺とエレナの間を裂く奴はいないわけだよな。

そう思って、俺もルイスに詰め寄る。

「うんうん、ルイス、我慢しないでいいぞ？ お前がいなくなっても、エレナはちゃんと俺が……ッ、ごぶあッ」

「馬鹿者、貴様にエレナ様をお任せ出来るか！」

俺の言葉は、ルイスの拳に阻まれる。

「ごぶ……ちょ、今までで一番強かった気が……」

「当たり前だ、下心が見えたからな」

びくびくしている俺と、それを見降ろすルイス。うわ、この構図最悪……。

「……そろそろ、話の続きをしてもいいですか？」

神様の声に、ルイスは慌てて神様に向き直った。しかも、俺が動かないように俺の背中を足で踏みつけながら。痛てえ！！ 地味に痛てえよそれ！！

「翔麗国の王宮に、その呪術師がいるらしい。会ってみては？」  
神様を見つめて、固まっているルイス。  
そんなルイスを見て、エレナは口を開く。

「翔麗国なら……近いうちに、行く予定です」  
「えっ、そうなの？」

俺は驚いてエレナを見る。そんな都合いい展開があっただ。

「ええ、あの国には双子の王子と姫君がいて、その婚約発表に招かれてるから」

へえ……てか、兄弟で結婚？ いつの話だよそれ。いやここ違う世界だしな、うん。

俺は頭の中で勝手に納得した。

「ねえ、俺も翔麗国ついてっていい？」  
「ええ！？ だめに決まってるでしょう」

エレナは目を丸くして言う。え、嘘、だめなの？ これ絶対、翔麗国に行けると思ったんだけど。

「招かれているのは、王族だし……。ルイスは従者だからいいけど、コウキはただの国民だし……」。  
うーん……どうしても行きたいの？」

エレナの言葉に、こくこく頷く。よし、俺は目的のためなら手段を選ばない！！

「ほら、その呪術師つてのにも会ってみたいしさ。ほら、俺だつて異世界から来たわけだし。お願い、連れてってくんない？」

俺のきらきら輝く瞳を見て、エレナははぁーっと息を吐いた。

「仕方ないわね……。『帰りたくない』って言ってた癖に」

やっぱり、“呪術師”が効いたらしい。俺はははっと笑って、

「まあ、会ってみるだけ会ってみたいし？」

と言った。ルイスは不服そうだけど、こつ話しちゃえば反論出来ないよな。

そしてエレナは俺とルイスを交互に見て言う。

「じゃあ、神参りが終わったら、お父様に言いに行きましょう。

でもルイス、貴方は貴方のお母様にこの話をする時間が必要よね？」

エレナの言葉に、ルイスは頷く。

「ええ、少し、時間を頂いてもいいでしょうか」

「もちろんよ。その間、コウキは城に居て、お父様と交渉をしながらね」

エレナの言葉に、俺も頷いた。

でも……またあの恐い国王様と会うのか……テンション下がんな。

あつという間にstory30ですっ!!

私の予定では……うーん、折り返し地点？ 折り返した後？ くらいですかね（汗）。

この更新スピードで、完結に向かって突っ走れ……るように、頑張ります!!

なんか……飛んじゃってる気が、  
(汗)

翌日、俺達は神様と別れて山を下り始めた。

「ほんつとに、なんもイベントねえんだな」

俺は山道を下りながら呟く。普通こつこついつのつてさ、山の頂上に魔神がいて、戦ったりするんじゃないの？ この展開、小説としてNGだろ？

「俺の活躍ポイントがねえ……何なんだよこれ……」

「コウキ？ 何をぶつぶつ言ってるの？」

「え、うわあっ！」

エレナの不審そうな顔に覗き込まれて、俺は飛びのいた。

「……失礼ね、私の顔がそんなに嫌なの？」

エレナは口を尖らせて抗議する。いやいやいや、さっきの俺の顔との距離10？ もありませんでしたよ？ 危うくエレナの唇が俺に奪われるところでしたよ？

……まあ、俺はそれでいいんだけど。てか寧ろそれがいいんだけど。

「……あの……コウキ？ 貴方の顔に何か……不穏なものを感じるのだけれど……」

エレナが俺の顔を見て、怪訝そうに聞いてくる。

「えっ、嘘、バレ……」

バレた、と言いきりになった自分の口を、慌てて塞ぐ。こんなこと言ったら、エレナに警戒されちゃう。

そんな俺を見て、エレナは遠慮がちに口を開いた。

「……ねえ、コウキ。私ね、前からずっと言おうと思ってたんだけど……。でも、ほら、言っていていいかどうか分からなくて……。でも、やっぱり、私の考えは絶対伝えた方が良くと思うの」

……え、何何何？ ついに、ついに愛の告白ですかっ!？

「私のお勧めのお医者様がいるから、一度でいいから見て貰ったらいいと思うの」

\*\*\*\*\*

「えっと……あの……コウキ？」

エレナが隣で心配そうに声をかけてくれる。

「ん？」

「えっと……あの……何かあったの？」

……エレナって、天然か？ 全然そんなイメージなかったんだけど。

「えつと……一つだけ。自分の発言を思い出せ、だ」  
「え？ 私？」

そう、君。今の俺の気分は……あれだ、昔の頃の俺。現実世界にいた頃の。

そりゃ、異世界に来たら「この世界こそ!!」って自信満々になつてた俺だけど……。

その世界で好きな女の子に告白されると思ったら、「病院行け」だぜ？ へこむだろ。誰だって。

「ねえ、私、何か言った？ ごめんなさい、何を言ったか分からなくて……」

エレナが少し泣きそうな表情で言ってくる。こんな顔されたら……、

「……いいよ、もう気にしなくて」

俺はいつの間にか、そう言っている。だって変に意地張って嫌われたら、それこそ後悔するに決まってるし。

「え……そう……ごめんなさい」

エレナはそう言ってぺこっと頭を下げると、また前を向いて歩き始めた。

あ、なんでルイスがこの件に関して突っ込まないのか不思議に思った？ ルイスは、なんか黙々と考えながら歩いてて、俺とエレナの会話なんか聞いてない。

たぶん、頂上で神様に言われたことを考えてるんだろう。お母さんに話すっつってたけど……ルイスのお母さんって、美人なのかな……。

だって、ルイスだって悪い顔とは言えない……普通……いや、寧ろかつこいい……に、入る顔だし……そのお母さんだったらきつと……。  
そんなことを考えながら、俺は山道を下り続けた。

\*\*\*\*\*

帰りは下りということもあるのか、5泊で山麓まで行けた。

「うわぁ、久しぶりの……ん？」

山麓で伸びをしていた俺は、空の上から俺に向かって猛烈な勢いで降りてくる何かを発見した。

「なんだあれ……黒い……ちつちえな……」

それはどんどん俺に近づいてくる。しかも、もの凄い速度で。

「ん？ ん？ え、うわぁーっ!？」

それが俺に突っ込んできて、俺は慌てて飛びのいた。

突っ込んできたのは、普通より大きな鷹……珠洲ちゃんの召喚獣の、名前なんだっけ？

「アルム？」

俺がそう鷹に言うと、鷹がぴゅっぴゅっ五月蠅いほどに鳴いて、嘴で俺を突いてきた。

「え、嘘、違う？ てか痛えよ！！ お前鷹の癖に人間様に何やってんだよ！」

俺は突かれた所を擦りながら言う。

鷹はぴゅうつと鳴いて、俺に巻いた紙を差し出した。紐で止めてある。

「ん、何？ 手紙？」

俺の質問に、鷹はぴゅうぴゅうつと鳴く。とにかく読めってことか。

俺は紙をくるくる開く。今更、なんでこの世界の文字が読めるんだろつなんて疑問は抱かない。微妙に日本語とは違うように見えるけど、読めるんだよなあ……。魔力かな。

< ｴｯ ｺﾞｳｷ。

アルクにこの手紙を持たせるわね >

あ、この鷹アルクだった。アルクアルク。

< あんた……何勝手なことやらかしてるの？ >

あれ、なんかキャラが変わって来てない？ や、前からこんなキヤラだったっけ？

< エレナ様とルイス様の行事に同行したって、エレナ様から伝書バトが来たわ。何の行事かは知らないけど、グレイト・マウンテンレンジ偉大なる山脈の近くと  
いうことしか聞いてないし >

そういえば、国民には神参りのことを教えてないって言ってたな。

<あのね……この手紙を受け取ってる頃には、もう帰って来てる頃だと思っわ。

いい？ 私と会ったら……覚悟をしておきなさいよ>

……げ。また魔法弾の嵐とか来たりすんのかな……。

<じゃあ。アルクに見つけたら私を呼ぶように言ったから、そろそろ私がそつちに着く……かもね。

f r o m 珠洲>

……嘘、珠洲ちゃんが来る！？

俺はきよるきよると辺りを見回した。そういえば、いつの間にかアルクがいない。

「コウキ？ どうしたの？」

エレナが不思議そうな顔で訊ねてくる。

「あの、この手紙……」

「……キ……」

……ん？ 今、珠洲ちゃんの声が聞こえた気が……。

「コウキ！！ この馬鹿が！！」

「ぐあッ!？」

後頭部に衝撃を感じて、俺は拭き飛んだ。頭ががんがんする。

「な……、なに……」

頭を押さえながら振り向くと、ぎろつと俺を睨んでいる珠洲ちゃんの姿。

どうやら、俺は珠洲ちゃんに飛び蹴りを食らったらしい。てか、ワンピースで飛び蹴りするなよ、可愛い女の子なんだから。

「コウキ…… あんたって人は、どうしてこう……」

はぁーつと深いため息をつきながら、珠洲ちゃんは俺に向かって杖を構える。

バリアを張る隙も無く、火の玉が俺に向かってどんどん飛んでくる。

「えっ、ちょ、熱ッ！！ あっつ、痛、え、ちょ、死……ッ！！」

びよんびよん跳ねまわる俺には、バリアを張る余裕なんて無い。

このままじゃ死ぬよ！？ 俺死ぬよ！？

そんな死の覚悟をした俺を助けたのは……、

「珠洲さん？」

エレナの控えめな声だった。

「五月蠅い、今取り込み中……って、え！？ え、え、エレナ様！？」

珠洲ちゃんは話しかけてきた相手が誰かを知って、慌てて杖を下ろした。

「あの……コウキのこと、許してあげてくれないかしら？」

「え……エレナ様が、なぜ？」

珠洲ちゃんは軽くパニックになっている。

「コウキには、たまたま途中に会って私が来て貰うように頼んだの。だから、ね？ その杖を下ろしてくれないかしら？」

「エレナ様がそういうなら……」

珠洲ちゃんはしぶしぶ杖を下ろす。そして、俺に向き直った。

「じゃあコウキ、帰るわよ。本当にエレナ様、申し訳ありませんでした」

なんか、珠洲ちゃんが俺の母さんみたいになってるんだけど……。それに……。

「俺、これから城に行つて国王様に交渉するから、ごめん、今は帰れな……」

「はあ？ 何言ってるの？ 何を交渉するの？」

やばい、珠洲ちゃんがまたキレそう。

「あの……翔麗国に用があつて……だから行く許可を貰おうと……」

「本当よ。コウキは翔麗国に行かなければならないから、今度私やルイスが行く時に連れて行くつもり」

俺の言葉にかぶせ、エレナも言う。よし、エレナが言ってくれた

から、珠洲ちゃんもだめとは言えないだろう。

「……」

予想通り、珠洲ちゃんはなんとも言えない表情だ。ちょっと申し訳ないけど……俺には、翔麗国のほうが魅力的。

そんな俺達を見て、エレナが思い立ったように、

「あ、ねえ、珠洲さんも一緒に来てくれない？」

と言った。

珠洲ちゃんはきょとんとして、「え？」と聞き返す。

「あつ、それ良い案！！ 珠洲ちゃんもいつしよに行こうよ！！」

俺は満面の笑みで、エレナの考えに大賛成する。両手に花の海外旅行。うん、めちゃくちゃ良い。

「コウキの身元保証人なんでしょう？ 証明書に書いてあったわ。だから、お父様も許可してくださると思うし」

エレナは手を合わせて、きらきらの笑顔だ。珠洲ちゃんは少し混乱したまま、

「え……あ……はい……」

と頷いた。

今更ですが、祝、200pt突破!!

そして、八月最後の更新です。

9月は、新学期が始まるので更新遅くなっちゃう……かも。  
頑張ります!!

「では、少し帰省させて頂きます」

ルイスはエレナにお辞儀をした。エレナは微笑みながら、こくりと頷く。

「ええ、日にちならまだまだ余裕があるし、この機会にゆっくりしていきなさい」

「え、いや、しかし……。出来るだけ早く、城に戻ろうと……」

おろおろとするルイスをみて、エレナははあつとため息をつく。

「もうずっと帰省してないでしょう？ 数日間は、お母様といっしょに過ごしなさい」

「しかし……はい……」

ルイスはしぶしぶ頷いた。エレナは満足そうな笑みを見せる。たぶん、俺の頬も緩んでるだろう。だって、数日間は俺とエレナの仲を邪魔する奴はいないんだもん。

「では……」

ルイスはぱつと馬に跨った。ふと俺の方を向くと、

「おい貴様、エレナ様に変なことをするな。したら……分かってるだろうな？」

と、じろりと睨まれる。俺はひらひらと手を振りながら、

「……あー、分かった分かった、本人との合意の上だったらキスでもハグでもしていいんだな」

と笑顔で言う。……その後、ルイスが二本の剣を取り出したのと、俺が強力なバリアを張って数十分を無駄にしたのは言うまでも無い。

\*\*\*\*\*

俺は、目の前にそびえる城を見た。

見るのは二度目だけど……やっぱりでけえ。しかも、この中に国王がいるというだけで、ゲームのラスボスの城に見えてくる。

俺らが近付くと、城の門の衛兵は、エレナの姿に気付いて急いで姿勢を良くした。

「王女陛下！… 御帰還、おめでと〜ございます！…」

衛兵の声に、城の中からも衛兵がたくさん出てきた。

「王女様！…」「エレナ様だ」「久しぶりのお戻りだ」

そんな声が、ざわざわと聞こえた。嬉しそうな声もあれば、迷惑そうな声もある。“第一王女派”の人達だろうか。

「エレナ……、おかえりなさい」

城の中から、クリーム色のドレスを来た人が出てきて、満面の笑

みで俺達を迎えた。

エレナと同じ、カールした金髪。エレナの母で、第二王妃のシルヴィアだ。

シルヴィアは俺と珠洲ちゃんを見て、眉をひそめる。

「エレナ……この方々は？ たしか、この少年……えつと、こ、こ、こ……」

「コウキ？」

鶏みたいになってるシルヴィアに、エレナは助け船を出した。俺の名前、憶えてないんだ……。

「そう、コウキ。コウキさんも、まさかいつしよに……？」

シルヴィアは俺をじろじろと見る。

「ええ、少しトラブルがあつて、いつしよに行くことになったの。あと……出来れば早めに、お父様に話したいことがあるんだけど、いいかしら？」

「アルノルト様に？ 夕食の席ではだめなの？」

「出来れば、早い方がいいの。それに……出来れば、私と、お父様と、コウキとで話したいの」

シルヴィアは俺の名前が出てきたことに不審な顔をしたが、「お願いしてみるわね」と言つて城の中に戻って行った。

「エレナの母さん……良い人だな」

俺の言葉に、エレナはふふっと笑つた。

「でしょう？ でも、その呼び方はやめた方がいいわよ。私の事はエレナでいいけど、お母様のことはシルヴィア様って呼ばなきゃ」「ん、分かった。……ところでさ、中に入らないの？」

俺の問いに、エレナはあっという顔をした。

「そうだった、すっかり話しこんじゃってたわ……。中に入りましょう。コウキ、珠洲さん、侍女に部屋に案内させるわね」

\*\*\*\*\*

エレナに呼ばれて、俺は正装をして国王の書斎の前に来ていた。前に国王と話したのは“玉座の間”だったが、今回はこの書斎で話すらしい。

エレナが、こんこんとノックをする。

「お父様、エレナです」

「来たか。入れ」

返事を確認し、エレナは中に入った。緊張しながら、俺も後に続く。

「また会ったな、カミヤ殿」

「えっ、あ、はい……」

俺は笑顔を顔に張り付け、会釈した。やっぱり、この国王苦手なんだよな……。

「エレナに聞いたが……神参りに同行したと？」

国王の鷹のような目が、俺を貫く。

「はい。……あの、たまたま、偶然で。しかも、あの、頂上で神様と会った意味凄いあったんで……だから、あの、どうか……」

どうか俺を死刑にしないでくださいッ！！ その言葉を、なんとか飲み込む。

「ほう、なるほど。エレナ、カミヤ殿が同行した意味とは？」

「神の末裔様は、“世界を渡って来た者”が元の世界へ帰る方法をご存知でした」

エレナは突然話を振られたにも関わらず、すらすらと答える。

「ほう、元の世界に帰る方法か」

「はい。お父様もご存知の通り、世界を渡ることは強大な魔法です。巨大な魔力を持つ者がそれを発動したとしても、それは故意ではないもの。未だかつて、この魔法を完璧にマスターし、コントロール出来ている者はいません。

しかし……翔麗国の宮廷に、この魔法を使える呪術師がいると、聞きました」

エレナの言葉に、国王は目を丸くした。少し身を乗り出して、訊ねる。

「それは、真か？ 翔麗国に、その呪術師がいるというのは」

「ええ、神の末裔様が言っていたのですから、本当でしょう。

コウキは世界を渡って、この世界に来たのです。ですから、その

呪術師に会った方がいいでしょう?」

エレナはじつと国王を見る。俺? 俺は怖くて国王なんかじつと見れねえよ。

「それは……翔麗国に行く時、カミヤ殿も同行させたいと、言っているのか?」

「ええ、そうです。翔麗国へ行くのは私ですから、私の従者ということにしましょう。」

それと……コウキの身元保証人となっている、珠洲さんも。ご存知でしょうか? ムギ村の魔術師です」

エレナは微笑みながら、どんどん話を進める。凄い……俺だったら絶対、怖くてこんなこと言えねえよ。

「なるほど。つまり、翔麗国へ行く予定のお前とルイス、そして兵士20人の他に、一般の国民を2人連れて行きたい、と」

「ええ、その通りです。と言っても、二人ともかなりの魔術師、護衛には事欠きません」

エレナを見て、国王ははあーっとため息をついた。そして、俺の方を向く。

え、やばい、殺される? 「出しゃばるな」って殺される?」

「いいだろう。カミヤ殿、そしてもう一人の珠洲殿という魔術師が、翔麗国へ行くことを許そう」



俺は国王の書齋を出て、自分の部屋へと歩いていった。

それにしても……俺、翔麗国へ行ける！！ ……たぶん、翔麗国には可愛いお姫様が……。

「あら、貴方は？」

俺の妄そ……想像を邪魔したのは、突然目の前に現れた背の高い美女だった。俺はあまりに妄そ……想像しすぎて、角があることに気付かなかつたらしい。

「あ、えつと……ソフェア…様？」

「ええ、その通り、第一王女のソフィアよ。貴方は確か、エレナの友人の……」

ソフィアは俺を見てうーんと唸る。 ……俺、そんなに印象薄い？

「コウキです、コウキ」

「そうだったわ！！ コウキね、コウキ。また城へ来たの？」

ソフィアは手をぽんと打ってから、怪訝そうに俺に訊ねた。

「翔麗国へいっしょに行くんで、その交渉を国王様にしに来たんです」

「お父様に？ それは……凄いわね。どうだったの？」

「許可を貰いましたっ！！」

「凄いじゃない」

ソフィアは驚きをあらわにした。たぶん俺、今どや顔してるんだろつな。

そしてふと思い出したように付け加える。

「翔麗国へ行くのも、エレナだったわね」

「はい、エレナとルイスと兵士が何人かって言っていました」

俺の言葉に、ソフィアは少し顔を曇らせた。そして、ぼつりと咳く。

「兵士、ね……。ルイス一人で十分だろうに、お父様はエレナに甘いんだから」

国王つて、エレナに甘いのか？　なんか初耳なんだけど。

ソフィアはそれからもぶつぶつ呟く。

「あの子が、いなければ……。あの子さえ……」

……この人、俺がいるって忘れてるのかな。この言葉、完璧“エレナ暗殺事件”でも起きそうだけど。

「……っ、あ」

ソフィアははっと俺を見る。俺は慌てて首を振って、「聞いてません」の合図。

「……はあ、まあいいわ。どうせ貴方だって、私達の不仲の噂は聞いているんじゃないっ？」

ソフィアはじろりと俺を見る。まさに、蛇に睨まれた蛙だ。

「えつと……まあ……」

「でしようね」

ソフィアはそう言い放ち、はあーっとため息をついた。

「なんで私、こんなに貴方と無駄話をしてたのかしら」

……いや、それ俺が聞きたいけど。まあ、美人さんと喋れたし、これはこれで時間の有効活用だし。

でもソフィアは俺と話すのが時間の無駄だと思ったらしく、「私  
は行くわね」と言っさつさと去って行った。

「……俺と話すのが無駄ってなんだよ！」

俺は廊下に向かって叫ぶ。もちろん、ソフィアには聞こえない距離になってから。そして……重大なことに気付いた。

「部屋、どこか分かんねえ……」

ソフィアと歩きながら話してたから、全然分かんない廊下にいるんだよな、俺……。

とりあえず、きよろきよろしながら廊下を歩く。城探検つても楽しいし。

「……ん？」

ふと俺は、近くのドアを見つめた。普通のドアなんだけど、なんか、惹かれる……。

「覗くくらい、いいよな……」

俺はそう呟いて、ドアをゆっくり開けた。中は、青くてふかふかの絨毯がひいてあって、大きなベッドもある豪華な部屋だった。女の子が銭湯の世界に紛れ込んだ話の、大きな赤ん坊の部屋みたいだ。

そして……ベッドに、一人の少年が座っていた。でも、大きな赤ん坊じゃない。10歳、11歳くらいの茶髪の少年だ。肌が真っ白で、THE・アウトドアって感じ。身体も華奢だし。

その少年は、ゆっくりこつちを振り向いた。少し長めの茶髪が、茶色い目を隠している。

「……お前は、誰だ？」

少年は俺を見て、小さな声で呟く。なんか、見下されてるような気がするの俺だけ？

「あ、えっと、俺、コウキつつうんだけど……ちび、お前は？」

俺は見下されたような口調にいらつとしながら、ちび……少年の質問に答えてやった。ちびつつたのは……あれだし、事実だし。でもちびは俺をじろつと睨んだ。

「私は、“ちび”などという名前ではない！！ ジェームズだ！！」

ちび……ジェームズは、そう名乗った。でも……ジェームズって誰だ？

「あー……ちび、お前、なんでここにいるんだ？ ここは城だぞ

？ 侍女とかの息子か？」

俺の言葉に、ジェームズはぱつと俺に近づいた。

「なんだと！！ 私が、この私が侍女の息子！？ 馬鹿を言うな、私はフェルトシア王国国王、フェルトシア16世の息子なのだぞ！！」

……はい？

俺は目を丸くして、沈黙していた。

「……え、え、ええええええ！！？」

このちびが、王子？ でも、この前の食事会にはいなかったし……え、なんで？ 王様まさかの隠し子発覚？

「あー……ちび、お前嘘ついてんだろ？」

「何、私が嘘などつくものか！！ お前、王子に向かって“ちび”などと無礼であるぞ！！」

えっと……まあ、この口調は確かに王子っぽいんだけどさ。幼い声で威圧感ゼロなのは置いといて。

でも……俺はジェームズ王子なんて、聞いたこともねえぞ？

「なあちび、お前なんでこんなと……」

「だ、誰ッ！？」

俺の言葉を遮ったのは、少し裏返った女の声だった。振り向くと、ドアを開けて固まっている侍女の姿。

「あ、なあ侍女さん、こいつって本当にこの王子なのか？」

丁度良いと思って、俺は訊ねる。侍女は目を丸くして俺を見つめたまま、答えない。

「……侍女さん？」

「……あ、あなたは」

やっと開いた侍女の口から、震える声が漏れる。

「確か……エレナ様のお客様の……なぜ、ここへ……？」

「え、なぜって……迷った、つうか……いつの間にかこの部屋に来てて……」

なんでそんなに震えてんのかな？ そう思いつつも、俺は更に問いかける。

「てかさ、このちびが本当に王子だとしても、俺全然知らなかったんだけど。てか、噂にも聞かないし、エレナも話してないし……本当に王子？ もしかして、君の息子じゃないの？ ……あ、それとも君と国王様の隠し子とか」

ここで出てくる、俺の妄想。国王様は侍女が好きだけど身分差で妃には出来ない。だから、こっそり愛を育んで……。

「な、何を言っているのですか！ 私が国王陛下となど……ッ！  
！ しかも、ジェームズ様は本当に国王陛下のご子息です！！ し  
かし……なぜ貴方様は知ってしまったのですか……」

前半は慌てて言ってたけど、後半になるにつれてどんどん声が小

さくなる。もしかして……。

「このちびのこと、知っちゃいけなかったりした？」

俺の問いに、こくりと頷く侍女。なんで？ もしかして、この王子は呪われてて、人前に出ちゃいけなくて、でもそれを見た俺が呪いを解こうと奮闘し、見事呪いを解いて国王に「何か褒美を」「エレナを下さい」みたいな展開が……。

無いな。俺が呪いを解こうと奮闘するのは綺麗な女の子が相手だったらで、こんなちびのためには奮闘しないし。

「あの……カミヤ様。この秘密を知ってしまったからには……少し、お時間頂けますでしょうか」

「……？」

俺は頭の上にはなマークを浮かべながらも、頷いた。

「では、私についてきてくださいませ。ジェームズ様、申し訳ございません。もう少ししたら、お食事をお運びしますね」

侍女はジェームズに頭を下げると、こつこつと歩き始めた。俺は慌てて後を追う。

そして……ついたのは、城の中庭だった。白やピンクの花が咲き乱れる、綺麗な庭園。

侍女は庭園に入り、更に奥に進んでいく。しばらく進むと、中に小さく白いテーブルがあった。近くの白い椅子に、長い水色のドレスを来た美人が座っている。美人は長い茶髪を揺らして、俺達の方を向いた。

第三妃のシェリーだ。

「シエリー様。少し、よろしいでしょうか」

侍女は頭を下げて、すまなそうに言う。シエリーはきょとんとして、俺を侍女を交互に見た。

「貴方は確か……エレナのご友人の、コウキさんですね？ リリア、コウキさんがどうしたの？」

リリアと呼ばれた侍女は、言い辛そうに口を開く。

「あの……カミヤ様が、王子様の部屋に居たのです」

シエリーはリリアの言葉に、目を丸くした。数秒間固まる。そして、擦れた声を出した。

「それは……本当？」

リリアがこくりと頷いたのを見ると、シエリーははあーっとため息をついた。

「本当に、申し訳ございません!!」

「いいえ……リリア、貴方のせいじゃないわ。たまたま見られてしまったのよ」

土下座をするような勢いの侍女を、シエリーは宥める。そして俺の顔を見た。

「コウキさん……ジェームズのことを見てしまった以上、お話します。少しだけ知られて、変な噂を流されるよりは、話した方がいいでしょう。……でも、お約束ください。決して、口外せぬと」

深刻そうなシェリーの口調に、俺は頷いた。頷いたのを確認し、シェリーは口を開く。

「ジェームズは、私と陛下の息子です。ただ……あの子は生まれ  
てから、一度も外に出たことはありません。出たがらないのです」

俺は耳を疑った。一度も外に出ない？　つまり、ひきこもりじゃ  
ん、前の俺といっしょじゃん。

あの時部屋に惹かれたのは、中に俺と同じ種類の人間がいたから  
か。“類は友を呼ぶ”って奴か。

急にちびに親近感を覚えた俺は、話の続きを促した。  
シェリーは言い辛そうに口を開く。

「陛下は、そんな王子は情けないと仰りました。フェルトシア王  
家の者ではないと。ですから……今、ジェームズは、死んだことに  
されているのです」

おはようございます。

予約更新で、朝6時に更新です。

……つまり、私は今から学校です。次の原稿はまだ書いてないので、更新が遅くなるかも……。

「ジエームズは、死んだことにされているのです」

シエリーは重々しく言った。死んだことにされている？

「それって……どういうことですか？」

「言葉通りです。陛下はジエームズが一步も外に出ない、出たがらなないと知った時、そしてどうしようもないと知った時、国民に『ジエームズは不慮の事故で死んだ』と発表したのです。『あんな情けない男など、息子ではない。フェルトシア王家の者ではない』と仰って」

俺の問いに、悲しげに答えるシエリー。なんか、王道な話だな、おい。

「そして、その発表以降、ジエームズは出ないのではなく、出ていけないことになったのです」

「へえ……てか、こんな良い世界で出たくないとか、ちびも我が儘だな」

俺は頭を掻きながら呟く。だってさ、元の世界みたいな嫌な世界ならまだしも、こんな良い世界で、しかも王子に生まれて出たからないとかおかしいだろ。

「……」  
「ウキさん」

シエリーはじっと俺を見て、深刻そうな口調で言った。

「陛下とジェームズを、説得してくださいませんか」  
「……はい？」

俺は目を丸くしてシェリーを見つめる。説得しろって言った？  
この俺に？

「お願いします。どうか、あの子に再び、活気ある王都を、広い  
草原を、果てしない空を見せてあげてください」

俺を手を取って、ほろりと涙を流すシェリー。え、こんなことさ  
れたら……。

「もちろん……ッ」

俺は頷きかけて、慌てて口を閉じた。ここで頷いたら、またあの  
ちびと関わることになる。俺、子供って苦手なんだよなあ……。

「コウキさん……。お願いします。聞いて下さらないと……」

シェリーは俺を見て、少し睨む。え、ちょ、待って。まさかの脅  
し？ シェリーって、こんなキャラだったの？

「陛下に、お話します。ジェームズのことは最大の秘密、知って  
しまった者はただでは済みません。悪くて死罪もあります。ここ  
でコウキさんがジェームズのことを説得して頂ければ嬉しいのです  
が、だめというなら仕方ありません。私も見逃すことは……」

「やります！！ 是非やらせて下さい！！」

俺は満面の（作り）笑顔で返事した。だって、死罪とちびの説得

だつたらちびの説得のほうが……な。  
それに、いざとなれば魔法でコントロールすりゃ……。

「ありがとうございます！！ コウキさん、本当に感謝致します」

……だめだ。俺には美人を裏切れない。しかも、未来のお母さん……叔母さんか？ どっちにしる、身内になるかもしれない美人を、裏切ることなんて出来るか！！

「必ず、ジエームズを外に出して見せますよ」

俺はにこつと笑って、シエリーの手を握った。

\*\*\*\*\*

「ってことでちび、外へ出る」

俺はドアを指差してジエームズに言う。王族だつて分かっているけど……俺は年下（しかも男）に敬語を使う気なんて、さらさら無い。ジエームズは不貞腐れた顔で、

「なぜ私がお前に命令されるのだ。それに、私は外になど出たくない」

と言う。ほんつとーに……可愛くない奴だ。

「ちび、お前が王子でも俺は年上で……」

「私はちびではない、何度言ったら分かるのだ」

ジェームズは頬を膨らまし、俺に背中を向ける。あのなあ……。

「お前、こんな良い世界で外に出ないとか、馬鹿じゃねえの？魔法とかあるし、何より可愛い女の子がいっぱいいるんだぞ！！俺の元の世界見てみるか？ あの世界とこの世界比べてみる、何百倍もこっちの方がいいぞ？」

「……私は、この国は嫌だ」

ジェームズは小さい声でそう呟くと、膝の間に顔を埋めた。

俺がため息をつくのと同時に、リリアが入って来た。今更だが、リリアはシェリーに一番信頼されている侍女らしい。

「カミヤ様、シェリー様がお呼びです」

「……え」

もしかして、もう俺だめ？ 国王に話されて死刑にされちゃう？俺はどきどきしながら、リリアについていった。

\*\*\*\*\*

「シェリー様、失礼いたします」

リリアはこんこんとノックすると、シェリーの部屋へ入った。俺も慌てて後に続く。

「ああ、リリア。コウキさん。ジェームズはどうでしょうか？」

シェリーは俺に微笑みかける。俺も笑顔（苦笑）を返した。

「えっと……もうほんつとに可愛くな……いえ、頑固で、意志が強いんですね」

喉まで来た“可愛くない”という単語を、慌てて変換する。シェリーは軽く微笑んで、すぐに悲しげな表情になった。

「まったく、意志が強いのは良いけれど……今じゃあ、我が儘なだけです。陛下を説得できたとしても、本人が外に出なくちゃ意味がないのですし」

「……国王様を説得出来る確率って、どれくらいなんですか？」  
「ゼロに近いです」

……わお、即答。俺は額につつと冷や汗が落ちるのを感じた。

「それ……なんで俺に頼むんですか」

だって、ゼロに近いとか……。

俺はあーっとため息をついてシェリーを睨んだ。ちっ、面倒くさいこと頼みやがって。

「異界から来たというコウキさんなら、どうにか出来ると思ったのです。お願いします。どうか、出来る限り……」

また目が潤んでくるシェリー。……だめだ、美女の涙には勝てない。

「大丈夫です。俺がなんとかしますんで」

俺はぐつとシェリーの手を握る。シェリーは涙を流しながら、こくりと頷いた。

story34・・・I persuade James!! (後書き)

話が全然進んでない気がしますが……とりあえず投稿を。

ジェームズの話は思ったより早く終わりそうです。……大体なので、  
よくは分かりませんが(汗)。

俺がジェームズを説得するという話は、エレナにも伝わったらしい。

「なんか、エレナが城での俺の保護者っぽくなっているようだ。…俺のほうが年上なんだけどな。」

「まあ、とにかく、エレナは知ってても国王はまだ知らないから、こっそり毎日ジェームズの部屋へ通ってる。そして、今日もジェームズは暗くじめじめと部屋に……」

「おい、コウキー！」

「いるわけがなかった。部屋にはいるが、ひきこもりらしくない。普通さ、ひきこもりって暗くじめじめしてるものじゃないの？俺ひきこもり時代は、ずっと暗い部屋でゲームしてたか漫画読んでたぜ？」

「なのにジェームズは部屋にはいるけど、ひきこもってるけど……」。

「また、お前のいた世界の話をしてくれ。昨日は、その世界の歴史を語ってくれたな。“いえやす”はどうなったのだ？“いえやす”は、“にほん”の王となれたのか？」

瞳をきらきらさせて、俺に話の続きを促す。

「なんでこんなことになったのか、簡単に説明すると……」。

俺が「なんでこんな良い世界にいのひきこもってたんだよ」と言ったら、ジェームズは「ならお前の世界はどうなのだ？話してみよ」と偉そうに俺に言った。だから……数日前からずっと語り続けてるんだよな、日本の歴史を。」

「ああ、したよ。んで江戸っていう今の東京に……」

「とうきょう？」 “とうきょう”とは何だ？」

「あー……王都？」

やばい……全然日本のこと知らないやつに日本のことを説明するのって、超面倒くせえ。

俺は今、もの凄く疲れた顔をしてると思う。

「おお、王都か。ならば、“いえやす”は王になれたのだな！」

「え、いや、ちよつとちが……王は天皇……っていつか、うん、もういいや。家康王でいいや！」

俺は面倒臭くなつて、適当に返事を返すことにする。うん、だって本当の歴史知らないんだし。

「おお、凄いな家康は！！ して、その続きは？ “とよとみ”はどうなったのだ？」

「豊臣は……死んだ。家康に負けた。んでちなみに、そのあと数百年徳川が治めた」

歴史の先生が聞いたらこの適当な説明に激怒するだろうけど、ちび相手にはこれで十分だ。

どうせ本当の歴史なんて学ばないんだし。

「ほう、“いえやす”は長生きなのだな」

「長生……うん、長生きだろ」

そつえば、ちゃんとした歴史を教える必要がどこにある。

今更ながらそれに気づき、俺はとりあえず歴史を簡略化して語り

始めた。

「んで、家康が死んだら天皇が出てきて、今度はその人の政治になって、戦争があつて、日本は今平和なんだよ」

「ほう。では、今はどんな国なのだ？ 魔術師はどれくらいいる？」

「……ちよつと待て。俺の説明に突っ込めよ！！」

いや、突っ込まれたら面倒くさいから困るけど。困るけど一国の王子がこれでいいのかおい！

「おい、コウキ。魔術師はどれくらいいる？ 城はどれくらいの大きさなんだ？」

ジェームズはじーつと俺を見つめて訊ねてくる。うーん……日本には、魔術師なんていないんだけどな。いたら嬉しいけど。

「日本には魔術師なんていないし、城は……うーん、江戸城跡なら？ あと、大阪城とか」

「えど城？ ほう……おもしろそうだな」

瞳をきらきらさせるジェームズ。なんで現実世界の話でそんなに嬉しそうに出来るんだ？

「あー……ジェームズ。そんなおもしろいところじゃないぞ？

全然こっちの世界の方が良いし。だから、一国の王子なんて恵まれた立場でひきこもるとか、勿体ねえぞ？ それにさ、ほら、元々ひきこもりだった俺だって今はこの世界で楽しんでるんだし」

「……一国の王子だから、嫌なのだ」

ジェームズは急に表情を暗くしてぽつりと言う。はあ………これだから金持ちのぼんぼんは。俺ん家見たことないから言えるんだな。普通のサラリーマンだぞ？

「あのなあ、普通の平民よりずっと良いと思うけど。だって………」

俺が話していると、急にがちゃんという音がした。驚いてドアの方を向くと、持っていた花瓶を落としているエレナ。

「あ、エレナ。………どうした？ 下凄い惨状だぞ？」

「こ、コウキが………正論っぽいのを言ってる………」

………おいおいおい、酷くないか？ 俺はいつも正論しか言わないぞ。

俺は心の中で突っ込んだ。

「………エレナ、それ、酷い」

「あ、ご、ごめんなさい。つい、驚いちゃって………」

苦笑を浮かべながら謝るエレナ。うん、可愛いから許す。

「それよりさ、国王様どうなの？ 説得出来そう？」

俺の言葉に、エレナは表情を曇らせた。

「………いいえ。全然話を聞いてくださらないの。何を言っても『あいつは死んだんだ。シエリーに息子などいない』としか言わない………やっぱり、だめなのかしら………」

エレナははあっとため息をついて、ジェームズを見た。

「私は、出られなくとも良いぞ。むしろそのほうが良い。ずっと私は城の中で暮らすんだ」

「ジエームズ……」

エレナはジエームズの前にしゃがみ、視線を合わせる。

「あのね、城の中にずっといるなんて、つまらないわよ。いつかは、絶対出たくなるわ」

エレナの言葉に、ジエームズはむくれた。そして俺に視線を移す。……て、え、俺？俺なんも言えねえよ？

でも、ジエームズは思いもよらない言葉を発した。

「じゃあ、コウキのいた世界に行きたい」

s t o r y 3 5 . . . I t g o t i n t e r e s t e d i n t h e

すいません、短めです。そして、この章は次話で終わります。  
この「中二病な俺の異世界日記」も、残すところ2章ほど。最後  
までお付き合い頂けると嬉しいです。

……そして、図々しいですが感想とか評価とか貰えると更新スピー  
ド上がるかも)ry。

……本当に図々しくてすいません(汗)。

「……え、ジエームズ!？」

エレナは目を丸くしてジエームズを見つめた。そりゃそうだよな、俺だって驚いてるもん。

「そうだ、言葉にしたらもつと行きたくなってきた。

エレナ姉様とコウキは、翔麗国へ呪術師に会いに行くのだろう？  
私も行く!!！」

エレナが『なんで話したの』という視線で見ているのが分かる。  
うう……口が滑ったんだもん。

「決めたぞ、私は絶対に“にほん”へ行くんだ!!！」

ジエームズは瞳をきらきらさせて言う。エレナは困ったように視線を彷徨わせた。

「なあ……ちび、だからな？ お前はずっとこの国で……」

「なぜだ。私はいない存在なのだから、そのままどこに行っても良いだろう。エレナ姉様、父様に話してほしい」

ジエームズはエレナを見つめる。エレナは視線を泳がせたが、はあーっと息を吐いた。

……どうすんの。俺、翔麗国までずっとこのちびといっしょとか嫌だぞ。

なのにエレナは、

「……お父様に、話してみるわ」

と、ジエームズに微笑む。えええーっ!! ちよ、待ってよ、やめてよ、俺まだまだちびと関わらなきゃならないの!?

\*\*\*\*\*

「コウキ!! やったぞ!! 今、エレナ姉様が伝えてくれたんだ!」

数日後、俺がジエームズの部屋に行くと満面の笑みで飛び付かれた。なんか……嫌な予感。

「私が、翔麗国へ行き呪術師に会っても良いと。世界を渡っても良いと!」

……予想的中。翔麗国でもこんなちびと関わらなきゃなんないのか……。

俺の心の声など全然聞こえないジエームズは、珍しく満面の笑みを浮かべている。

そして、その後ろには微笑んで立っているエレナ。

「エレナ……よく、国王様許可してくれたな……」

俺の言葉に、エレナは少し顔を曇らせた。

「そうね……でも、念を押されたわ。『船に乗せる時、国民にジ

エームズの姿を見せるな』と。ジェームズの存在を教えていいのは、船乗りと兵士だけ。お父様は……」

段々声が小さくなる。たぶん、国王は『厄介払いが出来た』とでも思ってるんだろうな。

エレナもそう思ったのか、その先を続けない。……やばい、シリアスな雰囲気だよ、俺のキャラじゃねえ!!

「な、なあ、ところでさ、ルイスから連絡は来たの？」

俺は慌てて話題を変えようと、声のトーンを明るくした。……ルイスの話題で声を明るくはしづらいけど。

「ええ、来たわ。お母様は、元の世界へ戻るみたい。ちゃんとフェユール候にも話したそうよ」

「……ルイスは？」

「ルイスはまだ分からないって。……まだ、考えてるみたい」

エレナは少し寂しげに言う。くう……まだ分かんないのか。ここは潔く帰ってもらいたい。

俺がそんなことを考えているとは露知らず、エレナは顔を上げて言う。

「でも、ルイスの答えは出たし、ジェームズのことも決まったわ。コウキ、明後日には出発よ」

\*\*\*\*\*

俺は出発の前の晩、シェリーに呼ばれた。  
リリアについてシェリーの部屋へ行くと、にっこりとほほ笑んでいる姿。

「コウキさん……ありがとうございます」

シェリーは俺を見た途端、そう言って頭を下げた。

「えっ、ちよ、シェリー様!？」

俺はおろおろとシェリーを見る。なんか、王族に頭下げられてるよ。俺ちよっと、凄くね？

「貴方が異界の話をしてくださってから、ジェームズは嬉しそうに語るんです。そして何度も、『行きたい』と言っていました。

だから……あの子の望むようになって、本当に良かった。コウキさんの話のおかげで、最近ジェームズは良く笑顔を見せてくれるんです」

シェリーは微笑みながら語る。まさに“女神の微笑み”だ。  
でも、一つ疑問がある。そんなにジェームズのが好きなら、

「……あの、シェリー様は、ジェームズが城からいなくなっ  
て寂しくないんですか？」

俺の問いに、シェリーは少し寂しげな顔をした。うわ……これ、  
訊ねちゃいけなかったパターン？

「もちろん、寂しいです。でも……ジェームズが幸せだとい  
うなら、それにも耐えられます。」

私の知らない世界で、知らない場所で、知らない人々の中にジェームズがいても、あの子が望んだんです。幸せでないはずがありません。

ですから、私は笑顔で送り出します」

シェリーは寂しげに、でも笑顔で語る。…… すごい、親の鏡だな。

「…… コウキさん、旅立つ前に、一つ、聞いてほしい話があるのです」

急に深刻そうになったシェリーの声に、俺は首を傾げた。

「ジェームズがなぜ、城の外に出たがらないのか。王子でいることを嫌がるのか、お話ししようと思います。あくまで、私の憶測なのですが」

「…… なんでですか？」

シェリーは暖炉を見つめて、口を開いた。

「簡単に言えば、“王子だから”です。

数年前、ジェームズが7歳の時に、ホロンの王妃と、王女がこの城へ訪れました」

「…… ホロン？ 確か、この国と敵対してるんじゃない……」

俺の問いに、シェリーはこくりと頷いた。

「ええ、今は。でも、その時はまだ友好関係にあったのです。建国記念のパーティに訪れていました。

その時、ホロンの王女…… フィナ王女と、ジェームズは出逢ったのです。

二人は、とても気が合いました。王女がこの城に滞在してる間、ずっといっしょにいました。私が見ていても微笑ましいほどに、仲が良かったのです。

二人の間にあったのは、“愛”ではありません。まだお互いに7歳でしたから。でも、とても強い友情で結ばれていました。ただ……二人が成長すれば、それが恋に発展するのは容易な想像でした。

……ホロンは、小さな国です。土地も痩せていて、この国にとって欲しい国ではありません。唯一の魅力といえば、魔術師のレベルが高い、ということだけ。でも、この国にもレベルの高い魔術師はいっぱいいるので、ホロンは魅力的な国ではありませんでした。婚約したとしても、あまり価値はないのです。

ですから、陛下はこの二人の関係をあまり良く思っていないませんでした。

もっと、利益ある国の王女と、思っていたのですね。魔力面から見ても、王位を継ぐのはジェームズでないということは明らかでしたから。

ですから……フィナ王女達の帰った後、陛下はホロンを攻めました。友好関係にあったというのに」

シェリーは苦々しげに言う。フィナ王女かあ……王子の恋も大変だな。

「そして、ホロンは敗戦しました。植民地にはしなかったのですが、壊滅的です。

まだ、復興は終わってないし、繰り返し戦をするので、復興の望みはありません。

でも、これだけが原因じゃないんです。……戦場でフィナ王女が死んだと、情報が入ったのです。ジェームズは、その話を聞いていました。

……それ以来です。ジェームズが出なくなったのは」

「そうですか。……大丈夫です、日本は恋愛にルールなんて無い  
ですし」

シエリーは俺の言葉に、少し涙目でにっこり笑った。

「そうですね。……やっと、あの子も幸せになれるんですね。

……コウキさん、どうか、ジエームズを頼みます。外すら初めて  
なのに、ましてや外国。不安でないはずがないのです。船ではどう  
か、ジエームズの相手をしてやってください」

シエリーは俺の手を握って、見つめてくる。うるうるな瞳に見つ  
められ、俺はこくこく頷いた。

「もちろんです。任せてください」

次はやっと、翔麗国に向けて旅立ちます。

ラストスパートツ！！ もう少しお付き合い頂ければ嬉しいです。

がやがやとつるさい王都の大通りを、俺達は隊列を組んで歩いて  
いた。

王女が海を越えた遠い翔麗国まで旅をするのは、やはり一大行事らしい。一番前に、白馬に乗ったルイス。そして、隣に茶色い馬に乗った俺。ルイスのお母さんはルイスのすぐ後ろで、灰色の馬に乗っている。今日初めて見たんだけど、アメリカ人っぽい感じで、ルイスの金髪は母親譲りらしい。まだ45歳で、馬には全然乗れている。

そして俺の横には、茶色い馬に乗った珠洲ちゃん。

その後ろにカーテン付きの……輿って言うのかな、そんなのに乗ってる。

その後ろには、ずらっと並ぶ兵士達。30人くらいはいるだろう。みんな馬に乗ってるから、ちょっととしたパレードみたいな感じ。

その一行は、どんどん港へ馬を歩めていく。

「エレナ様ーっ」「旅のご無事をお祈りします」「いつてらっしやいませっ!!」

そんな声が聞こえるのが、エレナの人望の厚さを物語っている。

……もつとも、

「あいつ、誰だ?」「あの黒髪の少年」「知らんなあ、誰だろう?」「へなちよこっばいな」「エレナ様はなぜあんな者を同行させるんだ?」

そんな声が聞こえるのは、たぶん気のせいだろう。

あ、そうそう、ジームズはエレナの後ろの輿に乗っている。国民には、荷物が入っているとしか思われないうらう。

そんなこんなで、俺達は港についた。

小さな船がたくさん浮かんでいて、港の正面に、大きな船が一艘ある。他のどの船と比べても綺麗で、色や装飾も細かく、堂々としていた。たぶん、あれが俺達の乗る船だろう。……さすが、王族の船だな。

「あれだ、今から荷物を詰め込む」

丁度、ルイスが船を指差して言う。一斉に兵士が動き出した。ジームズの乗った輿も、違和感が無いように船内へ運び込まれる。

「ふう……長い船旅の幕開けね」

エレナが腰から出た途端、船を見上げて呟いた。そして民衆からの歓声に、にっこりと笑い返しながら手を振って答える。

適度に歓声に答えると、エレナは船へ入った。俺達も後に続く。甲板に出ると、下にたくさんの方々の姿。船が沈没する映画のワンシーンみたいだ。

「エレナ様ーっ、お気をつけて!!」「いつてらっしやいーっ!」

民衆に見送られて、船は大海原へ漕ぎだした。やばい……わくわくする。やっぱり男の浪漫だよな。

俺は船主に立つと、びしっと海を指差した。そして、こっぴど叫ぶ。

「いざ、地平線の彼方へ!!」

決まったあああ!! もう、イタイなんて言わせねえ……って、

ん？　なんでエレナが俺を不審な目で見てるんだ？　今の、完璧決まったんだけどな。

「コウキ……」

エレナは言い辛そうに口を開く。

「お医者様には、見て貰った？」

……え、ちよつと待つてよ、決まったでしょ？　今の決まったじやん。普通『ひゅーっ、かっこいい』ってなるんじゃねえの？  
医者に行けって、それ辛いつすよお嬢さん。

「……あ、やべえ、軽く頭ん中おかしくなってる……」

俺は自分の頭をぼんぼん叩いて呟く。『医者に行け』は予想以上にダメージが大きかったようだ。

そしてしまいには、珠洲ちゃんのこの一言。

「もともとでしょ？」

ねえ珠洲ちゃん、前からそんなに酷かったっけ！？

\*\*\*\*\*

「さあ、もう陸地は見えなくなった。全員位置に付け！！　副船長、方角は合っているか？」

ルイスが甲板に立って指令を出している。副船長と言われた男は、

「はい!!! このまま東へ一直線です、フィユール様!!!」

と答えた。ルイスはこくつと頷く。そしてエレナに向き直った。

「エレナ様、船旅は長いです。まだ昼間ですが、お休みになられては？」

「もう？ 私は平気よ。船旅は好きだもの。それより、ジエームズを甲板に呼びましょう」

エレナの言葉に、ルイスはジエームズを探しに行った。……嘘、さっそくあのちび？

俺、苦手なんですけど……。なのに、早速聞こえてくるジエームズの声。

「これが海か!! 広いのだな。あの彼方に、翔麗国はあるのか？ ルイス」

「ええ、この海の数百キロ先に、翔麗国はあります」

ジエームズは瞳を輝かせて、甲板を走っている。これだけみれば、無邪気な子供なんだけどなあ……。

「あ、エレナ姉様!!! 珠洲さん、コウキ!!!」

……ちょっと待てい!!! なんで俺だけ呼び捨て!? 今更ながら、なんで俺だけ呼び捨てなんだ!!!

「ジエームズ、船は楽しい?」

駆け寄って来たジェームズに微笑みかけながら、エレナは訊ねる。

「ああ、楽しい。城はつまらなかったが、海はたのしいな！」

「ええ、私も海は大好きよ。ほら、ジェームズ、あそこにイルカがいるわ」

甲板上で、きゃっきやと騒いでるエレナとジェームズ。あの……、エレナ、俺の存在忘れてない？

「……貴様、その変な目でエレナ様を見るな」

……気分はどん底MAXになった。なーんで、ここで出てくるかな。

「ルイス、お前なんで俺なんかに構ってる暇あんだよ、働けよ」

「お前もな！！ ほら、ジェームズ様の荷物を整理しろ」

ルイスはびしつと船室を指差す。げ……俺がジェームズの荷物を整理？ 嫌だよ、面倒くせえ。

俺が反論しようと口を開くと……、

「あッ、あれは何だ！？ 商船！？」

兵士の裏返った声が邪魔をした。ルイスと俺は、同時にそちらを向く。

「何があつた！」

ルイスがつかつかと兵士に近寄る。兵士は震える手でルイスに望遠鏡を渡しながら言う。

「向こうに……我が国の商船らしきものがあるのですが……船に襲われているらしく……ッ」

「襲われている商船？ 海賊か？」

ルイスはそう訊ねながら、望遠鏡を目に当てる。俺にもやっと見えてきた。小さな船だ。

けっこうぼろぼろで、今にも沈没するだろう。……って、やばくね？

「いえ、海賊では……おそらく、あれは……」

「あの旗は……ホロンの軍艦ッ!？」

ルイスが珍しく、裏返った声を出した。エレナも眉をひそめて船を見る。

「本当……あれはホロンね。なぜ、フェルトシアの船を……？  
また、戦を仕掛けるつもりかしら……？」

エレナが船を見つめて呟く。そして振り向くと、

「早く……! 面舵いっばい……! あの船を助けるのよ……!」

と、船員に怒鳴った。船は超スピードで商船の元へ向かう。ホロンの軍艦がこの船に気付いた。

5艘はいる。……え、やばくね？ この船一艘だし。

「……だ、……撃て……」

軍艦の船長っぽい奴が叫んでいる。大砲が撃たれた。船が大きく

揺れる。

「なッ、何だ!?!」

ジェームズがパニックを起こしている。そういえば、戦場にきたことなんてないんだよな。

「ジェームズ!! 早く、船室へ!! 良いと言われるまで出てはだめよ!!!」

エレナの言葉にジェームズは頷いて、慌てて船室へ引っ込んだ。

「船員皆、戦闘態勢!! でも、商船の人を助けるのを最優先事項にして!!!」

エレナの言葉に、船員は一斉に位置についた。

「おい、貴様も早く戦え!! 珠洲さんはもう魔法を発動しているぞ!」

ルイスの言葉に、俺は慌てて珠洲ちゃんを見る。珠洲ちゃんは炎を操って、兵士を数人片づけていた。行動早すぎだろ!!

「じゃ、じゃあ俺も……ッ!!!」

俺は慌てて杖を構える。攻撃魔法は、城で珠洲ちゃんに学んだ。珠洲ちゃんにならって巨大な炎を時き起こそうとした途端……、

「っ……わッ!!!」

船が大きく揺れた。バランスを崩し、船から落ちそうになる。やばい……俺、泳げねえよ!!

「わ、わわわわあッ!!」

しかし俺の思いも虚しく、どんどん悪くなる体制。

「貴様ツ!?!」

ルイスが驚いて俺を見た。おい、ここでも“貴様”かよッ!!  
心の中でそう突っ込んだ俺は、そのまま海へ落下した。

story37 . . . To the ocean . (後書き)

やっと、翔麗国へ旅立った……ッ!!

はつきり言っちゃうと、ジエームズ編終わって良かり。

……いや、作者的に、やっぱり旅ですよ、はい。異世界ものは、やっぱりアウトドアじゃないと。

……作者が今、ONE PIECEにはまってるってのもあると  
思いますが(笑)。

やばい……俺、このまま溺れ死ぬのかな……。かつこよくねえな。水に揉まれながら、ぼーっとそんなことを考えた。そしてふと、まだ杖を握りしめたままだということに気付いた。

……一か八か……。俺は杖を強く握りしめ、水の中で勢いよく振る。そして、水が口に入るのも構わず、

「……エル……ッ!!」

と叫んだ。変化は……起きない。やっぱり、だめなのか……。そう諦めかけた瞬間、眩しいほどに青く輝く魔法陣が現れた。

「主様ッ!!」

エルが勢いよく飛び出し、俺を背中に乗せる。次の瞬間には、海の上にいる。

「……ッ、ごほ……え、え、る……けほけほ、……エルッ……!!」

俺はエルの首にしがみついて、咳き込んだ。

「主様、大丈夫ですか？」

「あ、あ……げほ、良か……ったあ……」

俺はエルの首にしがみついて、下を見た。ルイスが驚いて俺とエルを見ている。……いや、ルイスだけじゃない。ほとんどの人が、

突然現れた竜を見て驚いている。

グリフォンのオズウィルに乗ったエレナが、俺の隣に飛んできた。

「コウキ、良かった、生きてたのね！！ 私、てっきり溺れてしまったかと……ッ」

「ぎりでエルを呼びだしたから、セーフ」

俺はまだ少しせいぜいしながら答える。

「そ、それよりさ、今、どんな状況？」

俺の問いに、エレナは深刻そうな顔をした。

「相手の魔術師は、かなりの腕よ。しかも数十人いるから、この数じゃ手強い。

私とコウキは空から行くわよ。商船の方は、ルイスと珠洲さんに任せてるから」

「了解っ」

俺はそう返事すると、杖を握りしめた。

「エル、出来るだけ襲ってくれ。火を吐いても構わない」  
「御意」

エルはそう短く答えると、急降下した。……って、え、ちょー！！俺落ちる！！ 落ちるよエル！！

「なッ……竜がッ！！」「に、逃げる！」「ぎゃああッ」「食われるー！！」「こ、殺せー！！ 殺せえッ！！」

ホロンの兵士達がそう叫んでいる。が、もちろん止まるはずも無いし、止まるうとも思わない。

エルは火を吹きながら、船に襲いかかった。相手の魔術師が急いで火を消火しようとするが、竜の火はそう簡単には消えない。

「あッ、あいつだ!! 竜を操ってる少年だ!!」

誰かがそう叫んで、一斉に俺に注意が向く。……えッ、ちょ、ピ  
ンチなんだけど!!

「ちょ、ちょ、来るなあッ!!」

俺は慌てて杖を振る。何の魔法を使えばいいかなんて、考えもしなかった。でも、

「……あれ？」

杖から風が発生し、兵士たちを斬り裂いた。ばたばたと倒れていく兵士達。

「や、やった。何か分かんないけどやった!!」

俺は一旦落ち付くと、今度はちゃんと呪文を唱える。珠洲ちゃんに教えてもらったものだが、珠洲ちゃんはまだ出来ないと言っていた。だから、言葉で習っただけなんだけど……。

「大いなる炎の神 スヴァローグよ 我に力を与えたまえ 炎の竜巻よ 我に反するものを焼き尽くせ!!」

ぶんと杖を振る。巨大な炎の竜巻が現れ、軍艦を飲み込んだ。

エルは素早く上空へ飛ぶ。

てか……良かった……噛まずに言えた……。

「お見事です、主様」

エルが軍艦を見て言う。軍艦はもう沈んでいた。炎はまだ消えずに、次の軍艦へと襲いかかる。

「よし、一丁上がり」

俺はにっと笑ってガッツポーズをする。やべえ、超かっけえ。

「コウキー！！ 貴方、炎の大魔法を使えたのね！」

エレナが驚いたように俺を見る。

「お見事よ。これで残りは3艦だわ」

「おっ、誰か1艦沈めたのか」

俺の言葉に、エレナはにこっと笑った。

「私よ。それに、商船の人を助けだしてルイス達も戦い始めたから、もう1艦沈みそう」

エレナの言葉にきよろきよろ見回すと、確かに1艦、今にも沈みそうな軍艦があった。

「お、すげえ。俺も行こっ！ エル、あそこまで飛んでくれ」

エルは俺の言葉に頷いて、びゅっつと急加速する。

下の方から矢が打たれるけど、エルの鱗で全てが阻まれた。竜ってこええ……。

「矢が効かないッ!? ま、魔術師部隊! 竜とグリフォンを集中的にやれえ!」

隊長みたいな人がそう怒鳴る。

「コウキ!! ホロンの魔術師部隊は馬鹿には出来ない。気をつけて!」

エレナがオズウィルの上から叫ぶ。了解、と俺は叫んだ。

「さて、じゃあ魔術師部隊に攻撃……」

「エレナ様に攻撃させるかあッ!」

空まで聞こえてくる怒鳴り声は、もちろんルイス。……やっぱり強すぎだろ、あいつ。あつという間に敵を倒しちゃってるよ。てか……、

「お前がそんなに敵倒しちゃ俺の出番ないだろがあッ!」

俺はエルの上から叫ぶと、すぐ下の魔術師に向かって魔法を放った。白いビームみたいのが出て……、って、

「くッ……」

魔術師はバリアを張って俺の攻撃を阻む。

「うわ、めんどくせえ!! 素直に攻撃受けろや!」

喚きながら攻撃する俺。でも、魔術師もただ防いでいるだけではなく……、

「うおッ!？」

攻撃してきた。俺の腕を、氷の槍のようなものが霞める。ぴっとシャツが切れて、血が滲んだ。

「ちよ、地味に痛えよ！ やるならやるでもっと派手に……うお  
いッ!！」

さつきより太い氷の槍を、俺はバリアでぎりぎり防ぐ。  
あんなのもろに食らってたら、風穴開いてたぞ？

「てか、お前が氷なら俺は……」

俺が言葉を言いきるより先に、エルがごおーっと炎を吐いた。  
俺と戦っていた魔術師は、驚愕の表情のまま真っ黒焦げになる。  
……俺の見せ場は？

「エル……うん、良い、良いんだけどさ……あいつ、俺が倒すつ  
もりの……」

俺の悲しげな声に、エルは慌てて、

「もっ、申し訳ありません!! 次からは手出しはしません!!」

と謝った。いや、手出しはして良いよ。てか、うん、手出しして  
もらった方が助かる場合もあるけど!

「エル、あの……適度にしてもらうと嬉しい」

「はい、分かりました」

よし、これでエルのことはokと……って、うおッ!?

エルが急旋回した。胃袋が持ちあがるような感覚。

「え、エルッ!？」

「すみません。急に魔術師が炎の柱のようなものを起こしたので

エルの言葉に元いた場所へ目を向けると、確かに火柱が上がっている。

でも、赤い火柱じゃなく、青い火柱。……完全燃焼じゃねえかよ

!! 超怖え。普通はここは赤だろ。赤い火柱だろ。

「……はぁーっ……」

俺は息を吐いて、落ち着きを取り戻す。じつと魔術師を睨んで、

「偉大なる氷の女神 ニブルヘイムよ 我に力を与えたまえ 氷の霧よ 我に反する者を斬り裂け」

呪文を唱え、ぶんつと杖を振る。白く鋭い霧のようなものが、びゅうつと魔術師を吹き貫けた。

後には、いろんな所が血だらけで、ぼろぼろになった魔術師。がくと膝をつくと、血を吐いて倒れた。

「お見事。その魔術師で終了よ」

エレナがいつの間にか俺の隣に来て言った。

「え、もう?」

きよろきよろと辺りを見回すと、確かにもう敵は残っていない。

「そう。魔術師も今回は少なかったみたい。船に戻りましょう」

エレナの言葉に俺は頷いた。

\*\*\*\*\*

「この人達が、商船に乗り込んでいた者達です」

ルイスがずらっと並んだ十数人の人々を見て言った。

甲板に並んでいるその人達は、不安げにきよろきよろしている。

ちなみに、エルはもう還した。あんなでかい竜、この船に乗ったら沈んじゃうし。

「そう……。やっぱり、フェルトシアの商人ね。この船には救命ボートが3、4艘ついているわ。」

まだ本土からそんなに離れていないから、それに乗って帰りなさい。私が連絡を……」

エレナは突然、言葉を切った。目を見開いて、一人の男を見つめている。

他の人々の後ろに隠れて、姿を見せないようにしていた男。

「……エレナ?」「エレナ様?」「エレナ様、どうなさいました

「？」

俺達の問いかけにも答えない。

そして、数十秒の沈黙の後、擦れた声が、その唇から洩れた。

「……………レオ……………ン……………」

s t o r y 3 8 . . . A b a t t l e o n b o a r d . (後書き)

久しぶりに登場、エルです。

……なんか最近、お気に入りが減ったり増えたり。増えたらそのままできてくれたら嬉しいな(笑)。

s t o r y 3 9 . . . R e u n i o n W i t h t h o s e w h o l o v e

なんか……はい、スランプです。

「レオン……なの……?」

エレナの唇から洩れる、震えている声。レオンと言われた少年は何も答えない。

てか、え、嘘、レオン? ロランと三角関係になったっていつ?

「レオンよね? ねえ、そうでしょう……ッ?」

エレナはよろよろとレオンらしき少年に近づく、肩を揺さぶる。それでも、少年は何も言わない。

エレナは力無く腕を落とした。

「……そう、よね。ごめんなさい……」

そう呟くと、少年から離れる。少年がちらつとエレナを見た気がした。

エレナはふうーっと深呼吸をすると、さっきと同じ調子で言い始めた。

「今から、救命ボートを出すわ。もう少し、甲板で待っていて。それに、寒いから暖かい飲み物が欲しいでしょう」

エレナはコックを呼ぶと、暖かい飲み物を配るように言った。そして、自分の船室へ帰って行く。

ルイスが慌てたようにエレナについて行く。俺は、さっきの少年の方へ向かった。

「…………なあ」

俺が話しかけると、少年はびっくりしたように俺を見た。

「お前、レオンなのか？ 前にエレナと付き合ってたっていう」

少年はきよろきよろと辺りを見回し、エレナがいないことを確認するとこくつと頷いた。

「えつとさ…………俺的には、お前とエレナはくつついて欲しくないんだけど…………まあ、気になることがあるんだけどさ…………お前って、まだエレナのこと好き？」

俺の問いに、レオンは俺をじっと見つめる。

「なんで、そんなこと君に言わなきゃいけないんだよ」

少しむくれて言うレオン。てか、たぶん俺レオンより年上だけど、君呼び？

「俺、コウキ。君じゃない」

「…………なんで、コウキにそんなこと言わなきゃいけないんだよ」「何でも何も。な、エレナには言わないから！」

レオンはしばらく黙っていたが、躊躇いがちに口を開いた。

「そりゃ…………好きさ。嫌いになんか、なれるはずない。でも…………もう、だめなんだ」

絞り出すような声で、レオンは言う。  
何がだめ？ エレナに好かれてるなんて、羨ましすぎる立場だけ  
どな。

「エレナに近づいちゃ、だめなんだよ。俺のせいで、エレナの許  
婚の人が死んだ。」

そのせいで、エレナは凄く自分を責めたに決まってる。そんな子  
なんだ。だから、僕がエレナと再会しちゃ、またエレナは傷つく。  
また自分を責める。だから、僕はエレナに会っちゃだめなんだ」

レオンは俯いて、涙を飲み込んだ……ように見えた。

「えっと……」

俺はなんて言えば良いか躊躇う。俺的にはエレナとくつついて欲  
しくないけど、でもなんかここまで来たらくつつかせるのが年上の  
役目っぽいし……。

俺がどうすれば良いか躊躇っていると、

「おい、レオン」

ルイスが、レオンの首根っこを掴んで引っ張り上げた。  
レオンは驚いてルイスを見上げている。

「とりあえず、エレナ様に会って来い」  
「嫌だ」

びつくりしながらも、ルイスの言葉に即答するレオン。

「会って来い。エレナ様はお前に会いたがってるんだ」

「エレナは僕と会っても、良いことなんてないだろ！ ルイスさんはエレナの側近なんですよ、僕と会っても……」

「ぐだぐだ言うな。あんな別れ方など、許さん。エレナ様と、ちやんと話せ」

ルイスは強引に、レオンをエレナの船室に放り込む。

「……乱暴だな」

「ふん……エレナ様の為だ」

俺の言葉に、ルイスはじろりと俺を睨んだ。

\*\*\*\*\*

数十分後、エレナとレオンは二人揃って船室から出てきた。

……エレナは、頬を真っ赤に染めて。レオンは、少し照れくさそうにして。つまり……、

「上手くいったのかよ畜生ーっ！！」

俺は大海原に向かって叫ぶ。こんなに上手くいっているのかよ！

！ご都合主義だろ！！ 頭大丈夫かよ作者ッ！！

「黙れ五月蠅い目障りだ」

……俺はじろりと声の主を見る。ルイスが俺の横で海を見ながら手すりによっかかっていた。

「なんだよ、その暴言の嵐。もしかして今、機嫌悪い？ そりゃそうだよなあ、エレナが嫁入りしちまうんだもんなあ」

「嫁入りではない。レオンとエレナ様の仲が良いだけで……」

「はいはい、お前も可哀そうにな」

俺は適当にあしらう。エレナが嫁入りしようがしまいが関係ない。今大切なのは、エレナが俺じゃない男の方にいつちゃったっていう事実だ。

「だから、私は可愛そうではないと……ッ！ ……それに、エレナ様とレオンが結ばれる可能性は低い……」

ルイスは後半を、少し低い声で言った。ん？ 結ばれる可能性は低い？

「なんで？ あ、やっぱり国王様……？」

「ああ。国王陛下は国の為を思っていらっしゃる。レオンはただの平民。あの事件があつてロラン様が亡くなられても、その想いは変わらな……」

「る、ルイス様ッ！！」

ルイスの話を、兵士の裏返った声が遮る。でも、今回はさっきの軍艦を見つけた時よりもずっとびっくりした声だった。

「何事だ」

「こ、こちらの文を……ッ」

兵士は震える手で、ルイスに巻いた羊皮紙を渡す。ルイスは怪訝そうな目でそれを受け取ると、読み始める。だんだん、ルイスの表情は険しくなっていた。

え、何、何が書いてあるの。超気になる。

「な、なあ、どんな内容が？」

ルイスは少し俺を見て考えると、躊躇いがちに俺に紙を渡した。

「海でホロンの軍艦と戦ったことを聞いた。

言いにくいことだが、その真犯人を突き止めた。

ソフィアだ。ホロンの兵に、こっそりと命を下していたらしい。エレナの船を襲うようにと。

真、許せぬ奴だ。ソフィアは追放の身となる。

尚、この文を見ても国に戻るうとはせず、翔麗国へ行くように。決して、帰って来てはならぬ。

エレナはジェームズもソフィアもいなくなった今、唯一の王位継承者だ。

身体を大事にするように。

エルトシア

」

アルノルト・フ

俺は読み終わると、目を丸くしてルイスを見た。

「フェルトシアの船を襲ったのが……ソフィア？」

俺の問いに、ルイスは頷いた。……いや、そこまで不思議ではないけど。

前に確か「あの子さえいなければ……」って呟いてたし。でも……まさか。こんなにありふれた展開って、ありえる？  
でも、それ以上に驚いたのが、

「お姉様がつて……どっいっつと？」

すぐ近くに、少し震えているエレナがいたことだった。

まさかのレオンくん登場です。

コウキの恋愛フラグは完璧に消えました。

コウキごめんね。でもね、君は女子の私から見て、好きになるよ  
うな男子じゃない。だから、……ね。

「エレナ様……ッ!！」

ルイスが目を見開いてエレナを見つめる。

エレナはルイスに詰め寄った。

「ねえ、どういうこと？ お姉様がホロンの軍艦を……ッ!？」

「……はい」

ルイスはゆっくり頷く。エレナの瞳が潤んだ。

「お姉様はやはり……本気で、私を……!！」

震える声でいうエレナ。俺は、その肩を抱こうと……

したのに、レオンが先にエレナの肩を抱いた。エレナはレオンの胸に顔を埋める。

「お姉様が……私を、嫌って……るとは、知っていた、けど……ッ、まさか……ここまで、ホロンの兵を……使ってまで……私を、殺そうと、するなんて……思わなかった、わ……ッ」

エレナはしゃっくりあげながら、レオンの胸でむせび泣く。レオンはただ無言で、エレナの背中をさすっていた。

「……エレナ様、如何いたしますか。国王陛下は、このまま翔麗国へ行くようにと言っております。」

一度戻ったら、間に会いませんし……」

ルイスは言いにくそうに訊ねる。エレナはレオンから離れると、涙の溜まった赤い目で言った。

「このまま、進みましょう。……お姉様も、私には会いたくないでしょう」

ルイスは目を伏せ、了解しましたと答えた。

\*\*\*\*\*

「翔麗国が見えたぞーっ!!」

見張りの兵が大声で叫んだ。あつという間に、船の上の数日間とは終わった。

最初の方は時折悲しげな瞳をしていたエレナも、昨日辺りになつて復活してきた。……やっぱり、レオンの存在が大きいらしい。

「見えたか。皆、準備を!!」

「はい!!」

ルイスの声に、兵は一斉に答える。

「翔麗国かあ……どんな国かな」

俺は甲板から身を乗り出し、どんどん近づいてくる陸を見つめた。

「おい、貴様、翔麗国には姫君と王子様の結婚式で来ているのだ。

しかも、お前は招かれていない身。おとなしくしていないと……分かつているな？」

剣の柄に手を置くルイスを見て、俺はがくがく頷く。ルイスが怖いんじゃないかって、フェルトシアに返されるかもしれないっていう恐怖。

「もう、ついてそうそうそんなこと……。でも、コウキ、相手は王族の方よ。」

くれぐれもご無礼の無いようにね？」

エレナは苦笑して、俺とルイスの間に入る。なんかもう、見慣れた光景となりつつあるな。

「フェルトシア王国より、エレナ・フェルトシア王女陛下のご到着！！」

翔麗国の衛兵らしき人が、大声で叫ぶ。船は錨を下ろし、無事到着した。

「エレナ王女陛下、翔麗国へようこそいらっしゃいました。ご到着を心よりお待ちしておりますおりましたぞ」

髭を生やしたおっさんが、エレナに深すぎるお辞儀を言う。服装は、古代中国みたいな。

うん、イメージ通り。てことは、お姫様はさらさら黒髪ロングの美人かな。

「ありがとうございます。お招きを心より感謝致しますわ、ホウ峯大  
臣」

エレナは膝を折って、天使の微笑みをおっさん……峯大臣に返した。

へえ……大臣なのか、あのおっさん。確かに大臣顔だな、うん。

「いえいえ、こちらこそ来て頂けるとは思ってもみない幸せでございます。

あ、申し訳ありません。自己紹介が遅れました。私はこの翔麗国わたくしの右大臣、峯・西序サイジヨと申します」

峯大臣は俺達に向き直って、お辞儀をする。

俺達も頭を下げた。

「では、宮廷へ案内させて頂きます。こちらの牛車にお乗りください」

峯大臣に言われ、エレナは一番前の牛車に乗った。二台目に、俺とルイス、珠洲ちゃん、ルイスママが乗る。

他の兵士も全員、数台の牛車に乗り込んだ。

「……なあ、扱いよくな？ 普通、兵士って歩くんじゃねえの？」

俺は牛車の中でルイスに訊ねた。

「フェルトシア王国は強大な勢力を持っているからな。翔麗国としても、是が非でも良い繋がりが欲しいのだろう。他の国では、平兵士は牛車には乗れないだろうな」

ルイスは平然とした顔で言う。そして最後に、

「そんなことくらい自分で考えないか、馬鹿」

と付け足す。……あのなあ。

「お前いつつも一言余計な……」

「コウキ五月蠅い、ルイス様に失礼でしょ」

珠洲ちゃんが思い出したように突っ込む。そういえば、最近珠洲ちゃんのつつこみ受けて無かったな。

「ルイスも、馬鹿だなんて言わないの」

ルイスのお母さんがルイスを嗜める。……あれ、ルイスのお母さんの声聞いたの、初めてだな。

「す、すいません、母上。しかし、こいつが……」

「言い訳しないの。貴方がそんな言葉を使うようになって、私は残念ですよ」

「はい……申し訳ありません……」

しゅんとなるルイス。垂れ下がる尻尾が見えるようだ。ふ、良い気味。

しゅんとなったルイスと、にやにや笑う俺を乗せながら、牛車はどンドン宮廷へ向かっていく。



s t o r y 4 0 . . . & q u o t ; s y o r e i k o k u & q u o t ; a r r i

なんか、突発的……ですよね（汗）。

でも、どう頑張っても船上生活を書けなかった……。

ううう、文才が欲しいです。

「ようこそ、お越しくございました」

ぶっ……！！

俺は、鼻血を吹いて倒れそうになった。何これ、エレナ級の黒髪美人ッ！！

「私は、汀・若葉ワカハと申します」

若葉、と名乗った女の子は、そう言っって頭を下げる。

やべえ……。腰まであるぱっつんヘアの黒髪。やっぱり古代中国のようなさらさらした衣装。ぱっちりとした目、ぷっくりした唇。

……やばいだろ。やばいだろ。やばいだろ。

「私が、汀・青葉アオハです。よくぞお越し下さいました、エレナ陛下、従者の皆さま方」

続いて青葉という王子が自己紹介する。こいつは、若葉と同じ黒髪。……悔しいけど、顔は上だろつ。

……俺には負けるけどな！！

「お招きいただき光栄ですわ、若葉姫、青葉王子。急に人数が増えてしまい、申し訳ありません」

エレナはそういって、ぺこりと頭を下げる。

「いえいえ、数人増えるくらい、なんでもありません。言わつてくれる方が増えてくださって嬉しいくらいです。こちらの方々ですか？」

青葉が俺達を見て訊ねた。

「はい、突然すいません。珠洲、と申します」

珠洲ちゃんはにっこり笑って頭を下げる。俺は慌てて続いた。

「ご、コウキです。よろしくお願いします」

なんだかこつちの世界に来てから、下の名前だけで自己紹介するようになってしまった。まあ、いいけどね。

「珠洲殿、コウキ殿、よくぞいらっしやいました。そして、こちらがルイス殿のお母上ですね……？」

青葉はルイスのお母さんを見た。ルイスのお母さんは頭を下げる。

「ルイスの母、アメリカ・フィユールと申します。突然に、申し訳ありませんでした」

へえ、そういえばルイスのお母さんの名前、アメリカっていうのか。

若葉はアメリカを見て、小さな声で言う。

「貴方は、呪術師に会いたいのだとか」

若葉の言葉に、アメリカは頷いた。

「はい。……元の世界へ、返して頂けたらと思い、この地まで来ました」

アメリカの言葉に、若葉は目を伏せる。

「私達王族も、なかなか呪術師には会えるものではありません。ただ……異界より来たという貴女方なら、あるいは呪術師の興味を引くことが出来るかもしれません。」

明日の結婚式の後、ご案内致しましょう。今宵は宴です。疲れや悩みを忘れ、楽しんでください」

若葉の言葉に、アメリカは微笑んだ。

「ありがとうございます、若葉姫様」

\*\*\*\*\*

「うつわぁ……中国ーっ!!」

「五月蠅い黙れ。チュウゴクとは何だ!」

部屋に入った途端、叫ぶ俺。……と、その俺を殴ってくるルイス。痛えな……てか、お前がなんで俺の部屋にいるんだよっ!!

「お前なんで俺の部屋につ!?!」

「貴様の部屋はどんなものかと思ってな」

ルイスはそう言いながら、部屋をきよきよと見回す。

「やはり、翔麗国は凄いな。客人用の部屋一室で、その富が分かる」

へえ……翔麗国って豊かな国なのか。俺はそう思いながら、部屋を見回した。

畳だ。そして、高級そうな敷布団。所々に細かい装飾がしてある。和やかな部屋だな。

そんなことを考えていると、ノックがした。スライドさせるドア（？）を開けて、女中が入ってくる。

「カミヤ様、フィユール様。宴のご用意が整いました。大広間までご案内致しますので、お着替えくださいませ」

「……着替え？」

きよとんとする俺を見て、ルイスがはあっとため息をつく。そういえば、ルイスはいつの間にか服を着替えている。

「貴様だから、正装など持っていないと思ったわ。

ほら、これにさっさと着換える。とろいと置いていくぞ」

俺は押し付けられた服を見る。けっこ派手めな色合いだ。やっぱり、中世ヨーロッパ風。

俺は慌てて着替える。女中がマツハのスピードで部屋を出て行った。

「……つと、これでいいか？」

「いいだろう。では宴へ行くぞ」

ルイスは俺をちらつと見ると、さつさと部屋を出て行った。俺も慌てて後に続く。

何回曲がったか分からないほど複雑な廊下を通ると、目の前に巨大な扉が現れた。

「皆様は、この先にいらっしゃいます」

女中はそう言って、扉をぎぎぎと開ける。

「いつてらっしゃいませ」

女中にお辞儀され、中に入る。で、でけえ……。

広い大広間には、テーブルがいっぱいあって、その上には色とりどりの食べ物。立食パーティーらしい。

「ルイス、コウキ！」

エレナが俺達を見つけて駆け寄って来た。珠洲ちゃんとアメリカもいつしよだ。

「遅かったわね、どうしたの？」

「申し訳ありません、エレナ様。こいつが部屋に行っていていつまでも正装に着替えないもので」

「顎でしゃくるな顎で！！ 知らねえんだし仕方ねえだろ！」

「コウキ……あなた、本当に迷惑ばかりかけているのね」

「ルイス、人を顎でしゃくるなんて、そんなことをする子に育てた覚えはありませんよ」

ぎゃあぎゃああしている俺達。どれが誰の台詞かは、言わなくても分かるだろう。

「賑やかですね」

そんな俺らに、若葉がくすくす笑いながら近づいてきた。

「楽しくて何よりです」

青葉も笑みを不壁ながら来る。

「あ、若葉様、青葉様……ッ。すみません、大声でいろいろと……」

エレナが慌てて頭を下げる。ルイスが『貴様のせいだぞ』という目で俺を睨んだ。

え、え、ええーっ!? 元はと言えばお前だろ。

「いえ、そんなっ、頭を上げてください、エレナ様っ!! 賑やかで、とても良かったですよ?」

若葉はおろおろとエレナに言う。

「そ、そうですね、お兄様」

「ああ。そうですね、とても良かったですよ? 祝い事なのですから、静かなのは嫌ですし」

青葉はこくこくと頷く。エレナは苦笑しながら頭を上げた。

「……まあ、私は若葉が楽しんでくれるなら、どんなことになっても良いですよ」

きらきら笑顔で、青葉は続ける。若葉はぱあっと顔を輝かせ、

「お兄様っ！」

と抱きついた。……仲のよろしい兄弟なことだ。

「随分仲がよろしいんですね」

エレナは二人の様子を見て微笑んだ。青葉が当たり前と言う顔で、

「ええ。愛しい妹ですから。結婚までするのです、愛しくないわけがないでしょう」

と頷く。うっわぁ……重度のシスコンじゃん、こいつ。

「お兄様は素晴らしいお方。こんな兄をもって幸せですね。今回、国の為にも兄弟で結婚できることを喜んでおりますの」

若葉が青葉に抱きついたまま、満面の笑みで言う。

俺は、頭の仲のメモに書きこんだ。

“ 翔麗国の姫と王子は、重度のブラコン、シスコンである ” と。

書いた文章が溜まって来たので、本日二度目の更新です。

一応、story 46くらいまでは、もう書きあげているのですが。

……でも、どうしよう。明後日、英語の単語再テストと数学の学力テスト。

英単語110個なんて、憶えられるわけないやろーっ!!

ぼーっとしているとキスでもなんでも始めちゃいそうな二人に、俺は無理矢理話しかける。

「なあ、今日って、なんかあったりする？ この宴の他に」

「いえ、今日は特にありませんよ？ この後すぐに国王陛下からの挨拶と、私とお兄様からの挨拶があるので、それが終わったら御自由になさって結構ですわ」

「ふーん……」

俺はぶらぶらと歩きながら、食べ物を取りに行くことにした。やっぱり、あの二人の中に入るのはきつい、うん。

「……あ、餃子！」

俺は見知った食べ物を見つけ、思わず声を上げた。よく見れば、餃子だけではなく肉まんや麻婆豆腐、小籠包など中国料理がたくさんだ。

「うわ……やっぱりこっつて中国だ」

俺はそう呟いて、餃子を口の中に放り込んだ。うん、旨い。

俺が無我夢中で中国料理……じゃない、翔麗国料理をかつこんでいると、

「貴様、そのいじ汚い食べ方をなんとかせんか」

旨い食事を不味くするような、奴の声。

「コウキ、おいしいのは分かるけど……、ここは、王族の方のパ  
ーティよ？ もうちょっと、マナーに気をつけましょう？」

前言撤回。エレナの声で、やっぱり旨くなった。俺は肉まんをこ  
くと飲み込んで、後ろを振り向く。

あからさまに嫌な顔をしているルイスと、苦笑しているエレナ。

「ん、分かった。でも、超うめえよこれ。中国料理……じゃない、  
翔麗国料理がこんなに旨いなんて知らなかった」

「中国？」

「うわあっ！！」

突然、俺の横からアメリカが現れた。やべえ……空気薄すぎだろ、  
おい。

「やっぱり、あなたはjapaneseなのね」

アメリカは俺の手を取って、にっこりとする。久しぶりに同じ世  
界の人と会えたから嬉しいのかな。

でも……じゃ、ジャパニーズって……。もの凄くそこだけ発音良  
いし……。

そりゃ、意味は分かる。意味は分かるよ！？

だけど……まあ、確かに日本は英語でジャパンだけどさ。

「私は、アメリカ人なのよ。今まで話す機会がなかなかなかった  
けど、話したいなと思っていて。

こちらではアメリカ・フィユールと名乗っているけど、向こうの  
世界ではアメリカ・アボットという名前だったのよ。イニシャルだ

と、。おかしいでしょう?」

ころころと笑うアメリカ。意外にも、けっこう喋る人なんだな。

「コウキくん、私がこの世界に来たのは、20年以上前なの。今の世界の様子を、教えてくれないかしら。とても気になってしまつて……」

「でも、俺日本のことしか分かんないですよ?」

しかも、ひきこもってたからニュースなんてあんま見なかったし。でもアメリカは目を輝かせて、

「それでもいいの。japanは、20年前も先進国だったわ。

今でも、それは変わらない?

大きな出来事はあった? そうそう、私、ジョニー・デップが好きなのよ。

彼、まだ有名じゃないんだけど……分かる? あなたの時代……

もう、2000年を超えているでしょう? 彼、有名になってる?」

ちよ、待った待った待った。質問の嵐に、俺の頭ぐちゃぐちゃなんですけどー……。

「ちよ、アメリカさん待って。

えつと……今も日本は先進国だよ。ただ、中国の追い上げが凄いです……」

「中国!? あんなに治安が悪くて、犯罪とか……それが、今はそんなに?」

アメリカは目を丸くして俺を見つめる。

「えっと……前の中国がどんなんかは知らないけど、今は凄いらしいですよ」

「へえ……世界も変わるものね」

「ですね、大きな出来事は……」

俺は考え込みながら頭を掻く。大きな出来事とか知らねえ……。

「あー……そうだ、うん、中二病とかひきこもりが有名になりました」

たぶん、俺の中では。その言葉は、言わないでおいた。別に、嘘じゃない。

そんな中学生が増えてるって、前に僅かに見たニュースでやっていた。

「なあに、それ？ 私の時には、無かった単語ね。でも、ジョニー・デップ。あの人は？」

貴方も知っているような俳優になった？」

……なんか、ここだけ聞いてると普通のアメリカのおばさんに見えてくる。

俺は苦笑しながら、説明した。ジョニー・デップくらい、俺だっ  
て知ってるぜ。

「えっと、彼はけっこう有名ですよ。パイレーツ・オブ・カリビアンとか。」

それ以外は知らないけど。でも、ハリウッド俳優になってます」

「まあ、ハリウッド！？ 凄いわね、成長したのね、ジョニー」

頬をピンクに染めて、そう呟くアメリカ。完全に危ないおばさん

だ。

俺はとりあえず、今のうちにアメリカの傍を離れた。

「あ、コウキ、ちょっと」

いつの間にか俺とアメリカの所から離れていたエレナが、俺を呼んだ。

「もうそろそろ国王陛下の挨拶と、若葉様と青葉様の挨拶が始まるわ。」

いい？ 静かに聞いているのよ。絶対、おかしな行動はしちゃダメ。分かった？ 絶対よ？」

……なんで、俺こんなに念を押されてんだよ！

「大丈夫です、エレナ様。私がちゃんと、コウキのことを見えますわ。杖も持って来ていますし」

珠洲ちゃんがにつこり笑顔でエレナに言う。え、ちょ、杖持つてるってどういうことだよ。

「……あのさ、珠洲ちゃん、魔法で攻撃すんのは……やめようね」？

冷や汗を垂らしながら言う俺に、珠洲ちゃんは悪魔の……天使……いや、やっぱり悪魔の微笑みを浮かべる。

「どづかしらね？ それは、コウキ次第よ」

……。固まっている俺に構わず、国王が壇上に上がった。

黒い髭を生やした、彫りの深い老人だ。

「各国家の皆様、ようこそお越し下さいました」

低い声なのに、静かな大広間によく響く。うう………なんで、国王ってどいつもこいつもこんなに怖いんだろう。

「このたびは、我が息子、汀・青葉と、我が娘、汀・若葉の結婚式です。」

今宵は憂い事を忘れ、心のそこからお寛ぎ下さい」

国王はそれだけ言うと、壇上から下がった。入れ替わりに、青葉と若葉が壇上に上がる。

「皆様、はじめましての方も多いと思います。」

翔麗子第一王子、汀・青葉です。

このたびは、私と愛しい妹、若葉の結婚式に来ていただき、誠にありがとうございます。

気のきいた挨拶は出来ませんが、どうぞ皆さん、楽しんで言ってお下さい」

………うわお、シスコン發揮な挨拶だな。俺がそんな感想を抱いたとは露知らず、続いて若葉が壇上に上がる。

「汀・若葉と申します。どうぞ皆様、お見知り置きを。」

これから、愛しい兄と二人、この翔麗国を支えて行こうと思っております。

今宵は、国と国の争いなど忘れ、どうぞお楽しみください」

若葉は最後ににこっと微笑んで、ブラコンな挨拶を終えた。

「さすが、翔麗国の王子と姫ね。素晴らしい挨拶だわ」

エレナが俺の隣で呟いた。

その後は、時間が早く過ぎた。あつという間にお開きの時間。まあ、腹いっぱい食ったから後悔はねえけど。

「あら、いつの間にか若葉様と青葉様もいなくなってるわね」

エレナがきよろきよろと辺りを見回して呟いた。確かに、二人の姿は無い。

「まあ、よくね？俺、眠いから行くわ……」

俺は欠伸をしつつ、大広間を出た。なんか、重々しいパーティーじやなかったな……。

そんなことを考えつつ歩いていると……ひとつ、大きな問題に気付く。

「迷った……」

迷路のような、翔麗国の宮廷。女中に案内されてここまで来たんだし……分かんねえ。

「と、とりあえず誰か見つけて……」

「……いつて言ってるのよ!!」

……ん？今、近くのドアの中から若葉の声が聞こえた？俺は眉をひそめて、ドアに耳をくつつける。

「……はあ、だから」

やっぱり、若葉の声。助かった。この宮廷にずっと住んでる若葉なら、道が分かるだろう。

「入るぞ。あの、若葉……」

「だからうざいつつてんよ糞兄貴ーっ!!」

……え？

俺の目の前を、丸めた布みたいなのが飛んで……それが、青葉の顔に当たって……それを投げたのは若葉で……。

「……あ」

青葉と若葉が、同時に俺を見て、しまったという顔をした。俺は、状況を理解できない。

「……どっいっしょとっ」

s t o r y 4 2 . . . I t i s a s b y n o m e a n s a s a

うううう……風邪ひきました。更新遅くなったらすいません。

朝から鼻はぐすぐす喉は痛い。だるいし体育のマット運動で全身筋  
肉痛……。

ああ、調子に乗ってハンドスプリングをやりまくるんじゃないかな  
……。

「……あの、これは……」

若葉が、おろおろと目を泳がせる。

「ほら、これは……あれですよっ！ お、お兄様と、  
“兄弟喧嘩なるものを作ってみようと思ひまして。

ほら、大体の兄弟が、兄弟喧嘩をするのでしょうか？ でも、私とお兄様はしたことがないので、少し兄弟喧嘩を演じてみようとかと……」

……いや、嘘、ばればれだけどな？

俺はまさに苦笑、という表情で、若葉と青葉を見つめた。

「そうですよ。私と若葉で、新しい試みに……。まさか、見られるだなんて思いませんでしたか」

青葉も慌てて、若葉に話を合わせる。うん、合わせてるってばればれだもん。

「あのさ……お前ら、仲悪いんだろ？」

俺の言葉に、二人は凍りついた。

「……な、何故、そう思うんですか？」

青葉が、少し震える声で訊ねる。

「え。いや、なぜって……。ばればれだし。兄弟なんて、大体仲悪いもんだろ」

「なっ、わ、私とあに……。お兄様はっ、そ、相思相愛で……。ッ！」

「いやいやいやいや若葉さん。兄貴って、言いかけてますよ？」

「なんで、そんなに仲悪いんの隠すんだ？ 別に、よくあることだっつて」

「だ、だから、私達は仲など悪くないですよ！ 私は若葉が大好きですよ！」

青葉は汗の浮かんでいる顔で、必死に言う。いや、青葉、お前嘘下手だな。

「俺に嘘ついてても無駄。てか、青葉、お前演技下手過ぎ」

俺の言葉に、はぁーっと、若葉がため息をついた。

「……もう、糞兄貴のせいではれちゃったじゃない。どうしてくれんの。今までの努力は全て水の泡。責任取れんの？ てか、演技下手過ぎよ馬鹿兄貴」

若葉が、さつきとは打って変わって黒い表情で青葉に言う。え、ちよ、これ、「お兄様（はーと）」って言ってた可愛い女の子と、同一人物……？

「あーあ、もう、兄貴のせいよ、兄貴のせい。だから、私は馬鹿な兄貴に仲の良い兄弟のフリなんて出来ないって、お父様に言ったのに。」

兄貴から説明してよね。全部、馬鹿糞阿呆兄貴のせいなんだから」

黒若……若葉が、青葉を睨んで言う。ちょ、これ、もはや不良少女ですけど。

なのに、若葉にこんだけ言われて黙っている青葉……ではなく。

「お前妹の癖に何生意気言ってるんだよ。馬鹿糞阿呆兄貴だあ？  
どの口が言うんだどの口が。」

大体な、バレたのはお前が不注意だったせいだろ。なのに人にはつか責任なすりつけようとしやがって。馬鹿になったか？ ああ、もう馬鹿だったか」

「はあ？ 何とぼけたこと言ってるのよ。そんなだからへなちよこ王子だなんて言われんのよ、へたれ」

「ああ？ へなちよこ王子だなんて言ってるんのお前だけけどな。誰にも同意を得られない王女の方が悲しくないか？」

「この糞兄貴……」

「馬鹿妹が……」

あつという間に勃発する兄弟喧嘩。

前言撤回。ここまで仲の悪い兄弟はなかないない。

てか、王族の癖にこの口調はなんだよ、おい。

「……なあ、若葉、青葉……」

俺の言葉に、はっと俺の方を見る二人。

「なんでここまで仲が悪いのにあんなに仲の良いフリをしてるんだ……？」

俺の言葉に、若葉は苦笑する。

「そうですね……私が、この糞馬鹿阿呆南瓜兄貴と仲良くしてる訳は……」

途中、とてつもない暴言の嵐があったことは、放っておこう。

「国の為です」

……はへ？

俺はぽかんと若葉を見つめた。嫌っている兄と仲良くするのが、国の為？

「この翔麗国は、とても広い国です。人口は、5億人を超えます。そして、王女派と王子派に分かれています。……なぜ、王子派がいるのか不思議でたまらないのですけどね」

……おいおいおい、一言余分じゃね？

「そして、その王子と王女が互いに嫌い合っていると知ったら、国民はどうなるでしょう？

私達が望まなくても、王女派の国民と、王子派の国民がぶつかります。翔麗国は、大変な事態に陥ってしまうのです。

それに、国が混乱に陥っていると他国が知ったら……この、強大な力を持っている翔麗国を責める、格好のチャンスでしょう？ この国は、滅亡してしまいます」

「……なるほど。だから、お前ら仲良いフリしてんのか」

俺の言葉に、二人は頷く。へえ……王子や王女も、大変だな。

「コウキ様は、フェルトシアの魔術師ですわね」

若葉の言葉に、俺は頷く。

「どうか、この事を黙っていてももらえないでしょうか……?」  
「お願いします。翔麗国の、存亡がかかっている秘密なのです」

若葉は、俺の手を握ってきらきらとした目で見つめる。俺の首は、自然に縦に振られた。

ぱあっと顔を輝かせる若葉。

「ありがとうございますっ、コウキ様!! ……あと」

若葉は、言い辛そうに付け加える。

「コウキ様が味方だと思つと、気が緩んでボロが出てしまつかも  
しれません。」

その時は、フォローをよろしく頼みますね」

……え、え、ええええっ!!

翔麗国での滞在は、思ったより大変になりそうだ……。



s t o r y 4 3 . . . T h e b a d b r o t h e r o f r e l a t i o

今頃、私は学校です(笑)。

翌朝。俺は、ふかふかとした敷布団の上で目覚めた。

「……………朝か」

昨日は、若葉と青葉に「二人の中が悪いことは絶対にバラしません」と誓って、やっと自分の部屋までの道を教えて貰った。はあ…  
…面倒くせえ。

そんなことを考えていた時。

「カミヤ様。ご朝食の用意が整っています」

ノックがして、ドアの向こうから女中の声がした。

「あ、は、はい！」

俺はそう答え、慌ててベッドから飛び起きる。もしかして、寝坊？  
朝っぱらからルイスの小言は御免だ。

さっさと服を着替え、俺は大広間に急いだ。

\*\*\*\*\*

大広間には、昨日の立食パーティとは違い、ちゃんと椅子つきのテーブルが並べてあった。

エレナ達フェルトシアの団体を見つけ、俺は珠洲ちゃんの隣に座

る。

「遅かったわね」

珠洲ちゃんがスープを飲みながら言う。俺が来るより前に食べ始めていたようだ。

「寝坊しちゃって」

俺は苦笑して、ご飯に手を伸ばす。うん、米って旨い。

俺が朝ごはんをかつこんでいると、

「あら、コウキ様、起きたんですね」

後ろから、若葉の声がした。俺が慌てて振り向くと、若葉と青葉の姿。

昨日、本性知っちゃったからなあ……。

「あ、ここの布団って気持ちよくて……」

俺は苦笑交じりに答える。

「そうですね？ そういえば、お兄様も寝ることが好きと言って、いっぱい寝たがるんですの。

睡眠は大切ですけど、ちゃんと起きなくてはダメと、何回言ったことか。コウキ様は糞あ……お兄様と、似ているのかもしれないね」

……今、『糞兄貴』って言いかけたよね？ 俺の顔を、つつーつと冷や汗が流れる。

「いいじゃないか、寝てるのは気持ち良いんだから」

反論され、若葉はじつと青葉を睨んだ。

「何事も、やり過ぎはダメですわ。まったく、これだから……」  
「ほん」

今、絶対『これだから糞兄貴は』とか言おうとしたよね？

なんか、若葉のボロが多いんだけど……俺にバレてるからって、  
気抜きすぎじゃね？

「……コウキ、なんか、今日の若葉様変じゃない？」

ほらほら、珠洲ちゃんにも気付かれてんじゃない。俺は耳打ちして  
きた珠洲ちゃんに小声で、

「そうかな？ 普通に見えるけど」

と返した。珠洲ちゃんは怪訝そうな顔で首を傾げてたけど。

まあ……うん、俺は頑張った。それだけで十分だ。

\*\*\*\*\*

「ねえ、ルイス、コウキ、どっちが良いと思う？」

「ルイス様、コウキ、どっちが良いと思います？」

俺とルイスの目の前で、エレナと珠洲ちゃんが二枚のドレスを持

って立っている。

エレナは、ブルーとグリーン。珠洲ちゃんは、パープルとブラック。

「エレナ様は、グリーンの方がお似合いかと。珠洲さんは……やはり、パープルですかね。結婚式に黒というのは……」

「二人とも、どっちも可愛い。でも、もう少し要求を言うならもっと胸元が開いてた方が……ごふうッ!!」

俺の要求は、ルイスの拳と珠洲ちゃんの張り手で阻まれた。ただ苦笑したエレナも、心に痛いけど。

てか、俺は男の願いを言ったただけだぞ!! ルイスだって堅物な顔して、絶対心の中ではそう思ってるに違いないだろ!!

でも、二人に拒否られたのなら仕方ないならば……。

「じゃあ、うなじ。エレナはふわふわカールが魅力的だけど、珠洲ちゃんのその長い黒髪を上げれば魅力的なうなじが……ぐほおッ!!」

またもや、俺は願望を言いきることが出来なかった。今度は、珠洲ちゃんの魔法弾で。

まあ、それでふっ飛ばされたおかげでルイスの剣の餌食にならなかったわけだけど!!

「貴様は……女性に対して何を思ってるんだ!!」

「コウキ、あんた変態じゃないの!? もともと知ってたけど!!  
でも、今日は格別よ!!」

怒鳴るルイスと珠洲ちゃん。そして、やっぱり苦笑しているエレナ。

いいじゃん、普通に思うだろ、男なら！！ 男はうなじに燃えるんだぞ！現実世界にいた時、珍しく見た目覚まし時計がマスコットキャラなニュースで特集やってたぞ！！  
……が、もちろん時計くんのニュースなど、この世界の人々が知るわけもなく。

「コウキ……貴方、やっぱり……」

「ちよ、ちよ、ちよ、エレナ！！ なんて哀しげな目で俺を見てんの!？」

「おい貴様、さつさと私達も衣替えに行くぞ。結婚式までもう一時間とない」

「え、ちよっと、このなぞは迷宮入り!? ねえ、エレナちゃん!?!」

翔麗国の宮廷に、俺の叫び声が響いた。

風邪復活ーっ!!(早)。

今日は、台風で学校が午前授業でした\*。(、) \*。

……あの、はい、「作者は変態か」という質問は無しでお願いします。

「では、これより、翔麗国第一王子、汀・青葉と、翔麗国第二王女、汀・若葉の、結婚式を行います」

よく通る女の人の声が、大広間に響いた。  
数百人の人が、一斉に拍手する。うん、迫力が半端ない。

「とうとう、登場ね」

エレナが隣で呟いた。

迫力のあるピアノ演奏と共に、赤いカーテンが開いた。

青葉と若葉が腕を組んで、ゆっくりと歩む。

青葉は、ゆつたりとした青い衣装を着ている。やっぱり、古代中国風。頭には、派手な飾り。

若葉も、青い衣装だ。するすると裾を引きずっている。手には扇子を持っていて、頭には綺麗な花の飾り。

「綺麗……」

珠洲ちゃんが呟いた。

「汀・青葉、貴方は汀・若葉に対し、永遠の愛を誓いますか」

神父（らしき人）が、二人の真ん中に立って言った。

「はい」

青葉は、即答する。いやちょっと待てそれは嘘だろ、と思ったのは、たぶん俺と若葉だけ。

「汀・若葉、貴方は汀・青葉に対し、永遠の愛を誓いますか」

「はい」

いやいやいや若葉、可愛い顔して嘘言うんじゃないやねえよ、こう思ったのも、たぶん俺だけ。

だって、青葉は若葉のこと可愛いと思ってないだろうから。

「では、誓いの口付けを」

神父は、淡々と結婚式を進める。……って、え、口付け？ キス？

青葉は若葉に、ゆっくりと顔を近付ける。隣のエレナと珠洲ちゃん、二人をガン見してる。

そして、二人の唇が触れた。十秒ほどして、ゆっくりと離れる。自然に、客席から拍手が溢れた。

「ここに、汀・青葉と汀・若葉の結婚を認めます」

神父の言葉に、ヒートアップする拍手。

拍手が収まる頃を待って、最初の女性の声が、

「では、これより会食に致します。立食形式ですので、皆様、御歓談などをお楽しみください」

と言った。

\*\*\*\*\*

「青葉様、若葉様！」

エレナの声に、俺は小籠包を口いっぱい頬張ったまま振り向いた。

「あら、コウキ様。小籠包がお気に召しましたか？」

若葉がにこつと笑って俺を見る。俺は慌てて小籠包を飲み込む。熱かったけど、気にするか。

「めっちゃ旨い、これ。翔麗国の料理って旨いな」

「それは、とても嬉しいですわ」

「……貴様、もしや……」

ルイスが、目を丸くして俺を見る。ん？ 俺、なんかしたか？

「若葉様に対して、敬語を使っていないのか！？」

「え、うん。ノリでなんとなく。青葉にも。だって、なんか、うん、ほとんど年変わんねえし」

俺の返答に、ルイスはふるふる震える。あ、これは……。

「貴様！！ 何を無礼なことを！ 若葉様と青葉様は、この翔麗国の王女王子だぞ！」

なんと……フェルトシアの恥だぞ！ どう責任をとるつもりだ！」

ルイス地雷、踏んじまった。ちえ、いいじゃん、タメ語で。でも、助け船を出したのはいつも通りエレナ……ではなく、若葉だった。

「る、ルイス様。敬語などいいんですよ？ コウキ様の仰られた通り年は変わりませんし、私も敬語ではない方が、楽で良いですわ」「し、しかし、若葉様……」

ルイスは若葉が助けを出すのは予想外だったのか、少し戸惑いながら言う。

「こいつは、若葉様の身分の足元にも及ばぬほどのやつで……」「良いですよ、ルイス様。私は気にしません」

若葉に何度も言われて、ようやくルイスは口を閉じる。若葉、やっぱり良い奴かも。

「それにしても、翔麗国のお料理はおいしいですね」

エレナが雰因気を変えようと、がらりと違う話題を口にする。

「そうですね？ それは、料理長が聞いたら喜ぶでしょうね」

それまで空気と化していた青葉が、微笑んで言った。

「ええ、“翔麗国の料理は美味”と噂に聞いていたのは、本当でした」

エレナはにっこりと笑う。

「それは、良かった。好きなだけ堪能してください」

青葉の言葉に、二人で笑いあう。華やかな絵だな。

「あ、そうでしたわ」

若葉が、思い出したように呟いた。

「皆様をご案内しなければ」

「案内？」

エレナの問いに、若葉は頷く。そして、きよろきよろと辺りを見回し、声を潜めた。

「皆様の目的は、この宮廷に住んでいるという“呪術師”でしょう？」

若葉のこの言葉に、俺はこの国に来た目的を思いだした。

「もう、私達がお客様の前に出て挨拶をするなどの行事はありません。

ですから、今からご案内致します。もう、皆様揃っていらっしやいますか？」

若葉の言葉に、エレナは言い辛そうに口を開いた。

「いえ……もう一人だけ。今から連れて来ますが……驚かないでくださいね？」

エレナの言葉に、若葉と青葉は互いにきよとんと顔を見合せた。



s t o r y 4 5 . . . T h e m a r r i a g e c e r e m o n y o f

祝、ユニークユーザー一万人突破！！

ありがとうございます！！これからも、よろしくお願いいたします！！

「ジエームズ・フェルトシア。……フェルトシア王国の、第一王子です」

エレナはジエームズを、そう紹介した。若葉と青葉のぼかんと開いた口は、いつまでも塞がらない。

「ジエームズ……王子？ あの……確か……」

若葉がジエームズを見つめたまま呟く。

「ええ、ジエームズです。死んだ、と言われていましたが……申し訳ありません。あれは、嘘なのです」

エレナが少し俯いて言った。青葉が、やっと口を開く。

「これ、は……驚きました。まさか、ジエームズ王子が生きていたなんて」

「ええ。……本当に、申し訳ありません」

エレナが頭を深く下げた。ルイスも慌てて下げる。……これ、俺も下げた方がいいのかな。

「あ、いえ、そんな、頭を下げないで下さい」

青葉はおろおろと言う、が、エレナは顔を上げない。

「いえ。ずっとずっと、たくさんの国々の人々をだまし続けていたことは事実です。」

「……それに、お願いがあるのです」

「お願い？」

若葉の問いに、エレナは頭を下げながらこくりと頷く。

「ジエームズを呪術師様に合わせて頂けませんか。そして……コウキのいた世界へと、送ってほしいのです」

「じえ、ジエームズ様をつ？」

若葉は、少し裏返った声で訊ねた。エレナは頷く。

「ええ。もう、お父様の許可も頂きました。どうか、お願いします」

若葉はおろおろとしながら、ジエームズへ視線を戻す。

「あの……ジエームズ様。本当に、異世界へと行きたいのですか？

この世界とは、何から何まで違うと言う話ですよ？ ジエームズ様が行って、暮らして行けるかどうか……」

「もう、その話は何度も聞いた。私は決心を変えないぞ」

ジエームズはむくれて若葉を睨む。若葉は、しばらくしてこくりと頷いた。

「分かりました。……皆様を、ご案内しましょう」

\*\*\*\*\*

若葉と青葉に案内されて、俺達は暗い地下通路を黙々と歩いていった。

「……もつすぐですわ」

「……もつすぐですわ」

若葉が、小さな声で囁いた。遠くに、僅かな光が見える。

「……皆様。どうか、呪術師様のお気に触れるようなことは言いませんように。」

呪術師様は、強大な力を持っていらっしやいます。お怒りに触れれば……どんなことになるか。

以下にフェルトシア王国の魔術師様といえど、呪術師様には敵いません」

若葉の言葉に、俺達は息をのんだ。

呪術師って、どんだけ怖いやつなんだよ……。

「では、参りましょう」

若葉はまた前を向くと、ゆっくりと歩き始めた。次第に、光りは大きくなる。

やがて、小さい扉が現れた。光りはそこから漏れている。

「呪術師様、若葉です。兄もいます。お客様もたくさんいらっしやいます。」

入っても、よろしいでしょうか」

若葉は、扉に向かって言う。返事は無い。が、扉がぎざぎざとひとりでに開いた。眩しい光が漏れる。

「失礼致します」

若葉はゆっくりと、光の中に歩んだ。俺達も躊躇いがちに続く。

「久しぶりだねえ、姫」

入った瞬間、老婆の声があった。

中は、不気味な部屋だった。ガイコツとかなんか分からない動物の皮とかがつりさげてあって、不気味な色の液体の入ったボトルとかも置いてある。まあ、呪術師の部屋としてはイメージ通り。

「お久しぶりです、呪術師様」

若葉は、その部屋の一番奥にいる老婆に言った。老婆なのに、白髪のない、漆黒の髪だ。

瞳は、淀んだような緑。皺がたくさんあって、口が大きい。不気味なお婆さん。

服は、まさに呪術師ってかんじだな。黒い……ローブみたいなもの。床まで届いていて、足は見えない。

「お前、結局王子と結婚したんだね。あんなだけ嫌がっていたのに」

呪術師の言葉に、青葉も苦笑する。

呪術師はきつと青葉を見た。

「お前もお前だよ。あんだけ嫌がっていたのに姫と結婚したなんて。」

まったく、つまらない人生を送っているんだね、おまえらは」

呪術師はあーっとため息をついて、俺達に視線を移した。

「お前達が、姫の言っただけのお客だね」

「は、はい」

エレナが、震える声で答えた。

「私は、フェルトシアの……」

「知ってる。フェルトシア王国第二王女、エレナ・フェルトシアだろう。」

私を甘く見るんじゃないよ」

呪術師はエレナの自己紹介を遮って言った。

「す、すいませんでした」

「ふん。んで、お前がフェルトシアの魔術師、珠洲か。そしてお前達がルイス・フェユールと、母のアメリア・フィユールか。“異界から来た者”。」

お前もだね、神谷晃紀。そして……ジェームズ・フェルトシア。隠されていた王子も、来たのか」

呪術師の言葉に、ジェームズはゆっくりと前に出た。

「あの……私は、コウキのいた世界へ行きたいのです。」

あの、じゅ、呪術師様。私を、その世界へ送っていただけませんか？」

震える声で言うジエームズを、呪術師は見つめた。

「ほう……決心は出来ているみたいだね。いいだろう」

「……え？」

「思わず、俺は声を漏らした。“いいだろう”って……いいのかわからない？ そんな簡単で！ 異世界行くのお手軽すぎだろおい！」

「え？ って、なんでお前が驚くんだ」

「呪術師は俺を見てかっかつかと笑った。え、今の俺笑いポイントあった？」

「で、お前さん。アメリカ・アボットも、元の世界に帰りたくて来たのか」

呪術師の言葉に、今度はアメリカが進み出た。

「はい。アメリカへと、私のいたカリフォルニア州へと、帰していただけないでしょうか」

「いいだろう。……ただ、ね」

呪術師は、そこで一瞬言葉を止めた。

「お前の旦那さんが生きてるかどうかは、あんたが自分で調べな」

「はい。ありがとうございます」

アメリカに頷いて、今度は俺に向く、が。

「あんたは、帰りたくないんだろう。知ってるよ」

と、すぐに俺から視線を外した。おい、確かにそうだけど！ 帰るつもりないけど！ でも、俺の扱い雑じゃね？

俺が心の中でそう叫んでいるとは露知らず、呪術師はルイスへ視線を移した。

「で、あんたはどうするんだい。ルイス・フェユール。

母親と共にいるべき世界へ帰るか、この世界で王女を守って一生を過ごすか」

エレナが、ルイスを見つめている。ルイスは、ゆっくりと口を開いた。

「私は

」

s t o r y 4 6 . . . m a g i c a t e a c h e r . (後書き)

呪術師様登場。

なんか、ぼんぼん進みすぎ……かな？

「私は、エレナ様をお守りします」

ルイスは、そう言った。一瞬の迷いも無く。

「母上、申し訳ありません。ただ……」

謝るルイスに、手をかざして止めるアメリア。

「いいんですよ。貴方なら、エレナ様をお守りする道を選ぶと思っ  
っていたから。」

それに、幼い頃からこの世界で育ってきたんですものね。アメリ  
カへなんか、行こうと思わないでしょう」

そう、アメリアは優しく微笑む。母の鏡だな。

「じゃあ、ジェームズ・フェルトシア、アメリア・アボット。こ  
の二人だけだね」

呪術師の言葉に、俺達は頷いた。

「……あの、アメリアさん」

エレナが、躊躇いがちに口を開いた。

「向こうの世界で、ジェームズの面倒を見てくださいますか？  
迷惑なことをお願いしていると分かっています。でも、ジェーム

ズはまだ子供で……」

おろおろと言うエレナに、アメリカはにっこりと微笑む。

「勿論です、エレナ様。ジェームズ様のことは、責任持って私が育てます」

「ありがとうございます」

エレナは少し涙を滲ませて言う。うわ……超良い人じゃん、アメリカって。

「おい、アメリカ。私のことは、ジェームズでいいぞ。様はいらない。私はもう、向こうの世界では王子ではないんだぞ」

ジェームズがアメリカを見上げて、少しむくれた顔をする。アメリカは少し戸惑ってから、

「では……ジェームズ……」

と、小さな声で呟いた。ジェームズはにかつと笑う。

「でもね、ジェームズ」

エレナがジェームズの前にしゃがみこんだ。

「王子じゃなかったら、自分のことは“僕”って言わなきゃ。その口調も、もっと普通の男の子らしくしなくちゃね？」

「ん、分かった。わた……僕は、普通の男の子だからな」

……口調と一人称を改めたら、少し可愛げが出てきたな、うん。

「……おい、コウキ」

ジエームズが、俺の方を向く。てかさ……。

「普通の男子は『おい』なんて言わねえよ」

俺はジエームズの額をこずいた。

「コウキは五月蠅くていらいらする奴だったけど、わたし……僕に違う世界のことを教えてくれたことだけは、礼を言う。ありがとな」  
「無視かよっ!!！」

微妙に会話の成立していない会話をする俺達。それを、エレナが苦笑気味に見ていた。

で、その後ろではルイスとアメリカの、涙の別れの真っ最中。  
ルイスの涙、初めて見たかも……。

「……別れの挨拶は済んだかい」

呪術師の言葉に、エレナは頷いた。

アメリカとジエームズが、手を繋いで前に出る。

「ジエームズ様、アメリカ様。あちらの世界での、ご幸運をお祈りします」

「同じく。貴方がたの人生に、幸多くあるように」

若葉と青葉が、二人に微笑んでそう言った。

「ありがとうございます」

アメリカとジェームズは、二人に頭を下げる。

呪術師が、杖を持って二人の傍に立った。

たん！ と勢いよく床を杖で叩くと、召喚獣を呼び出すときのよ  
うな魔法陣が現れる。

ぼうつと輝く青い光が、二人をだんだんと包んでいく。

「……………」

エレナとルイス、珠洲ちゃんまでが涙を流す気配がした。

もちろん、光の中の二人も泣いている。あれ……………なんか、俺まで涙  
腺が……………。

俺が頑張って涙を堪えようとしているうちに、二人は完全に光に  
包まれた。

そして、光が消えると、そこには誰もいなかった。

「……………お元気で」

エレナが、ぽつりと呟いた。

story47 . . . Separation . (後書き)

すいません、凄く短いです。

でも、ここで切らなきゃだったので…… (汗)。

……あと、ルイス。ずっとどうしようか思ってたのですが、これによかったのでしょうか……？  
作者自身、まだ分かりません。ほんとに、どうしたらよかったのかな……。

次は最終話です。最後まで、お付き合い頂けると嬉しいです。

1ヶ月後 . . .

「おい、早くせんか!」

「ちよ、待てよ、俺こーいう服着るの苦手だつて何度……!」

城の衣裳部屋に、俺とルイスの声が響く。

今日は、エレナとレオンの結婚式だ。国王は、何故か二人の結婚を許してくれたらしい。

ソフィアまでいなくなつて、これでエレナがレオンと駆け落ちしちゃつたら大変だから仕方なく……ということらしいと聞いた。

「本当に貴様はとろいな! 何故そう遅いんだ、亀の血でも流れているんじゃないのか!」

「ああ? 俺が亀だつたらお前はなんだよ、カメモシか? ゴキブリか?」

「ちよつと、コウキあなた遅いわよ……つて、きゃああつ!」

珠洲ちゃんがドアを開けかけて、慌てて閉めた。まあ、うん、俺今まだシャツのボタン止めてなかったから。

「貴様、さつさと着換えろおおおおつ!」

衣裳部屋に、ルイスの剣が煌いた。

\*\*\*\*\*

「でも、結婚かぁ……エレナも大きくなったなぁ……」

俺は、ウエディングドレスを来ているエレナを見つめた。

「貴様何親のようなことを言っている！ 気色悪いわ！」

「ごぶっ」

ルイスの拳が、鳩尾にヒット。い、痛え……。

だって、だってだってだって。

「親な気持ちになんなきやエレナの花嫁姿なんて見れねえよ！

普通の男になった途端馬でつつこんで花嫁奪還劇になるぞ？ あ

あ？」

「貴様馬に乗れんだろうが！」

「そこつつこむのどうなんだよ！ お前やっぱりKYだな、KY

！！」

「けーわいとはなんだけーわいとは！ ちゃんとした文章で喋れ

！！」

「KYも知らねえのか、ばっかじゃねえの？ ばーかばー……」

「コウキ、ルイス」

俺達の喧嘩を邪魔したのは、白いウエディングドレスに身を包んだエレナ。

呆れた顔で、俺達を見ている。

「貴方達……本当にいつもいつも喧嘩をしているわね……」。

今日くらい、仲良くしたらどうっ？」

「エレナ……」

俺はハンカチを噛み締めてエレナを見つめる。

「ほんとに、大人になったな……ごふうっ！」

「……レオン、ちよつと」

ちよ、俺スルー！？ 俺スルーしてレオンを呼ぶの！？ ひどすぎるでしょ。

でも、そんな俺に構わずこっちにかけてくる白いタキシード姿のレオンを、エレナは満面の笑みで迎える。

「コウキとルイスと珠洲さんには、翔麗国に行く船以来、会ってないわよね？」

「うん」

レオンは俺達に向き直って、ぺこつと頭を下げる。

「お久しぶりです。あの、このたび僕はエレナと結婚させていだきまして、これからもよろしく願います」

「エレナ様と共に、レオン様のこともこれからしっかり、お守りさせていただきます」

ルイスがレオンに頭を下げる。……これ、なんか俺も言った方がいいのか？

「えつと……うん、まだ勝負は終わっちゃいねえぞ！」

俺はレオンにびしっと指を指して言う。……きよとんとすんなよ、

おい。いいか？ 世の中にはな、“浮気”ってもんがあつてだな……

…。

「貴様もいい加減にしないか」

……ちよ、ルイスにため息つかれたんですけど。まあいいや、こ  
こは男らしく、言ってやろう。

「おめでと……お二人さん」

END .

story48 . . . epilogue . (後書き)

とうとう……完結致しましたっ!!

全49部という長つたらしい作品をここまでご覧いただき、本当にありがとうございます。とうとう250ptを超えて、お気に入り登録数も70を超えて、本当に嬉しいです。

この作品はこれで終わりですが、これからも良かったら、羽月の作品をご覧頂いてもらえたら嬉しいです。

ちなみに、新作はこちらです。

<http://ncode.syosetu.com/n9146w/>

よろしければ、是非ご覧ください。

2011.9.24

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9375u/>

---

中二病な俺の異世界日記。

2011年9月24日19時23分発行